0036125000

0036125-000

366.6-Sh12ウ

近代日本労働者運動史

社会経済労働研究所・編

白林社

昭和22

AGF

366.6
Sh 12

社会経済労働研究所著

近代日本労働者運動史

日本資本主義研究叢書

白林社刊

366.6
SH12

~~366.6~~
~~SH12~~

社會經濟勞働研究所著

近代日本勞働者運動史

（日本資本主義研究叢書 1）

白林社刊
一九四七年・初版

編者はしがき

一、本研究所はここに、第一次大戰當時より現在までにいたる日本勞働者運動の發展の歷史を公けにする。これまでに日本の近代的勞働者運動の歷史をあとづけた著書・論稿は、その數決してすくなしとしないが、第一次大戰より現在まで一貫してこれを敍述し概觀したものは今日までのところいまだ一つもあらわれてはいない。したがつてこの全く未開拓の領域に最初の鍬をうちおろした本書が、いわば最初のこころみとして資料的にも內容的にも多大の缺陷と不充分さとを有することは、編者自身よく自認し認識するところである。しかるにもかかわらずあえて本書を上梓する所以は、最近の勞働者運動のめざましい進展においてあらゆる理論的實踐的分野にこうした一貫せる勞働者運動史の熾烈に要求せられつつある實狀と、他方で現在の運動そのものがすでに過去において一度批判克服せられたる同じ誤謬と失策とをなおかざりなく再生產しつつあるという切實な事態とにもとづくのである。

二、これを端的にいえば、日本の近代的勞働者運動の歷史は、いくたのおそるべき失策と誤謬・いくたのかなしむべき失敗と混亂の連續の歷史にほかならなかつた。全運動がおかしたかずかずの過誤

國立圖書館
昭和 23.2.10
購入

と失敗こそ、それを制約した客觀的諸條件とむすびついて自己をついに完全な崩壞にまでみちびく主體的要因をなしたのである。しかもこれらの過去の運動の眞の內容・それがふくむ意義と價値と教訓とは、現在何らたゞしくとりいれられ生かされていないばかりか、むしろ反對に個別斷片的な回想や記錄によつていたづらに美化され粉飾せられ、過去にたいする大衆の盲目的崇拜觀や英雄視の創出のために利用されているかの觀がある。世界に類例のない苛烈酷薄な絕對主義的天皇制の壓迫下にたぐいなき自己犧牲の精神をもつてたたかつたいくた先驅者たちの功績と成果とは、あくまでたかく評價されねばならない。しかしこのことは、かれらの事業をもふくめて全運動の歷史がおかしたかずかずの過誤や混亂を批判したり反省したりする必要がないということを、決して意味するものではないのである。廣大な未來をもつ日本のプロレタリアートおよび勤勞大衆は、その一さいの歷史・一さいの過去から何らおそるることなく學びとり吸收し、それを現在に生かさねばならない。

三、本書の記述にあたつては、最初から量的に制限をくわえてできるだけ簡潔にかつ要領よく展望・把握・概括をうるようにつとめたから、單なる事件の羅列や事實の平面的敍述のごときをさけて、まづそれぞれの段階において全運動を集中的に表現する典型的事象をとらえてこれを追究解明し・その本質的意義をあきらかにし、かくして各時期時期のすべての現象をつらぬく運動の內的連關をあとづけてゆくという獨自のやりかたを採用した。こうした集約的方法により全體としての勞働者運動の發展を、ダイナミックに描出せんとこころみたわけである。すでにのべたごとく本書は（こうした記述の仕方においてもまた運動史そのものとしても）最初のこころみにすぎないのであるから、あらゆる點で不完全なことは充分みとめるところである。資料方面ではもちろんのこと、方法的にもいまだハッキリした理論的解決にたつしていない點がすくなくない。とくに本書が農民運動のすべてを一應省略したため、それと勞働者運動との不可分の關係・それがもつ重大な歷史的意味についてほとんどふれえなかつたということは、おそらく最大の弱點といえるであろう。それで當所では、本書を基礎にあらためて明治の前期勞働者運動の時代から現在にいたる本格的な勞働者農民運動史の編さんにとりかかることとし、すでにその仕事をはじめつつある。資料その他について各位の援助をうけられれば幸甚である（なお本書で全然省略されてある明治期の勞働者運動・社會主義運動の歷史については當所がちかく公刊する「幸德秋水評傳」がある程度の役にたつであろう）。

四、本書の執筆については、渡部徹が最初全篇をかき下し、これを全體にわたつて小山弘健が監修した。渡部は過去一年間の研究と討議との結果にもとずき、一九四六年末より四七年春へかけて一應全草稿を完成させたのであつて、全體の配合・敍述の展開・資料の取捨等々すべてその創意にいずるのである。この草稿にたいしてさらに徹底的な討議がくわえられ種々の修正がほどこされて（とくに序論と結論とは根本的にかきあらためられた）、ここにはじめて成稿とされるにいたつたのである。た

編者はしがき

だし附錄の年表と系譜圖とは、渡部の作成したそのままのかたちで採用せられた。なお本書の附錄の一つとして、勞働者運動史の文獻解題をつける豫定であつたが、種々の都合によりこれは別に當所機關誌「社會經濟勞働研究」に發表することとした。本書の讀者はついてみられたい。

本書刊行のために御世話をかけた本間・長谷川・若桑の諸氏にここに感謝の意を表したい。

最後に本書にたいして遠慮のない批判をよせられることを希望する。

一九四七年八月十五日

社會經濟勞働研究所

目次

編者はしがき

序論　日本資本主義の特質と勞働者運動 …… 三

第一章　第一次大戰と勞働者運動の興起（一九一七——一九年）

I　勞働者運動興起の條件 …… 一〇

II　ストライキ運動の昂揚 …… 一二

III　勞働者の組織えの結集 …… 一五

IV　總括 …… 二〇

第二章　戰後反動恐慌とサンジカリズム（一九二〇——二一年）

I　反動恐慌の來襲 …… 二二

II　恐慌と階級闘爭 …… 二三

III　勞働者運動とサンジカリズム …… 二七

IV　日本社會主義同盟 …… 三一

V　總　括……三三
第三章　全國總連合運動と方向轉換（一九二三——二四年）
I　全國總連合運動……三四
II　日本共產黨の創立……三七
III　勞働者運動の方向轉換……四一
IV　共產黨の檢擧と「震災事件」……四三
V　總　括……四七
第四章　總同盟の分裂と評議會の成立（一九二四——二六年）
I　いわゆる左右兩翼の發生……五〇
II　總同盟第一次分裂……五二
III　評議會の成立とその活動……五七
IV　總　括……六三
第五章　無產政黨の成立と對立（一九二六——二七年）
I　組合運動から政治運動へ……六六
II　無產政黨の生誕……六七
III　勞働農民黨の分裂……七二
IV　無產政黨の對立・抗爭……七四
V　總　括……七八
第六章　日本共產黨の再建と活動（一九二——二八年）
I　解黨から再建へ……八一
II　山川イズムと福本イズム……八三
III　黨の再組織と三・一五事件……八七
IV　三・一五事件以後……九一
V　總　括……九四
第七章　合法と非合法との相剋（一九二八——三〇年）
I　日本資本主義の危機……九七
II　新黨準備會から新勞農黨へ……一〇〇
III　左翼陣營の分裂と混亂……一〇五
IV　革命運動の再建へ……一〇八
V　總　括……一一〇

第八章　戰爭と社會民主主義（一九三〇——三二年）
Ⅰ　日本社會民主主義の特質と形態……一一三
Ⅱ　社會民主主義の戰線統一……一一九
Ⅲ　滿洲事變と社會民主主義……一二三
Ⅳ　社會大衆黨の成立……一二八
Ⅴ　總　括……一三〇
第九章　革命運動の昂揚と衰退（一九三二——三四年）
Ⅰ　戰爭にたいする革命的鬪爭……一三一
Ⅱ　革命運動の打擊と衰退……一三五
Ⅲ　衰退の客觀的諸條件……一三九
Ⅳ　非常時と社會ファシスト……一四六
Ⅴ　總　括……一四九
第十章　人民戰線運動（一九三五——三七年）
Ⅰ　人民戰線の意義……一五一
Ⅱ　いわゆる「準戰時體制」……一五三
Ⅲ　人民戰線運動の展開……一五七
Ⅳ　總　括……一六三
第十一章　支那事變と勞働者運動の分解（一九三七——三九年）
Ⅰ　事變と勞働團體の變貌……一六六
Ⅱ　日無・全評の結社禁止……一六九
Ⅲ　事變下勞働者の狀態と運動の分解……一七二
Ⅳ　總　括……一七八
第十二章　産業報國運動と勞働團體の解消（一九三九——四五年）
Ⅰ　長期戰と再編成……一八〇
Ⅱ　産報運動の再出發……一八二
Ⅲ　産報運動をめぐる勞働團體の動向……一八六
Ⅳ　全勞働團體の解消……一九〇
Ⅴ　總　括……一九二
結　論　日本勞働者運動の教訓と課題……一九四

近代日本勞働者運動史

——第一次大戰より現在にいたる

目次

補論　敗戰後の勞働者運動（一九四五——四六年）

I　敗戰と民主主義革命……二〇一

II　政治運動の展開……二〇三

III　組合運動と大衆闘爭の進展……二〇八

IV　總　括……二一四

附　錄

一、近代日本勞働者運動史年表（一九一五——四六年）

二、日本プロレタリア政黨系譜

三、日本勞働團體系譜

序論　日本資本主義の特質と勞働者運動

勞働者階級による資本の束縛よりの自己解放のための運動である勞働者運動は、資本主義的生産關係の形成のときよりはじまり、資本主義が社會經濟的構成として確立されたときより本格的に展開される。近代的プロレタリアートによる實際的な組織運動と資本にたいする鬪爭とは、産業資本家による賃勞働の搾取の事實そのものに歴史的根據を有し、したがつてその發展の方向と形式・特質と速度等々は客觀的にはかかる資本主義制度とプロレタリアートのおかれた具體的な歴史的諸條件・その特殊な性質によつて規定され支配されるのである。かくて日本の勞働者運動の特質を規定したものは、何よりも日本資本主義の特徴的性格そのものであつた。

ところで日本の資本主義經濟は、その内外の諸條件のもとにながく前資本主義的諸關係のきわめて緻密な網によつてからみつかれ、とくにその政治的上部構造ではおくれた農村の諸關係に經濟的基礎をおく絶對主義天皇制の權力が近代的ブルジョアジーの權力に優位し、後者の役割を強力に補足し代辯した。何よりも自己の社會經濟的基礎と政治的支配體制との維持をはからんとする軍事的封建的帝國主義のあいつぐ對外戰爭とその成功は、植民地の收奪と搾取とによつて國内の生産力の停滯をつよめ、農村經濟えの資本主義の侵入を阻止し、その階級分解を緩慢ならしめ、なかく農民の半封建的搾取の殘存を可能ならしめた。しかもかかる植民地の收奪が一時的にせよ資本主義の外部的發展

と飛躍的成長とを可能ならしめたかぎり、ブルジョアジーはあえてこの冒險的侵略政策に同調し協力したのである。しかしこれが農村のおくれた半中世的形態と資本主義の高度な發展との矛盾と相剋とをより擴大された規模の上に再生産することは必然であり、かかる基本的な内部矛盾の上に日本資本主義は產業資本段階より獨占資本段階へ、さらにはその一般的危機の段階へと自己を發展させ展開させていつたのであつた。

いずれにせよこのように、政治的にも經濟的にもブルジョアジーが前資本主義的な遺物を清算せず、むしろこれと結合しつつ支配體制の一要素と化して政治的に反動化した日本にあつては、ブルジョア民主主義遂行の歷史的任務はすべて近代的プロレタリアートの肩の上に移轉され轉嫁されざるをえなかつた。日本のプロレタリアートがその日常的經濟的鬪爭の場面より政治的全階級的鬪爭の場面に一歩ふみいるやいなや、かれらはまづ資本の顚覆の以前に强固な封建制度の遺物を搖蕩し、ブルジョアジーが中途で放棄した一さいの民主主義的課題を達成し、かくて資本と賃勞働との自由な階級鬪爭のための鍛鍊をみずから創出し準備せねばならなかつた。資本との鬪爭の中に直接自己を組織し鍛錬しつつ、その本來の社會主義的任務の遂行以前に廣汎な民主主義的任務の貫徹をはからねばならなかつたという點に、まさに日本勞働者運動の第一の歷史的特質があり基本的特徴が存在したのである。

ところでかかる歷史的任務の達成にあたつて日本の勞働者運動は、當然絕對主義天皇制を先頭とするブルジョア地主政權の上からの壓迫と眞正面から對決せねばならなかつた。何より人民層の政治的自由の要求・民主的覺醒への動向と本質的に對立する絕對主義權力は、廣汎な民主主義的ならびに社會主義的運動の課題をになうプロレタリアートの階級的結成と進出とにたいして本能的な憎惡と恐怖とをいだき、ありとあらゆる方法手段によつてこれを不斷に抑

壓し拘束し制縛せんとこころみた。それは制度的には警察・軍隊・裁判所等をはじめ全官僚制度と行政官廳とをもつてする公然露然の干渉と妨碍・彈壓と暴行等々となつてあらわれ、他方法律的には一連の積極的な抑壓法規の實施（行政執行法・警察犯處罰令・刑法　治安警察法　治安維持法・暴力行爲取締法・勞働爭議調停法・國家總動員法・國防保安法・言論出版結社集會臨時取締令等々）となつてあらわれた。これらによつて支配階級は全人民の民主的進歩と自主的發展えのみちをすべて硬塞し、とくにその原動力たる勞働者階級の組織的擴大と政治的進出とを極力阻止し破壞せんとくわだてたのである。日本の勞働者運動が明治年代（一九一〇年前後）と昭和年代（一九四〇年前後）との二度にわたつて、未曾有の窒息化狀態におとしいれられた慘たる事實は、じつにこうした支配階級の未聞の壓迫の結果にほかならない。

以上のごとき勞働者運動の歷史的任務の特質・そこからくる支配階級の極端な反動的態度――これらはあいまつて勞働者運動をしてその當初から政治鬪爭の鋒芒に早激にかりたてねばやまなかつた。プロレタリアートの大衆的組織運動は成立早々いちはやく强烈な政治的性格をおび、その組合運動は卑近な日常的生活條件の維持改善のための運動たるよりはむしろ高度な政治運動のための一手段たる役割をもたしめられた。組合運動と政治運動・經濟鬪爭と政治鬪爭との本來的區別は抹消されあいまいとなり、すべての大衆組織は政治性を濃厚におしつけられ、かくてそれらが眞に大衆化してゆく條件と餘裕をもちえなかつた。勞働者運動の全體を早激的に政治運動化し、とくに組合運動を大衆の日常鬪爭の組織たらしめず、これを政治鬪爭の一手段と化し、かくて運動全體の大衆化を阻碍したところに、日本勞働者運動の現象上の主要特徴が存在したのである。

このような基本的特質をもつた日本の勞働者運動は、他方でまた資本主義經濟の構造的特質からくるいくたの客觀的な制約條件になやまねばならなかつた。日本資本主義の構造的特質は、勞働機構と勞働力構成との特殊性を決定することによつて、勞働者運動を制約する種々の客觀的要因をつくりだしすえつけた。第一にその經濟構成の全分野にわたるいちじるしい不均等・（たとえば農業と工業・繊維工業と機械工業・官營工場と一般工場・巨大經營と中小經營等々）は、勞働力の基本的構成をもいちじるしく不均等かつ脆弱ならしめた。すなわち近代的プロレタリアートはまづ量的に人口總數中の大なる比重をしめえず、全體としての工業人口は一九二〇年度において有業者人口の一八・八五％にとどまり、農業人口がなお壓倒的比重をしむる狀態であつた（同年度五二・四％）。またプロレタリアートの性的年齢的構成においては婦人・幼少年工が壓倒的比重をしめ、一九一九年度において婦人および十五歳未滿幼年工が全勞働者數の七〇％をしめた。さらにまた勞働者の部門別構成においても、工業部門の不均等的發展を反映して紡績・製絲・織物等の繊維工業勞働者が工場勞働者總數の大半をしめ（一九三〇年に五三・六％）、しかもその大部分が出稼的性格をもつ一時的勞働者（家計補充的な嫁入前の出稼女工）であり、三年未滿就業者たるにすぎなかつた。最後にその經營別構成においても廣汎な中小經營・零細マニュファクチュア・家内工業の存在を反映して、從業員五人以下經營の勞働者數が一九二〇年度において五人以上經營の勞働者數の二・四倍をしむるというありさまであつた。こうした勞働力の基本構成の脆弱性は、そのすべてが勞働者運動の強力な展開を阻止する上に役だつたのである。

右のような內部的諸條件とならんで勞働者運動を制約した最大の要因は、おなじ資本主義經濟の特質にもとづく勞働機構上の特徴的現象であつた。農村に典型的にみられる封建的關係の殘存・全社會生活を貫徹する强固な封建遺制は、近代的な資本對勞働の現實場面にいくたの前期的特質をもちこみ、近代的な工場の勞働組織や勞働關係をも古い內容をもつて拘束し特徴づけた。第一に農村のおくれた生產關係の殘存は中小企業や零細マニュファクチュアの直接的な家父長的隷屬關係を決定し、後者はさらに巨大經營の勞働組織に反映し、かつ資本家によるこれらの意識的な創出・利用を可能ならしめた。それは親方徒弟の關係　年期契約・前借・請負制等の形態から見習工・臨時工等の形態までありとあらゆるかたちにおいてあらわれた。とくに大工場において特徴的な位階制的勞働編制（金屬工場における工長・組長・伍長・職長・職工・女工・見習等の編制、紡績工場における四等擔任・見習生・主席工・同助手・優等工・準優等工・平工等の區別）の成立と存在は、職場の軍隊的統轄とむすびついていわば身分制的從屬關係を再版し、封建的勞働組織を再現したものにほかならなかつた。さらに農村の封建的搾取樣式（過重小作料）や生活の窮乏は、それとの相互規定において低賃銀や長時間過度勞働に集中される植民地的な勞働條件を形成させ固定化させた。これらの苛酷な勞働條件は、他方で拘禁的な寄宿舍制度や飯場組織・賞旗制や徵罰制等の特異な諸制度とむすびついて、いわゆる原生的勞働關係の支配をもたらし、勞働者をして二重の桎梏の中にしめつけ呻吟せしめたのである。最後に、かかる封建的勞働組織と植民地的勞働條件と原生的勞働關係の中にしめつけられたプロレタリアートにたいして、溫情主義家族主義にもとづく慈惠的福利施設によつて、あるいわ天皇制的イデオロギーの直接の注入によつて、物質的精神的な陶冶と訓練とが間斷なくくわえられた。とくに家父長的觀念や天皇を絶對不可侵とする考え　國家えの幻想や官吏にたいする屈從觀・佛教的諦觀や修養の倫理・排外主義思想や軍國主義イデ

オロギー等々が、ありとあらゆる方法によつて不斷に宣傳されたたきこまれ、勞働者大衆および一般人民を無智と無抵抗との狀態におしとどめるべく努力されたのである。

以上のごとき勞働機構の一さいの特徴は、さきの勞働力の構成的特質とならんで、客觀的に勞働者運動の發展にマイナスの影響をあたえるものであつた。それらはいずれも日本の勞働者運動を制約づけ、それにいくた特殊な性格と內容・方向と形態とを生ぜしめ、それのただしい發展を阻止し歪曲する上に大きな作用をおよぼしたのである。すなわちおくれた勞働機構は大なり小なりプロレタリアートの階級意識の獲得をおくらせまたはにぶらし、近代的な勞働者の組織運動に大なる障壁をきずきあげた。これとならんでさきの不均衡な勞働力構成もまた、直接間接に階級闘爭の正常的な發展を拘束し、勞働者の結集と組織化とに大なる不均衡をもたらさずにはおかなかつた。そしてこれらの客觀的條件がつくる障碍や制約こそ、究極において勞働者運動の主體的（すなわち組織上戰術上）の諸徴表をうみだす根據をなし、その方向を決定する最大の要因をなしたものにほかならない。

こうした諸條件に究極的に規定されて、たとえば勞働者運動を組織上でながく特徴づけた非民主主義的機構と運營とが現象し、また戰術的にそれを特質づけた左右えの不斷の偏向がたちあらわれた。すなわち一應階級意識を獲得し組織的結集をとげた人たちあいだですら、民主主義的自覺や訓練が充分ゆきわたらず、封建的意識のつよい殘滓の影響の下に元來近代的民主主義的組織たるべき種々の團體・組織をして非民主主義的機構たらしめ、その運營も組織大衆の積極的な自主的參加によるよりは一部幹部が大衆の意向を代行し大衆はこれに盲目的に追隨するといつた・いわば相對的獨立性と固定性とをもつた執行部による大衆の支配と指導というごとき組織上の顚倒的事態を現出させたのである。しかも他方で一般の廣汎な未組織大衆と組織勞働者のあいだ・組織勞働者內部における一般分子と少數精鋭分子とのあいだには、思想的にもいちじるしい較差を生ぜしめたから、戰術上の基準はあるときは意識のおくれた大衆のみに偏倚して極端な追隨主義・妥協主義・日和見主義に墮し、あるときは逆に少數先進分子の上にのみ指向されて極端な公式主義・極左主義・小兒病等をうむにいたつたのである。かくて組織における非民主主義的機構と運營・戰術における左右兩極えの不斷の偏向は、日本の勞働者運動を一貫してながれる主要現象をなしたのであつた。

大體右に概括的にのべたごとき日本資本主義の特質にもとずく勞働者運動の基本的特質、すなわち主として政治體制のそれからくる運動の早激的な政治化と大衆性の缺如・主として經濟構造のそれからくる運動の全般的制約と巨大な不均衡・この兩者からくる組織運動の非民主主義的機構と思想上戰術上のおそるべき懸隔と偏向――これらが結局それをして最後まで少數者運動の枠外にでることをなからしめたのである。第一次大戰後より今次の敗戰まで、勞働者運動の組織率はついに全勞働者數の七・九％（一九三一年）をこえることがなかつた。しかもこの少數者運動にあつても統一的集中的な運動の進展はみられず、終始一貫內部の分裂と相剋とのくりかえしがみられたのである。こうした限定された勞働者運動といえども、しかしいかに多くの苦難と犧牲と流血と英雄的闘爭とを必要としたか、いかに多數の生命と情熱とを犧牲とすることによつて、その一歩一歩がおしすすめられねばならなかつたか――これらについては以下に順次叙述してゆくであろう。

第一章　第一次大戰と勞働者運動の興起（一九一七——一九年）

I　勞働者運動興起の條件

一九一四——一八年の第一次世界大戰によつて、日本資本主義は量的にも質的にも飛躍的發展をとげ、いわゆる本格的な獨占資本主義の段階にはいつた。すなわち地理的に戰爭の中心から遠くはなれてその慘害をこうむらず、しかも戰勝國としての政治的利益の上に中立國としての莫大なる經濟的利益をも獲得したからである。

資本のかかる急激なる發展は、當然にその對極としての勞働力の發展を內包する。いま工場勞働者についてみても一九一四年の八十五萬三千人より一九一九年の百五十二萬人えと一・七八倍の增加をしめし、しかもかかる增加は紡績業等の輕工業の發展を追いこす重工業のヨリいちじるしい發展を反映し、重工業勞働者の總數中にしめる比重は一九一三年の一九・二％より一九一九年の二七・八％へと飛躍的に激增したのである。このことはまた性別構成における男子勞働者の比重をも大ならしめ、その比重は男女總數中一九一四年の三七・五％より一九一八年の四五・八％えと增加するにいたつた。他方で生產の集積・資本の集中の發展は、當然大規模工場への勞働者の集中となつてあらわれ、この期間に千人以上規模の勞働者數が全體においてしめる比重は一九一四年の一七％より一九一九年の二二％えと急增したのである。以上のことからこの大戰は、近代的工場勞働者・近代的プロレタリアートを大量に創出し、それも單なる出稼的家計補充的女子勞働者ではなく終身的な重工業成年男子勞働者の創出ならびに近代的大規模工場えのその集中等によつて、ここに勞働力の組織的結集のための根本的な前提條件を準備したのであつた。

このように大戰を通じての日本資本主義の未曾有の發展繁榮は、勞働者運動興起のための客觀的な前提條件を作りだすと同時に、それの主觀的條件や心理的動因をもまたみずからつくりだした。何より大戰による資本の繁榮はそのままプロレタリアートにとつて一般的な生活條件の改良向上を意味せず、むしろ物價の騰貴と賃銀上昇とのギャップによつてその一般的條件の惡化をひきおこした。かくて一九一八年の夏富山縣の一漁村から口火をきられたいわゆる米騷動は、たちまちにして全國に波及し、當時の日本人民大多數が資本の繁榮をよそにいかに飢餓と窮乏の中に呻吟せざるをえなかつたかを、赤裸々に明證してみせたのである。かくのごとき生活の一般狀態の惡化は、勞働者ならびに勤勞大衆のあいだに廣汎な日常的不滿をよびおこし堆積せしめた。

このようにして勞働力構成の變化・生活條件の惡化にともなう日常的不滿の增大は、客觀的にも主觀的にも勞働者運動の昂揚えのみちをきりひらいた。この昂揚えの最初の大きな心理的動因となつたものは、一九一七年ロシア第二・第三革命の勃發にほかならない。その意義と內容を理論的に把握することはできなかつたにせよ、かがやかしい勞農兵士ソヴェトによる政權獲得・プロレタリアート獨裁樹立の嚴たる事實は、長い期間忍從と諦めと拘束との中にあつた日本プロレタリアートの胸奧に力づよい希望と階級的自覺とをよびさますには充分であつた。そしてロシア革命を契機としてヨーロッパ各地におこつた革命的波の高まりは、各國のブルジョアジーや支配階級を震驚させ恐怖させた

それだけ、プロレタリアートや勤労大衆の志気を鼓舞し希望をたかめた。とくに日本では大衆の威力はあいついで前記米騒動として眼前に展開され実證せられた。この米騒動は組織的形態をとらず偶發的暴動のかたちをとつたため時にして鎮壓せしめられたとはいえ、その結果は寺内軍閥内閣の倒壊、最初の政黨内閣としての原敬内閣の成立をもたらし、この暴動の中心たりし都市勞働者をして人民の大衆行動の威力の大きさを深くつよく感得せしめたのである。

かくのごとくその一さいの前提諸條件の整備とそれに口火をあたえる國際的國内的諸事件の勃發とによつて、長いあいだかの「冬の時代」の中に屈從し沈默せしめられていた日本の近代的勞働者運動は突如として歴史の前舞臺に登場し、ここにかがやかしい・だが同時に苦難と痛苦にみちみちた本格的展開のみちにはいつたのである。

II　ストライキ運動の昂揚

前記のごとき物價の騰貴と賃銀の上昇率とのあいだのギャップにもとずくプロレタリアートの飢餓と窮乏とは、まず自然發生的に賃銀値上を要求する經濟闘爭としてあらはれる。この自然發生的な經濟闘爭は、大戦末期の一九一七年を劃期として急激に展開されていつた（第一表・第二表）。自然發生的に戦かわれたこれらの闘爭が工場勞働者就中プロレタリアートの基幹部隊たる重工業勞働者に領導されたことは、一九一九年發生のストライキ總數中、工場勞働者總數中の二七・八％をしめる重工業勞働者がその二七・九％（人員においては三三％）をしめたという事實に明示された。このことは、大戦末期よりその直後へかけてのこのストライキ運動の昂揚が、大戦を通じての重工業勞働者の絶對的相對的增加によつて大いに原因づけられたことをものがたるものである。

しかしながら廣汎な經濟闘爭の展開もいまだ自然發生的端初的形態であるにとどまり、組織的な闘爭の形態と手段とをとるまでにいたらなかつた。加うるに膨大な超過利潤の獲得による資本家側の余裕と世界的デモクラシーの風潮その他により、大衆的不滿は往々ストライキへ移行するまでに解決し、あるいはストライキに入つた場合でも短期間に解決することが多かつた（第三表）。たとえば一九一九年の爭議統計によつても、爭議件數二千三百八十八件中ストライキへ發展したもの四百九十七件（二〇・八％）、人員にして三十三萬五千人中六萬三千人（一八・八％）に過ぎなかつた。

このように自然發生的であり從つて闘爭力も微弱であつたにもかかわらず闘爭によつてきたえられつつあつたプロレタリアートは（後にふれるごとく）組織と團結の必要をまなび、組合へ結集しはじめるとともに、その闘爭をも次第に秩序ある組織的闘爭へと發展せしめた。すなわち一九一九年には、それ以前において多くは暴力と器物破壊によつて特徴づけられつねに暴動の名のもとにしめされた鑛山爭議においてすら、九州の諸炭坑・生野銀山・足尾銅山・釜石鑛山等の大爭議にみられるごとく秩序ある組織的闘爭がたたかわれ、これによつて鑛山プロレタリアートの近代的陶冶をしめしたのである。しかもかゝる秩序ある組織的

第一表　ストライキ發生狀態

年次	件數	參加人員
1914	50	7,904
1915	64	7,852
1916	108	8,413
1917	398	57,309
1918	417	66,457
1919	497	63,137

第二表　ストライキ要求事項中賃銀値上要求の占める割合

年次	件數(%)	人員(%)
1917	76.4	85.3
1918	81.5	89.0
1919	80.5	84.1

第三表　ストライキ繼續日數別比率(%)

年次	4日未滿	4日—10日	11日以上
1917	76.1	21.1	2.7
1918	79.1	17.2	3.5
1919	73.0	25.1	1.8

闘爭にたいしてすら爭議鎭壓のために軍隊の出動をみたということ（釜石鑛山爭議）は、注意さるべきであろう。

とにかく闘爭をつうじてのプロレタリアートの成長は、一九一九年國際連盟の成立・國際勞働會議の開催・それぞれの勞働代表の參加（たゞし日本において正式に勞働團体の代表の出席をみたのは一九二五年であつたが）・八時間勞働制問題の議案提出等、勞働者に社會的地位と權利をみとめる國際的風潮に刺戟せられ、この年に入つてついにストライキは大工場大鑛山をおおい次第に組織的計畫的にたたかわれるにいたつた。ことにその中でも八時間勞働の要求は、まさに全國を風靡するかの觀を呈した。この運動は川崎・三菱兩造船所爭議をキッカケとして阪神地方をおおい、まもなく全國的に八時間勞働制が爭議のスローガンとしてかかげられ、その結果多くの工場において採用されるにいたつた。一九二〇年十一月末における八時間制採用工場は、大阪八十五、兵庫四十三、東京二十九、神奈川十、福岡七、北海道三、合計二百十四工場をかぞえ、その業種別では船舶車輛機械工場の半數がこの制度を採用したのである。しかしわれわれがこの運動で注意しなければならないのは、八時間勞働制の要求が勞働時間短縮の要求としてよりもむしろ賃金基準の勞働時間を八時間とし・それ以上を殘業とみとめる實收賃金値上要求の意義をより多くもつていたという事實である。

さて闘爭によるプロレタリアートの陶冶と成長は、爭議の戰術においても共同闘爭（足尾銅山爭議）・ピケッティング（砲兵工廠・足尾銅山・池貝鐵工所爭議）・妨害戰術（東京市電爭議）・サボタージュ（川崎造船所爭議）・爭議報告の印刷（東京市電爭議）等、さまざまの新しい進歩した方式をうみださせた。勿論こうしたプロレタリアートの闘爭戰術の發展は必然にプロレタリアートの闘爭目標たる資本家官憲側の戰術の進歩をもたらし、ロックアウト（秀英會爭議）・ブラックリスト作成・資本家の横斷的結合（新聞連盟）・官憲軍隊の出動等、新しい手段を採用せしめた。特にかれらは、米騒動以後闘爭過程における治警法第十七條の適用による檢擧が勞働者の闘爭心を煽るのみで效果をあげえなかつたため、一應闘爭中はその適用をさしひかえ闘爭の波がしづまるや假借なくこれを發動して爭議指導者を檢擧し（砲兵工廠・足尾銅山・釜石鑛山爭議等）、もつて闘爭を壓殺せんと企てるにいたつた。この惡らつなやり方のため、騒擾罪で檢擧せられる者年々じつにおびたゞしい數にのぼつたのである。

III　勞働者の組織えの結集

右にのべたごときプロレタリアートの闘爭えのたちあがりは、かれらが過去十余年間團結禁止法ともいうべき治安警察法のもとにほとんど未組織のまゝに放置せられていたため、なお自然發生的なたちあがりにすぎなかつた。それで日本ではヨーロッパ等と異なり、プロレタリアートは日常的生活扶助の組織である勞働組合にまづ結集し漸次階級闘爭へ發展していつたのではなく、かえつて闘爭をつうじて組織と團結をまなび結集しはじめたのであつた（第四表）。

一九一九年を劃期とする組合の急激なる設立、すなわちストライキの波が全國的になつて以後三年にして組合の急激なる增加をみたということは、なによりも闘爭をつうじてストライキをつうじて日本の勞働組合が設立せられ發展していつた過程をものがたるのである。最初一九一七年にストライキの波の急激な昂揚をみたとき、勞働組合として多少ともみとめうるものとしては友愛會と歐文工組合信友會があるにすぎな

第四表

年次	勞働組合設立數	設立數
1912		5
1913		6
1914		6
1915		4
1916		13
1917		14
1918		11
1919		70

かつた。しかも友愛會は一九一二年鈴木文治によつて創立せられ、元來キリスト教的博愛主義的勞働者の相互扶助教育團體であり、いわゆる勞資協調的組合たるにすぎず、その年度大會のごときも澁澤榮一や地方長官の出席をもとめてきわめて平穏裡に終始し、ストライキ等にはほとんど關係するところがなかつた。それにもかゝわらず當時の意識的勞働者は、これを唯一の勞働者の組織として全國的に參加したのであつて、一九一七年には組織を關東・横濱・關西の三地方にわかち、一九一八年六週年大會當時には百二十支部三萬の會員を擁するにいたつていた。これにたいして信友會は歐文印刷工を基軸とし、一九一八年には東京の全印刷工に組織を擴大し、經濟界の起伏によつて數次の鬪爭の經驗をつみ常にもつとも果敢に鬪爭の先頭にたち、そのために不斷に迫害をうけ數回にわたり組織を破壞せられていた。これは當時のいわば純勞働者的組合であつたが、とにかくプロレタリアートの組織としてはこの二組合にすぎなかつたのである。

勿論日本の組合運動としては、すでに明治三十年代勞働組合期成會或いは日本鐵道矯正會等の金屬・運輸勞働者の組織が近代的勞働組合の端初的形態として出現し活動した歴史があるのであるが、それらは種々の事情によつて彈壓せられていつしか離散し、かえつてマニュファクチュア的勞働者である印刷勞働者のみが協調的色彩をおびることによつて當時の唯一の勞働者組織としていきのこることができ、それが新しい社會的情勢の展開に應じてここに當時の意識的勞働者の先頭にたつべき役割をになつたというわけである。とにかくこのようにわが國近代勞働組合は當時ほとんど存在しなかつたということ、しかも未組織大衆がつぎつぎに鬪爭にたちあがり、鬪爭の過程において組合に結集していつたこと、したがつて組合はいわばストライキ連盟として鬪爭の過程における鬪士の個人的關係を中心に結集し、一工場一組合的に成立し、しかもストライキの中から生れたということ——これらの特徴的な事實は、それらの新組合の上に戰鬪的色彩を濃厚にもたしめると同時に鬪爭が終ればそのまゝ消滅するという危險性をもたしめた。それで結局當時では組合として永續していくためには指導者の個人的努力に負うところが大であつた。このことは近代的組合の中へ親分乾分的な、あるいは朋黨的な組織と關係とをもち込む結果ともなり、戰鬪的であることと近代的民主的であることとが一致しない勞働組合の獨自な「日本型」ともいうべき性格をうちだしたのである。

かゝる特異な型を示しつつも組織えの結集は急激に進行し、鬪爭の經驗はプロレタリアートをしてますます戰鬪的にさせねばおかない。友愛會をとつてみても、一九一九年第七回大會には澁澤榮一らのかわりに社會主義者堺利彦・生田長江らが出席し、「大日本勞働總同盟友愛會」（のち一九二一年日本勞働總同盟となる）と改稱し、鈴木文治個人の會からいまや一個の組織的勞働者團體にまで發展した。それはまた大會宣言においても、「勞働者は人格である」「我等は決して機械ではない」「個性の發達と社會の人格化の爲に生産者が完全に教養を受け得る社會組織と生活の安定と自己の境遇に對する支配權を要求す」ると、鬪爭的組合へ一歩をふみだしたのであつた。

ところでこのような戰鬪的小團體の割據する當時の狀態にあつては、資本家側が超過利潤を擁し余裕をもつていたことと世界的革命的風潮によつて動搖していたこととによつて、一工場一組合の鬪爭をもつてよく大衆的要求をみたすことができたのであるが、しかしより强力な鬪爭力發揮のための共同鬪爭もまたこの一九一九年ごろから端初的にあらわれはじめた。すなわち足尾銅山爭議に際しての在京勞働團体協議會と「我々勞働團體はあちゆる勞働爭議に對し、これ單なる部分的問題にあらずして吾人勞働階級全般の消長に關するものと認め、今後一切の情實を廢して一致

協力もつてこれが貫徹に努めんことを期す」というその決議、あるいは東京十大新聞社製版部員の總罷業における（結局敗北に終り組合崩壞を結果したとはいえ）勞働組合革新會對新聞社主連盟の正面衝突、又信友會が八時間勞働制をかかげて計畫したる東京百六十有余印刷所の總罷業等々のごとき、すべて共同闘爭えのプロレタリアートのめざましい成長發展をしめすものであつた。しかも單なる經濟闘爭すらただちに官憲の壓迫・治警法による彈壓につきあたらざるをえないことは、日常的經濟的闘爭にたちあがつたばかりのプロレタリアートをして急速に政治的に自覺させずにはおかない。當時官憲は、「ストライキの中心は常に賃金問題であるから警視廳ではこの經濟方面の問題にたちいつて干渉することはできぬ」と稱しつつ、「徒黨をくんで休業し」「傭主をおびやかし不穩の擧にいで治安に害をおよぼす場合には警察として干渉する」と宣言して、あらゆる闘爭を極度に壓迫したのである。

こうした勞働者の組織えの結集・政治闘爭えの覺醒のために、さらに有力な促進的役割をはたしたものは、いわゆる世界的デモクラシー風潮にのつた日本の小ブルジョア的インテリゲンチャの民主的自由獲得運動であつた。たとえば一九一八年に進歩的インテリ高野岩三郎・北澤新次郎・今井嘉幸・賀川豐彦・新居格等の指導のもとにおこなわれた憲法撤廢運動や、一九一九年に尾崎行雄・島田三郎ら急進ブルジョア的政治家と今井嘉幸・賀川豐彦ら指導のもとに展開された普選運動が、それであつた。とくに後者は勞働團體・小市民の熱狂的支持をうけ、各地に普選期成同盟あるいは普選期成勞働者大會がもたれ全國を震撼せしめた。このほかにも第一回國際勞働會議（一九一八年）勞働代表選出をめぐる大衆的反對運動があり、これは政府が勞働團體の存在を無視してお手盛の勞働代表選出全國協議會と稱するものを農商務省に開催し恣意的に勞働代表を決定せることに對し、友愛會・信友會が中心となつて廣汎な反對運動を展開したのである。

これら大なり小なり小ブル・インテリの民主主義的要求と結びつく大衆的運動の展開は、大戰による日本資本主義の未曾有の繁榮を機としてこの國にもブルジョア民主主義がまさに開花しうるかのごとき觀をあたえ、今やまさにたちあがつたばかりのプロレタリアートの上に明るい希望をなげあたえたから、意識的勞働者は歡呼してこの運動に參加したのである。次章にのべるごとく一九二〇年の反動恐慌はたちまちにしてかゝる幻想を粉碎してしまつたが、社會的勢力として漸く自己を確立せんとする過程にあつた當時のプロレタリアートにとつて、その大衆的組織運動の展開や政治的意識の成長のためにこれがはたした促進劑的役割は決して小さくなかつた。

かくのごとくたとい明確な階級意識に指導せられたのではなかつたにせよプロレタリアートを基幹とする大衆的社會的運動の急激なる勃興は、支配階級自體にたいして大きな衝撃をあたえ、かれらは經濟界の未曾有の活況の中にも新たなる社會勢力の進出に深甚な顧慮をはらわざるをえなかつた。ブルジョア政黨たる國民黨・憲政會が普選を政綱にかかげ、治警法撤廢問題が政府部内の一部で問題となり、あるいは勞働組合法制定が内務省救濟事業調査會で日程にのぼせられ、又政府作成の組合法案にたいして大阪工業會がすすんで横斷組合を法文化することを建議した事實等々——これらすべてはこの間の消息を直截にものがたるのである。

最期に世界的デモクラシー風潮・革命的氣運の横溢が日本のインテリゲンチヤの一部に大きな刺戟をあたえ、ここに勃興せんとする勞働者運動えのインテリの大量的參加をみたこと（たとえば佐野學・麻生久・上條愛一・山名義鶴・棚橋小虎・和田巌・宮崎龍介・赤松克麿・丸岡重堯、その他）、かれらの參加がよい意味につけ悪い意味につけその後の勞働者

運動に大きな影響をあたえたことをつけくわえておかねばならない。

IV　總　括

第一次大戰は、日本資本主義に飛躍的發展と未曾有の繁榮をあたえた。これは同時に資本の對極としての勞働力の構成の高度化、その組織えの結集の條件をあたえるものであり、これに國際的國內的諸事情が作用するに及んでここに日本の勞働者運動は急激な爆發的興起をしめすにいたつた。しかもこの時期は日本資本主義にとつてはまさに獨占資本主義の本格的確立展開の時期であり、遲れて發達した日本資本主義はこれに先行する一切の時期をつうじて充分に民主的自由を許容する余裕をもち得ず、ことに勞働者運動を成長せしめる機會を何ら許さなかつたから、ここに新しく勃興した勞働者運動は產業資本確立期という上向的發展の時代に伸長した先進諸國のそれとくらべてあらゆる點でいちじるしく態樣を異にせざるをえなかつた。

かくてその長い先行運動の傳統の不充分さと相もかわらぬ極端な人民の自主性抑壓の大衆政策とによつて、日本の勞働者運動は早くも顚倒的發展のみちを余儀なくされた。すなわちプロレタリアートの日常的生活擁護の組織たる勞働組合の結成・存在・發展から階級鬪爭えのみちではなくして、鬪爭とともに鬪爭の結果として大衆組織である勞働組合が設立される。したがつてそれはなによりもストライキの機關であり、大衆の日常組織たるべき基礎をかためることが主體的にも客觀的にもきわめて困難なのである。もちろんこのことは勞働組合が階級鬪爭の學校たることの否定を意味するものでないにせよ、訓練も敎育も不充分なこの勞働組合に課せられた使命は、最初から余りにも大きすぎた。結成せられたばかりの組合の肩の上に、經濟鬪爭も政治鬪爭も一度におおいかぶさつてきた。このことが勞働者運動として發展しまた組合を維持していく上にインテリの力、あるいは組合指導者の個人的努力に依存することを大ならしめ、一方において大衆的基盤から浮きあがつた組合運動と、他方では英雄主義的小團體の割據＝ボス的存在という事態を結果し、ここに早くも大衆的運動えの發展をはばむ大きな主體的要因をつくりだしたのである。

しかしいずれにせよ第一次大戰のこの期間は日本資本主義史上未曾有の躍進時代であり、勞働者運動もここに飛躍的に擴大され、いわば日本プロレタリアートが階級的勢力としてのその巨歩をふみだしはじめたのである。

第二章　戰後反動恐慌とサンジカリズム

（一九二〇——二一年）

I　反動恐慌の來襲

第一次大戰の過程における日本資本主義の未曾有の繁榮は、大戰というこの國にとつては外在的原因にもとづく特殊の時期であつた。したがつて大戰終結後一九二〇年にいたつて、中部および東部ヨーロッパの過少生産が、米・英・日等の過剩生産と結びついて世界的恐慌をまきおこすや、日本資本主義はその中でも最もつよい打撃をうけたのである。戰時中熱病的な好景氣をつづけた日本の經濟社會は、この年三月にいちはやくその矛盾を爆發せしめた。この恐慌によつて生産は急激に減退し株價は暴落し、銀行の破綻・工場の閉鎖・中小企業の沒落等があいつぎ、さらに構成的失業者の大群を發生せしめた。これより日本資本主義は、いわゆる戰後の一般的危機の時代における世界資本主義の一環として、「恐慌から恐慌へよろめく」時代に入るのである。

いずれにせよこの戰後最初の恐慌は、大戰中はたした日本經濟の役割と戰後の世界經濟の變動との間の不均衡の爆發をじめすものであり、その後の日本經濟の全過程はかゝる不均衡を是正するためジグザグなコースをたどつて、新たなる世界經濟へ自己を適應せしめんとするその苦悶を呈しつづけたのである。したがつて日本資本主義はこの恐慌以後たゞちに下向期に入つたのではなく、發展のテムポがいちじるしく弱められたとはいえなお當分の間上向的發展を世界經濟の中につづけてゆくことができた。それで大戰中の繁榮が法外なものであつただけその衝撃も大きなものであつたけれども、これによつて大戰中の超過利潤が一擧にしてついえさつたわけではなく、いちじるしく窮屈となりはしたが産業機構の餘裕も全的には喪失したわけではなく、それは恐慌につづく數年のジグザグの發展の中に「なしくずし的」に喪失されていつたのである。

II　恐慌と階級闘爭

突如たる恐慌の來襲は、ようやく大衆的日常闘爭と組織的結集にたちあがりはじめたプロレタリアートに大きな打撃をくわえた。生れたばかりでまだ幼弱をまぬがれなかつた勞働組合は、資本の攻勢に直面してたちまち組合の沒落、組合員の離散という思わざる危機に當面し、その無組織的自然發生的な闘爭の成功的結果はのぞみがたく、ために全體として闘爭の波は一時減退せざるをえなかつた（第五表）。したがつて闘爭の内容も積極的攻勢的なものから、自己防衛的守勢的な方向えと重點が移行し、その闘爭期間もしだいに執拗にながびいてゆく傾向をとるにいたつた（第六表・第七表）。もつとも恐慌による打撃は各産業各經營に均等におよんだものでもなければ、また恐慌によつて一擧に産業機構の餘裕が喪失したわけでもなかつたから、闘爭の轉換は整一的に機械的に行われたのではなかつたが、しかしいずれにせよ昂揚せんとする組織運動や大衆闘爭がこれによつ

第五表

ストライキ件數及參加人員

年次	件數	參加人員
1919	497	63,137
1920	282	36,371
1921	246	58,225
1922	250	41,503

て一時的打撃をうけたことは疑うべくもなかつた。

この時期の闘争の特徴として、團體交渉權の獲得や工場委員會制要求の諸運動があらたに重要性をもちはじめたのも、右のごとき全體として闘争の防衛的傾向（賃銀引上よりは賃銀維持、賃銀維持よりは組合そのものの維持）を

第六表

ストライキ要求事項別比率

(%)

年次	賃金値上	賃金値下反對	待遇改善
1919	80.5	3.4	4.8
1920	53.5	22.7	9.9
1921	39.4	15.4	27.6
1922	28.4	26.8	22.4

第七表

ストライキ繼續日數別比率

(%)

年次	4日未満	4日—10日	11日以上
1919	73.1	25.2	1.8
1920	59.2	29.1	11.7
1921	52.0	30.1	17.1
1922	47.2	36.0	16.8

端的に表明せるものであり、一九二一年には爭議總件數のうち四〇%がこれらの要求によつてしめられるにいたつたのである。この團體交渉權獲得・工場委員會制要求の意味するところは、交渉の相手方として組合をみとめよといふ點にあつたのであり、それゆえにプロレタリアートの自主的組織を何よりもおそれる資本家側は頑強にこれを拒否し、その大半は慘敗におわらざるをえなかつた。たまたま要求を貫徹した組合（大阪電燈・藤永田造船所・住友伸銅所等）でも、かならずしもかゝる要求の實質的意義について充分な知識をもたず、したがつて運營にあたつてこれを勞働者側に有利にもちいることができず、結局實質上價値なきものとして放棄するありさまであつた。それはかえつて逆に、資本家側自體に工場委員會を諮問機關として利用することによつて、戰鬪的勞働者組織を驅逐することに役立つものであることをおしえたから、かれらはむしろすすんで工場委員會を實施せんとくわだて、一九二一年には關西地方においてだけでも五十工場（その從業勞働者八萬人）で實施せられた。この結果翌一九二二年にははやくも、經營協議會と工場委員會返上　團體交渉權放棄が組合運動の内部からさけばれるにいたつたのである。

ところで元來民主的自由すらほとんど存在の餘地のなかつた日本では勞働者運動は一貫して資本家官憲の公然隱然の壓迫をうけなければならなかつたが、恐慌は一段とこの抑壓體系を強化し、それはただちに警察軍隊による彈壓・全國の無賴漢どもによる暴力團體の組織とその組合破壞・爭議鎭壓のための暴力行使（國粹會）・あるいは御用組合をもつてする闘争的組合の解體または發生防止——等々の新手段となつてあらわれた。こうした御用組合によるきりくすしと暴力團體による爭議破壞の好例として、われわれは八幡製鐵所爭議をあげることができる。

日本の軍事産業の心臟ともいうべき八幡製鐵所二萬三千の勞働者は、日本勞友會（製鐵所職夫を基幹とし淺原健三・西田健太郎らに指導さる）の指導のもとに一九二〇年二月大ストライキを決行し、明治三十四年開設とともに點火せられ爾來滿十九年間一秒間もきえたことのなかつた熔鑛爐の火をけしとめて、日本の爭議史上に一エポックを劃したのである。これよりさき一九一九年、日本勞友會の活動とともに當局は工手・筆工・組長・伍長ら役付をうごかして御用團體を設立し、これに對抗せんとくわだてていたが、この策謀效を奏せぬ間に大衆の不滿は急激にたかまりストライキに突入したのである。このストライキにまさに入らんとするとき伍長・組長らはこれを阻止せんと身をもつてふせいだが、大衆はこれら役付の制止を押しきつてストライキを決行した。一方官憲はただちに八幡・小倉・門司・若松・その他各地の警察署・小倉憲兵隊を總動員し、爭議團幹部三百人あまりを檢束してその統制を破壞するとともに、かねて準備中の協調組合（勞働組合同志會）を急遽結成せしめて爭議團を内部からきりくずしにかかつた。この結果爭議團の歩調はみだれ、ストライキ開始後六日目にして職工の大半は就業するにいたり、ストライキは一應完全

な敗北に終つた。しかしその結果は、憲兵・警官監視のもとに強制勞働という以前よりヨリ惡化せる狀態を現出したため、かえつてこの闘爭によつてたかまつた勞働者の反抗意識をあふり、旬日にしてふたたびそれは爆發し、勞働者の反抗意識は指導部をうしなつた組合の統制力を超え、まさに大河の決する勢をしめした。その結果官憲の彈壓はますます激化するとともに、當局の内意をうけた國粹會九州支部（製鐵所人夫供給業者を基幹とする）の策動となりそれによる暴行・脅迫・仲裁強制等あらゆる強行手段の發動となり、ここに爭議團はまさに刀折れ矢つきるの狀態においこめられて完全に屈服するのやむなきにいたり、一時は會員八千人をようした勞友會も壞滅にひんしたのである。

以上の八幡製鐵所ストライキが若き勞働者運動の上にもたらした諸教訓は、第一に組長・伍長ら役付がプロレタリアートにたいする統制組織であり、プロレタリアート内部において組織・結集をきりくずすべき支配階級の據點をなすということ、第二に暴力團が支配階級と共通の物質的基礎の上にたつものであるということ、第三に闘爭組織破壞のために御用團體が利用されるということ——等々であつた。

こうした資本家官憲側の新しい態度と手段がもたらした諸教訓は、勞働者の組織運動に意識的無意識的に新しい反應をひきおこさずにはいなかつた。從來のごとく闘爭組織が一工場一組合的の小規模にとどまるかぎり、それがいかに合法的な秩序ある行動をとつても、また旺盛な闘爭意志によつてささえられてもとうてい有力たりえないことがつよく一般に感得されてきた。強烈な資本の反動攻勢に對抗するために、一工場一組合のごとき劣弱な組織ではもはや不充分なることがしだいに明白になつてきたのである。こうした組織運動上の自己反省はすでに前時期からもおこなわれており、前章にのべたもののほかに全日本鋲夫總連合會の成立（一九一九年）のごときがみられたが、この一九二〇年に入つて芝浦製作所爭議を期として續發した池貝鐵工所沖電・機製作所・吉村鐵工場・明電舍・共立電機會社・大塚鐵工所等の爭議において、罷業團が大同團結し一時的ではあるが共同闘爭機關として連盟會を設立したことは注目すべき進歩であつた。またこのおなじ年の五月一日の日本最初のメーデーの開催・その結果としての友愛會・信友會・正進會・交通勞働組合・啓明會等在京十五勞働團體による勞働組合同盟會の成立・日本海員組合の成立（一九二一年）等々——すべて日本プロレタリアートの團結の擴大と共同闘爭えの意慾をしめすものであり、この動向は次章にのべるごとく勞働組合全國總連合の運動として發展するのである。

以上のべたごとく恐慌は必然に資本の攻勢を強化し、ためにプロレタリアートの闘爭は困難を加重した。爭議は自己防衛的色彩をつよめ、小組合が合法的闘爭をくわだててもかえつて壓殺せられ、組合維持のために闘わざるをえない狀態においこまれた。ここから、一方では闘爭方法の變更・他方では組織の強化という二つの道において、かれらのすべては反省を要求せられた。しかし闘爭のかかる困難にもかかわらず階級意識はしだいに廣汎にひろがり、運動は近代的プロレタリアートの領域にとどまらず、一九二一年岐阜縣蘇原村小作爭議の勝利をキッカケにたちまち全國農村に擴大し、農民の闘爭組織として日本農民組合の設立（一九二二年）にまでつきすすんだ。さらに藝術部面においても小牧近江・金子洋文らによる「種蒔く人」の創刊（一九二一年）にみられるプロレタリア文藝運動の誕生となり、ここに勞働者運動はあらゆる社會的思想的分野の進歩的運動と歩調をととのえるにいたつたのである。

III　勞働者運動とサンジカリズム

プロレタリアートの組織的結集・鬪爭による陶冶は　ストライキ等の大衆行動においてきわめて秩序ある行動と確固たる統制をしめしはじめたが、恐慌によつて強化された反動攻勢にたいしてはさきにものべたごとく合法主義的鬪爭戰術も無力を曝露せざるをえなかつた。けだし支配階級はいかに秩序ただしくしかも當然みとめられるべき要求をかかげた運動にたいしても、それが自主的運動であるかぎり極端な恐怖をしめし、常軌を逸した取締りをもつてのぞむのを常とする。支配階級にとつては人民は「よらしむべく知らしむべからざる」對象であり、下からの要求によつて何物かあたえらるべきではなく、當然あたえられるべきものですらそれは「お上のお慈悲」としてあたえられるべきであつた。したがつてかれらが産業機構の餘裕の喪失とともに狂暴化せざるをえず、やがて危機的情勢の切迫とともにいわゆる「白色テロル」の恐怖時代を現出するにいたつた事情については、のちに充分ふれられるであらう。

いずれにせよ反動攻勢の荒波に對處して變通自在に全面的に大衆の鬪爭を指導すべく、當時の組合はなおあまりに力よわく經驗もとぼしかつた。したがつて大衆は鬪爭にしめされる官憲・資本家側の狂暴な振舞に猛烈な反抗心をあおられ、組合の指導をのりこえて爆發せざるをえなかつた。當時各所で工場破壞の直接行動がしばしばおこなわれたごときも、その端的な一つのあらわれにすぎなかつた。かゝる現實の鬪爭場裡における現象と動向・意慾と希望とを肯定し理論づけたものこそ、サンジカリズムの理論にほかならなかつたのである。もちろんこの理論が前面におしだされてくるのには、またそれだけの歷史的社會的理由が存在した。なによりかの「大逆事件」以後長い冬の時代をたえて生きのびた日本の社會主義者たちの間には、大なり小なりアナーキズムないしアナルコ・サンジカリズムの思想がつよい影響をもち、その主流を形成していた。それでこの前後にかれらがヨーロッパ各國の社會黨ならびに第二インタナショナルの大戰勃發當時における裏切りと議會主義的社會主義の破綻とについてつよく宣傳しつつあつたところへさらにくわえて廣汎な人民大衆を熱狂せしめた普選獲得運動も一九二〇年二月第四十二議會における野黨三派の普選案の上程と議會解散・總選擧後の第四十三議會での「普選法は國體をあやうくするもの」との理由による否決等によつて、ふかい失望を一般になげあたえた。人民大衆は今にも普選によつて議會に登場しうるかのごとき幻想をいだかせられただけその失望も一そう大きく、それは社會主義者の宣傳と相まつて急速に政治えの熱意を喪失せしめてしまつたのである。

かかる基本的條件の存在によつて、サンジカリズムはたちまち勞働者運動の指導的理論となるにいたつた。サンジカリズムはいまさら詳述するまでもなく、經濟的直接行動＝ゼネラル・ストライキによつて資本主義を變革し、賃勞働者を賃銀の鐵鎖より解放しうるとなし、一切の政治運動を否定しさるのである。それは組織的日常鬪爭により大衆を一歩一歩訓練し革命化させるのではなく、革命的英雄主義的鬪爭によつて一擧に革命を達成せんとするものであり、きわめて革命的であると同時にきわめてロマンティークな性格をもつていた。かかるサンジカリズムの思想は何よりも當時のプロレタリアートの運動を正當化し理論づけ、明日にも革命は到來するかのごとき明るい希望をあたえたから、それがたちまち勞働者運動の唯一の指導理論と化したのもふしぎではなかつた。しかも當時資本家階級は（さきにものべたごとく）大戰中の超過利潤を一擧に喪失したわけではなく、なおある程度の餘裕を有していたから、これに正面からたちむこうことによつて官憲の彈壓をまねくよりもむしろ執拗ないやがらせ戰術、あるいわ工場破壞えの恐怖等の方法によつて有利な結果をみちびくことも可能だつたわけである。

このようにしてサンジカリズムが勞働者運動の指導的理論となるや、その影響はいたるところにあらわれてきた。たとえば普選運動の昂揚とともに友愛會が一九一八年その主張中に普選運動をくわえてより一年たらずして、翌年には早くも普選運動是非について關東側と關西側とに論議がたたかわされ、一九二〇年には普選主張の主勢力たる關西同盟においてさえ大會で普選放棄が決議され、一九二一年秋の全國大會では（成立しなかつたけれども）「主張中より普通選擧の一項をのぞき總同盟罷業の一項目をくわうべき」提案がはなばなしく論議せられ、翌二二年大會においてはついになんらの討論もなく普通選擧の一項目がその主張中より削除されるという事態をみた。そしてじつに一九二一年當時、勞働團體にして普選運動をなすもの、わずかに官業勞働組合にぞくする一部をのぞいてまつたく影をひそめるにいたつたのである。この思想はまた經濟闘爭のなかにも濃厚にあらわれ、一九二一年足立製作所爭議（東京）をキッカケとして、日本鐵工會社・關池製作所・ナップホルツ時計會社・大阪電燈會社・藤永田造船所・石川島造船所等々の各ストライキにおいて枚擧にいとまないほど直接行動戰術が採用され、中には「生産管理」のスローガンをかかげたものさえあつた。

もちろん當時において、かかるサンジカリズム的運動にたいして批判がまつたくなされなかつたわけではない。一九二一年一月總同盟棚橋小虎は、その機關誌「勞働」誌上に「勞働組合に還れ」という一文を發表して、サンジカリズム的行動の非現實的空想的傾向をするどく批判したのである。しかしそれはまた「勞働組合をつくつてその力で勞働者の地位を改善しよう」という組合主義的偏向をしめすものでもあつたから、とうとうたる當時のサンジカリズム風潮に壓倒せられ、社會主義者よりは痛烈な攻擊をあび、當時の勞働者運動におけるインテリの指導的地位にたいする反感も手傳つてかえつてインテリ排擊運動をまねくという結果をきたした。すなわちそれは足尾銅山ストライキをキッカケとしてインテリ指導者麻生・棚橋排擊運動として發展し、さらに友愛會對正進會および信友會の對立・友愛會の勞働組合同盟會脫退・友愛會東京連合會驅擁とますます紛糾をかさねていつたが、これなど當時のサンジカリズムの支配的狀況をしめす有力な證據であつた。

しかしこのようにサンジカリズムは革命的氣風をつよく勞働者運動の內部にふきこんだとはいえ、勢のおもむくところ非現實的空想的傾向にはしり、ついには「まず十人か二十人の御定連が集つて革命の翌日を空想して氣焰をあげるか、巡査を相手に革命的行動にいで一晩の檢束をうけ、大いに反逆の精神を滿足させる」（山川均）ていの極端な狀態を現出せしめ、大衆運動たるべきプロレタリアートの運動をしだいに大衆から隔絶させてしまつた。かくてサンジカリズムは現實の實踐において勞働者運動の指導的理論にたえないことを漸次しめすにいたるのであるが、それが決定的に曝露せられ指導理論たる地位を喪失するにいたつたのは、次章にのべる全國總連合運動においてであつた。

IV　日本社會主義同盟

「社會主義と階級闘爭は今日の資本主義社會の過程から發生するものではあるが、社會主義的意識はプロレタリアートの階級闘爭の必然的直接的成果ではなく、階級闘爭の外部から階級闘爭の內部へもちこまれたものである」（レーニン）。したがつてまたプロレタリアートの階級闘爭は、社會主義と結びつくことなしには革命的たりえない。この意味において一九二〇年二月の日本社會主義同盟の成立は、まつたく端初的でありまたきわめてみじかい生命しかもた

なかつたにせよ、日本のプロレタリア運動と社會主義とを結合させた點において重要な意味を有する。

社會主義同盟は當時の無政府主義・共産主義その他社會主義的諸團體の合成體として、社會主義者の統一的組織と社會主義運動の大衆化を目的として設立せられたものであつて、設立參加者としては小川未明・岡千代彦・大杉榮・堺利彦・島中雄三（文化學界）・岩佐作太郎（北風會）・高津正道（曉民會）・山川均・山崎今朝彌（横濱赤旗會）・赤松克麿（新人會）・麻生久（總同盟）・布留川桂（正進會）・橋浦時雄（北郊自主會）・加藤勘十・京谷周一（鐵夫總同盟）・近藤憲二（東京勞働運動同盟會）・水沼辰夫（東京勞働組合同盟會）・前川二亨（交通勞働組合）・延島英一（信友會）等々、當時のあらゆる傾向の社會主義者と勞働運動家とを網羅していた。これは長い間雌伏と分散とを餘儀なくされていた日本の社會主義運動をはじめて統一化したものであつたから、當時階級意識をもつてきた勞働者達はこの社會主義同盟の中にプロレタリア階級のための鬪爭組織をみいだそうとして歡呼して參加したのである。しかしこのようにたんに社會主義という名のもとに雜多な要素を包含した團體が眞に實質的な運動をなしうるわけがなく、それは實踐運動の具體的進展にほとんど貢獻するところなく內部的に理論抗爭をつづけ、一九二一年五月第二回大會においてアナーキズムとボルシェヴィズムの理論的對立の結果解散を命ぜられ、間もなく結社禁止となつて消滅してしまつた。

かくのごとく同盟自體はせいぜい示威的宣傳的效果をもつたにとどまつたけれども、ここにはじめて社會主義と勞働者運動がむすびつかんとしたこと・この結果として今まで雜然と社會主義の名のもとにとりあつかわれていた諸分子が無政府主義と共産主義との二大方向に明確にわかれたこと・これをつうじてプロレタリアートの階級鬪爭に强力な指導的中核が絕對に必要なことが覺知されたこと——等々によつて、かくて日本共産黨設立えのキッカケをなしたという意味において、それが演じた客觀的役割はけつしてちいさくはなかつたのである。

V　總　括

第一次大戰の過程に自然發生的に生長しはじめた日本のプロレタリアートが漸く組織的結集へ向わんとしつつあるとき、たちまち反動恐慌の來襲するところとなつてそれはまずこの國において開花するかにみえたデモクラシー運動を蕾のうちにもぎとつてしまつた。恐慌は大戰中のこの國の繁榮が異常であつただけそれだけ强烈かつ深刻であり、そのためわかきプロレタリア運動にたいする打擊もまた大きかつた。その結果階級運動は自己を擴大するよりまえに、まず自己をかたくまもらねばならなかつた。恐慌とともに加わつた反動攻勢もプロレタリアートの組織を破壞しさることはできなかつたが、しかし鬪爭によつていまだ充分訓練され教育されていないプロレタリアートはかかる强壓に對して自己をまもるためにサンジカリズムにたよらざるをえなかつた。素朴ではあるがすべてを明快にわりきつたサンジカリズムの思想と理論とは、日本においてすでに一定の傳統的素地があつたところへ當時の國際的鬪爭の影響が加つて一擧に日本のプロレタリアートをとらえ、この時期の勞働者運動をつよい色彩でいろどつたのである。當時なお幼弱な日本のプロレタリアートにとつて、これは一度は必然にとおらねばならぬ通路だつたとはいえ、その結果は大衆的鬪爭たるべき勞働者運動をして逆に大衆から隔絕した少數者運動へと導き、鬪爭の實踐においてつぎつぎとみずからの破綻を暴露しなければならなかつた。それがこのようにしてもたらした消極的役割は、他方でそれが革命的な氣風をプロレタリア運動にふきこんだ功績とともに、充分評價され判斷されなければならぬであろう。

第三章　全國總連合運動と方向轉換

（一九二二——二四年）

I　全國總連合運動

すでにみたごとくプロレタリアートの階級的成長と組織的結集とは、一九一九年を劃期として急激に昂揚したが、（第八表）、しかしかかる昂揚も量的にはなおきわめて微弱であり（一九二三年の組織率三・一％）、質的にも前章でのべたようにストライキ運盟より生れた一工場一組合的な小組合が壓倒的であり、したがつてそれは割據的な朋黨的色彩を多分に有するものであつた。それでかかる組織上の脆弱さが恐慌後の反動攻勢の強化によつてたちまち暴露せられるや、ここに小團體相互の援助と協力がつよく要求されだしたのも當然であつた。すでに一九一九年の足尾・釜石の鑛山大爭議に際しての都下各勞働團體のなした應援決議・一九二〇年の富士紡東京押上工場にたいする勞働組合同盟會の熱烈な應援・一九二一年全國西におおつた大爭議における全國勞働團體の蹶起——等々は各組合間の連絡を强化し連帶意識をたかめており、それにくわえて組合の共通運動も、一九一九年の國際勞働會議勞働代表官選反對運動や普

第八表

勞働組合及組合員數

年次	組合數	組合員數
1918	107	不詳
1919	187	〃
1920	273	〃
1921	300	103,412
1922	389	137,381
1923	432	125,551

選運動を經て一九二〇年社會主義同盟えの各組合の參加・とくに同年第一回メーデー以後のメーデー闘爭——等々をつうじて、單なる勞働組合の闘爭力强化のための一時的提携よりすすんで永續的結合にいたらんとする機運にむかいつつあつた。一九二二年の全國的總連合運動は、じつにかかる要望と動向のクライマックスであつた。

全國的總連合運動の最初のあらわれは、一九二二年四月の總同盟關西同盟會における「名實相伴う全國的總同盟を組織するためには日本勞働總同盟の解體をも辭するものにあらず」という決議であり、さらに具體的な總連合運動えの第一歩は、東京における第三回メーデーの報告會における「全國的總連合のできることはのぞましいことであり、爾否にかかわらず我々は誠意をもつてこの計畫の進行に協力しよう」との申合せであつて、その結果東京全勞働組合の總連合問題第一回協議會が開催され、ここに具體的日程にのぼせられたのである。

その後迂餘曲折をへつつも一九二二年九月三十日にいたつて、ついに日本勞働組合總連合創立大會（大阪）が開催せられるはこびになつた。當日の參加組合五十九・代議員數百六人・代表された組合員總數二萬七千四百八十人と稱せられた。堺利彦・山川均・大杉榮らもこれが傍聽席に姿をあらわし、さながらこの大會は當時の日本における勞働者運動の全勢力と社會主義者の全精鋭とを一堂に會せしめた觀があつた。しかるに大會は當時の二大思潮であるアナーキズムないしアナルコ・サンジカリズムとボルシェヴィズムとをそれぞれ背景とする自由連合論と集中的合同論の對立論爭となり、ただちに官憲によつて解散を命ぜられ、總連合運動はここにあえなく決裂に終つてしまつたのである。

この總連合運動の瓦壞が・アナ・ボルの對立という明白な思想上の對立の形でしめされたのも、當時アナ・ボルの論爭の焦點が現に進行しつつあるロシヤ革命とそのプロレタリア獨裁を支持するか否かというきわめて明白な問題に

あつたために、大衆にとつても高遠な理論をまつまでもなく實際の立場から自己の去就を容易に決定することができたからであつた。しかし實際においてかかる對立の底にあつたものは、總同盟對反總同盟系の根ぶかい組織上感情上の對立にほかならなかつた。これは當時有力な全國的勞働團體としては總同盟以外になく、したがつて組合運動においてそれがつねに主導的地位をしめたのにたいして、群小の小組合の反感はけつして小さくはなかつたのである。かかる小組合を指導し理論的に小英雄主義的割據をうらづけたのが正進會・信友會を據點とする大杉榮らのアナーキストであり、對立はすでに以前よりインテリ排擊運動とそれに續く友愛會の勞働組合同盟會脱退・失業對策協議會における對立等として表面化しつつあつた。總連合大會はかかる對立を決定的に暴露し決裂せしめたにすぎないのである。大たい自由連合論は小組合により自己の地位を確保するためにきわめて好都合であり、小團體の利己心を滿足させる意味においてそれはなによりも強力な支持をえていた。したがつてアナ・ボルの對立という指導精神上の思想的對立は、事實は小團體利己心を扮裝する理論とそれにたいする鬪爭を意味するものであつた。それゆえにまた指導精神としてのアナーキズムないしはサンジカリズムは總連合決裂を頂點として急速に瀕落したにもかかわらず、割據主義的小組合の分立狀態はけつして消滅することなく、のちには社會民主主義的日和見主義的理論とむすびついて組合運動をながく拘束したのである。

それはともかく指導理論としてのアナーキズムないしサンジカリズムは、それがもつとも明白な否定的態度をとつた當のロシヤ革命がその後現實的に歷史的に成功し、好むと好まざるとにかかわらずプロレタリア獨裁が否定すべからざる事實となるにおよんで急速に理論としての生命をうしなつてしまつた。また日常鬪爭においてもその後ワシントン條約の成立・軍縮による建艦計畫の中止による造船産業を中心とする大量的失業者の發生・不況の深化等につれてかれらの直接行動的鬪爭は大衆の日常的不滿をかえりみるかわりに空想的自慰に墮して大衆から遊離し、かえつて過激社會運動取締法案立案にみられるごとき抑壓の强化をまねき、プロレタリアートはここになんらかの形において運動の行詰りを打開せねばならぬ狀態となつたから、この點でもサンジカリズムは急速に指導理論たる地位をうしなうにいたつたのである。したがつてかかるサンジカリズムの瀕落という消極的意味において、當時の反對理論たる「ボルシェヴィズム」は一應の勝利をおさめることができた。

II　日本共產黨の創立

さきの日本社會主義同盟は雜多な社會主義分子を包含したため實踐的に何らプロレタリアートの鬪爭を統制し指導することなく單なる內部抗爭に終つたが、當時すでに社會主義者および意識的勞働者の間に、プロレタリアートの鬪爭を强力に推進するためには單なる思想團體やその連合體である日本社會主義同盟のごときものでは無力であり、反動期における强壓に對抗して日常經濟鬪爭に勝利をうるためにもまた分散的朋黨的組合運動を集中化し大衆化しさらに革命化するためにも、一つの强力な政治的指導の中心が絕對に必要であるということがつよくかんじられつつあつた。これにくわえてかれらは、ロシヤ革命の成功が鐵のごとき革命黨ボルシェヴィキによつてはじめて達成せられえたこと・プロレタリアートの社會は勞働者の革命的前衛黨の指導なくしては實現せられえないこと——等をふかく銘記せしめられたから、ここにすすんで一九二二年六月日本プロレタリアートの前衛として日本共產黨を創立するにい

たつたのである。

戰後はじめて日本のプロレタリアートがもつにいたつたこの新しい黨の構成分子は、第一に明治以後十餘年の試練に節を曲げなかつた古參社會主義者の主流・第二に大戰後の急激な運動の中から頭角をあらわした革命的勞働者・第三におなじくその前後に成長しはじめた革命的インテリゲンチャの三つの要素であつて、その直接の母胎をなしたものは、先年來よりサンジカリズムとの鬪爭の中にうまれまた活動しつつあつた多くの共產主義的小團體であつた。そして結成への直接の契機をなしたものは、この一九二二年一——二月モスコウにコミンテルン（國際共產黨）が開催した極東民族大會であつて、中國・蒙古・朝鮮・フィリッピン・ジャバ等とならんでこれに出席した日本の少數の革命的分子が、東洋諸民族解放の嵐のごとき雄叫びの中にはじめて日本における革命的前衛黨結成への具體策を決定したのである。

このようにして日本共產黨は、從來散在せる思想團體・勞働團體中の共產主義者（すなわち當時の社會主義運動・勞働者運動におけるもつとも優秀な分子）を糾合して結成されたのであるが、その創立が全運動にたいしてもつた劃期的意義はどこにあつたであらうか。まづ第一に、これによつて日本のプロレタリアートは國際的プロレタリアートとかたく結びつけられ、ただしい意味で日本の運動ははじめて國際的革命運動の有機的な一環となるにいたつた。第二には、これによつて日本のプロレタリアートは、もはや單なる職業的ないし宗派的集團の指導に依存することなくかかる集團・團體を克服して自己の階級全體の利害を代表し階級全體のために鬪爭する眞の階級政黨をもつことができた。第三に、これによつて日本の全勞働者運動ははじめて一さいの改良主義的議會主義的幻影を克服し、爾來一貫してその終極目標・最終目的をみうしなうことがなくなつた。第四に、これによつて日本プロレタリアートははじめて支配階級の法律に拘束されざる、すなわちその合法性のそとに存在する不屈不撓の黨をもつことができた。およそこうした諸點において、この黨の創立は日本のプロレタリア運動史上、眞に劃期的意義をもつたのである。

日本共產黨が當面した第一の緊急任務は、勞働者のあいだにおける小ブルジョア的な思想や古いサンジカリズムの思想、あるいは他方であらたにおこりつつあつた議會主義的思想にたいして徹底的に鬪爭し、これを粉碎し克服することであつた。そしてその上に勞働者大衆をして强力な階級的政治鬪爭におしすすめ、同時に組織上での偏向を是正してこれを廣汎な大衆的基礎の上にすえつけることであつた。このため黨は「大衆へ」「政治鬪爭へ」の二つのスローガンをかかげて鬪いにのぞみ、これをひろく大衆に宣傳するために當時の非公式の機關誌「前衛」に山川均をして「無產階級運動の方向轉換」を發表せしめた。

その要旨は、「日本無產階級運動の第一期はまづ少數前衛分子が自己のすすむべき目標をはつきりみることであつた。すなわち思想を純化し徹底化することであつた。それがために少數精鋭分子は本隊たる大衆をうしろにのこして進出したが、いまや少數分子は敵のために本隊からたちきられる危險がある。そこで無產階級運動の第二期はこれら少數分子が徹底し純化した思想をたずさえて後方にのこされた大衆の中にかえつてくることでなければならぬ。『大衆の中へ』は日本の無產階級のあたらしい標語でなければならない。われわれ當面の運動はこの大衆のじつさいの要求に立脚しなければならぬ。われわれの運動は大衆の現實の要求の上にたち、大衆の現實の要求から力をえてこなければならぬ。われわれは無產階級の大衆の當面の利害を代表する運動、當面の生活を改善する運動、部分的の勝利を

目的とする運動を今日よりもいつそう重要視しなければならぬ。われわれはいやしくも資本家の支配と權力との發露するあらゆる戰線において、無產階級の現實の生活に影響するいつさいの問題にたいして單なる否定の態度から積極的鬪爭の態度にうつらねばならぬ。政治的否定は消極的であつて、政治的對抗が眞に積極的なる戰術である」——というのであつた。

この方向轉換論の中にはなお當時の小ブルジョア的な、なかんずくサンジカリズムの濃厚な思想的殘滓がふくまれていた（たとえば山川は普選實施後においても無產階級は選擧權を放棄すべしとなし、したがつてこの意味において政治行動とは惡法の撤廢・勞農ロシヤ承認等の政治的スローガンをもつてする示威的行動にかぎられざるをえなかつた）のであるが、しかしそれにもかかわらず、これはその他のあらゆる文書による宣傳・種々の集會や組合內の實際鬪爭における黨員の組織的活動等によつて、プロレタリアートをして急速に政治鬪爭の方向へおしすすめる上に大きな役割をはたしたのである。

このようにして日本共產黨は創立早々運動のただしい指導のために努力し貢獻したが、全體としてはなお小ブルジョア的指導者と分派主義の力が強く、單なる宣傳機關以上にでることができなかつた。それは內部の思想上の小グループをそのまま殘存させ、全體としても大衆から孤立した一にぎりの集團たるにとどまつたから、大衆は黨の存在をしらず黨もまた組織的に工場勞働者との結びつきをもちえず、結局眞の革命的政黨としての威力を發揮するまでにいたらなかつたのである。

III　勞働者運動の方向轉換

反動攻勢の强化・プロレタリアートの鬪爭の困難の增大・サンジカリズム理論の指導性喪失・日本共產黨の創立とその組織的宣傳——こうした一連の事實の上に、今や全運動の根本的な方向轉換は不可避のものと化してきた。何より從來の運動にたいする批判がもつとも有力に「ボルシエヴイズム」の立場からなされたこと・しかもそれがまさに實踐的に鬪爭の最弱點をつきえたことは、いわゆるボルの勝利のかたちにおいて方向轉換の不可避性をひろくかつふかく大衆の中にしみこませるに充分であつた。

その影響は早くも、一九二二年十月總同盟大會におけるそれの左翼化としてあらわれた。すなわち大會宣言において「プロレタリア解放のため犧牲的に奮鬪すること」が聲明され、從來の協調的綱領にかえて戰鬪的綱領が採用されさらに國際勞働會議を否認し、これが壞滅を期する決議や勞農ロシヤ承認等が可決され、かくていちじるしく鬪爭主義的色彩を濃厚にしたのである。ここにその方向轉換を典型的にしめす例として新舊綱領を比較すれば、一九一二年制定の舊綱領が「一、我等はたがいに親睦し一致協力して相愛扶助の目的を貫徹せんことを期す」「一、我等は公共の理想にしたがい識見の開發・德性の涵養・技術の進步をはからんことを期す」「一、我等は共同の力により忠實なる方法をもつて、我等の地位の改善をはからんことを期す」ときわめて微溫的なるに比して、この年の新綱領は「一、我等は團結の威力と相互扶助の組織とをもつて經濟的福利の增進ならびに知識の啓發を期す」「一、我等は斷乎たる勇氣と有效なる戰術とをもつて資本家階級の抑壓迫害に對し徹底的に鬪爭せんことを期す」「一、我等は勞働者階級

と資本家階級とが兩立すべからざることを確信す。我等は勞働組合の實力をもつて勞働者階級の完全なる解放と自由平等の新社會の建設を期す」として、明確な階級闘爭の見地に立脚しているのである。

さらに翌一九二三年に入るやかかる「政治闘爭へ」の傾向はますます現實化せられ、前年度には勞働團體内で問題にもされなかつた過激社會運動取締法案・勞働組合法案および小作爭議調停法案にたいして、猛然たる三惡法反對の大運動が展開され、東京・野田・大阪・京都・八幡等において反對示威運動が擧行され、政府をしてついに同法案の議會不提出を聲明せしめるにいたつた。さらにこの運動は、失業者運動となりメーデー闘爭となつて一段とその内容を明確にしてゆき、この間各組合はきそつて勞農ロシヤ承認および對露通商促進をスローガンとしてかかげたのである。

かかるプロレタリアートの左翼化と闘爭力の增大は、必然的に支配階級の態度を硬化せしめずにはおかなかつた。そのため積極的組合破壞・爭議彈壓の强化・反動團體の跳梁（赤化防止團）等は激化したが、しかしそれらをこえてプロレタリアートは野田醬油・新潟鐵工所爭議にみられるごときかがやかしい闘爭ぶりを發揮した。ことに總同盟組合員大衆の中から左翼勢力が成長しきたつた結果は、第五回國際勞働會議の勞働代表選出にさいし政府がプロレタリアートの壓力におされて一千名以上の勞働組合を選擧母體にくわえたにもかかわらず、總同盟は機械運合勞働組合・芝浦勞働組合らとともに同會議にたいする反對運動をおこない、他の勞働團體に選擧權放棄を勸告し、さらに國際勞働會議事務局長アルベール・トーマにたいし强硬なる抗議書を送るなど、めざましい進出ぶりをしめしたのである。

これらすべての事實は、支配階級にプロレタリアートにたいする恐怖と、したがつてこれにたいする斷乎たる處置を決意せしめるに充分であつた。かくて大戰後の勞働者運動にたいする最初の上からの政治的大反擊は、一九二三年六月の第一次日本共産黨檢擧および關東大震災を機とする言語に絶した社會主義者・戰闘的勞働者・朝鮮人虐殺事件として展開され、それは同時にプロレタリア運動の内部に大きな衝擊をあたえることとなつたのである。

IV　共産黨の檢擧と「震災事件」

プロレタリアートの闘爭力の强化・その左翼化と政治闘爭への轉換等にたいして度はずれた恐怖をかんじた支配階級は、その組織的彈壓の第一歩として一九二三年六月五日突如共産黨にたいする「曉の手入れ」をおこなつた。天皇制政權はこれを國體破壞の一大陰謀事件として、「光榮ある歴史上、かくのごとき不逞の徒の組織的跳梁は空前のことである」と惡煽動のかぎりをつくした。この檢擧によつて黨はその指導部および活動的な黨員の一部を獄中にうばわれはしたが、しかし檢擧と組織的惡宣傳にもかかわらず黨を支持する戰闘的勞働者たちはけつしてひるまなかつた。むしろこの檢擧によつて大衆はかえつて日本共産黨の存在をしり、黨にたいする漠然たる支持ないしは共産黨の本質と役割についての認識の方向にかたむいたのである。

この共産黨事件の餘燼いまださめやらぬ九月一日、關東大震災が勃發し、たちまちにして京濱地方は灰燼にきしてしまつた。その被害は東京府下のみにても燒失家屋三十萬戸・死者十萬人・罹災工場九千（工場總數の九一％）・失業勞働者五萬人と稱され、關東地方の各勞働組合事務所もほとんど燒失、組合員は四散し組合運動は一時完全に停止するにいたつた。この大災害は共産黨檢擧以後全面的な政治攻勢にうつらんとしつつあつた天皇制政權にとつてまさに絶好のチャンスをあたえた。「鮮人襲擊」の流説は公報をもつて全國につたえられ、官許の私刑團たる「自衛團」の暴

行は各所に無數の朝鮮人虐殺事件を惹起した。戒嚴令はしかれ、治安維持の緊急勅令が發布せられた。軍隊と警察は自警團員を取締る代りに保護を名として多くの「主義者」・朝鮮人を檢束し、あるいは強制的に戒嚴地域より退去せしめた。一きいの社會主義的民主主義的分子（一定の組織にぞくするとぞくせざるとに關せず）がすべて大なり小なり追求されつけねらわれ、生命の危險にさらされた。有名なかの憲兵隊本部における高等主任甘粕大尉の大杉榮およびその妻伊藤野枝ならびに甥なる七歳の幼兒宗一の慘殺事件や、平澤計七・河合義虎・北島吉三・近藤廣藏・佐藤欣治・吉村光治・加藤高壽・山岸實司・鈴木直一ら九名の勞働運動者にたいする慘殺事件（龜戸事件）のごとき、單にその表面にあらわれた典型的事例たるにすぎなかつた。支配階級の意圖するところは、むしろこの機會をとらえて社會主義者・戰鬪的勞働者を絶滅し、あたかもさきの一九一〇年（明治四十三年）前後におけるごとき社會運動の窒息化をふたたび實現せんとするところにあつたのである。そのためかれらは勞農ロシヤの救援船レーニン號の入港を拒絶し、これを放逐するという非常識ぶりをさえ發揮した。

もちろんこうした時代錯誤的計畫が成功するべく勞働者運動はもはやあまりにも確固たる基盤と根據とをもち、强靱な組織と歷史的必然性との上にたつていた。しかし支配階級の狂態がもたらしたこれら一連の事實は、プロレタリア運動の內部に大きなショックをあたえずにはおかなかつた。その第一は、プロレタリアートがなお現實的に無力であり、一朝事あるときになんら有效な力をもちえないということにたいする反省であつて、それは運動の大衆化と組合の實力養成への必要をより一そう切實に痛感せしめた。第二は、これら一連の反動的事實に對する恐怖心の發生であつて、なかんずく共產黨事件・名古屋共產勞働黨事件に自組合員より檢擧者をだした總同盟幹部の動搖や一般小ブルジョアの間における恐怖感ははなはだしく、それはいわゆる「リベッ化」（自由主義化）と稱する運動を擡頭せしめるにいたつた。

他方では支配階級の間にも、この「震災事件」以後もはや從來の彈壓政策のみをもつてしては階級的勢力として緒につきはじめたプロレタリア運動を消滅せしめることができず、かえつてそれは逆にプロレタリアートにたいしていたずらに反抗心をあおる結果になるということについての反省がおこなわれた。かくて震災の眞只中に成立した山本內閣が發した普選聲明とその翌春の國際勞働會議勞働代表選出方法の變更の公示（勞働代表選出は組織勞働者のみを選出母體とする）とは、ある程度がかる支配階級の自己反省の結果であると同時に、そこにはまた彈壓の中からたちなおらんとする勞働者運動の動搖期に乘じてこれに水をささんとする狡猾な意圖もふくまれていた。それでこれらは支配階級の彈壓から自己の安全な道をもとめて汲々たりし組合幹部たちにとつては、まさに現實化へのまた改良主義への看板ぬりかえの恰好の口實となり、たとえば總同盟中央委員會のごとき「從來わが總同盟は勞働階級の政治行動そのものに反對せしことなし。今や普選實施もちかき將來にあつて、勞働階級が經濟鬪爭のほかに政治鬪爭の機會をあたえられんとするをもつて、われらが勞働階級解放のために、このあたらしき戰線をも利用すべきはもちろんなりとす」といちはやく聲明を發し、また國際勞働會議勞働代表選出方法の變更の公示とともに各勞働團體はきそつて從來の態度をあらためて代表選出に參加し、かくて上からの意圖への直接的反應をしめしたのである。

いづれにせよこれら二つの事件（共產黨事件と「震災事件」）がもたらした影響は、勞働者運動の內部にかつてのアナ・ボルの對立にかわるあらたなる組織的思想的對立の原因をつくりだした。すなわち總同盟內部において、現實化は革

命的勞働者運動の大衆化のためにこそ利用さるべきであるとなす左派と、改良主義的勞働者運動へ議會や國際勞働會議を役立たしめんとする右派との端初的な對立をうみだしはじめたことがそれであり、この對立は一九二四年にいたつてようやく表面化しはじめる。この年の總同盟十三年度大會はかの有名な「方向轉換宣言」によつて歷史的意義をもつといわれるが、左右の兩派は方向轉換を必要とする條件についての見解においてはげしく意見を異にし對立した。まづ右派（幹部派）は過去の運動はすべて失敗であつたがゆえに方向轉換を必要とすると主張し、左派（反幹部派）は反對に「過去における我國勞働運動の過程は必然的に我國資本主義の變則的發展に應じたるもの」にすぎなかつたと主張した。したがつて右派は改良主義的運動方針への轉換がすなわち運動大衆化の所以であり、そのためには積極的に支配階級との妥協によつて組織の擴大をはかるべきであるとし、左派は大衆の日常的不滿の先頭にたつてたたかうことによつて運動の現實化・大衆化をはかり、そのかぎりにおいて改良主義をも利用すべきであるとしたのである。結局大會においては左派の意見がリードし、左派の手によつてかの歷史的大會宣言が起草せられたが、對立はこの當時なお端初的であつたからとにかく現實政策をとるべきことについて兩派は一應一致したのである。

以上のごとき勞働者運動の方向轉換途上にあらわれた支配階級の新政策・それと結びつく運動內部における組織上戰術上のあたらしい分化的徵候は、同時にその他の社會運動においてもつよくあらわれ、フエビアン協會や政治研究會の成立・學生運動の組織化（「社會科學連合會」の結成）・產業勞働調査所の設立・勞働學校の續出等々において、いずれも公然の組織的大衆運動にうつらんとする傾向といわゆる「リベツ化」傾向との二重の性格動向を內包せしめたのである。とくに後者の傾向は、一九二二年創立せられたばかりの日本共產黨の一九二四年の解黨決議にいたつてその絕頂點にたつした。かかる傾向はまた日常鬪爭においてもあらわれ、一九二四年に入つて爭議のいちじるしい普遍化（部門別にも地域的にも）をみると同時に、他方資本家側とすすんで團體協約をむすぶもの（總同盟東京鐵工組合と鬪部電機製作所・純向上會と川北電機製作所）もあらわれるにいたつたのである。

結　括

前章にみたごとき反動恐慌と反動政勢は幼弱なプロレタリアートを自己防衛のために小さな殼にかたくとじこめるとともに、これを急進的なそして空想主義的なサンジカリズムの虜とした。しかし恐慌後につづく不況の深化は必然的に消極的自己防衛の破綻を招來せざるをえず、質から量への反省が要求され、鬪爭によりきたえられ成長しつつあるプロレタリアートの意識的分子のあいだには戰線の統一と擴大・強固な組織をもつた指導部の必要が痛感せられた。だが特異な社會機構と卑激かつ變則的な過程からうまれたこの國のプロレタリアートの組織および運動にとつて、かかる要求をただちに全面的にみたすことは困難であり、ただ少數の優秀な先進分子の精力的活動のみがよく運動の行詰りに新方向をあたえ、サンジカリズムによつていちじるしく歪曲された鬪爭をその行詰りのなかから一歩ひきだすことに成功しえたのである。

かかるただしい努力の中に勞働者運動中の全精鋭をすぐつて結成された日本共產黨こそは、大戰による運動の本格的展開以後日本プロレタリアートがはじめてもつことのできた階級的政黨として、きわめて注目すべきものであつた。階級對階級の鬪爭は、ここにはやくも黨と黨との鬪爭として示現され、しかもこの黨はブルジョアジーによつて

基本的に放棄されたブルジョア民主主義的任務の達成をただしくも自己の主要戰略として定置したからである。明治年代の先驅的試みをのぞいて何らの社會民主主義的政黨の傳統なしにまず共產黨が組織されたという事實は、先進資本主義國と異なるむしろ植民地と共通の現象にぞくし、このことは客觀的にみれば日本の政治支配體制の特殊性と大衆生活條件の特殊性とを立證するとともに、他方ではこの黨の前途に無限の組織的展望と活動の可能性とをうちひらいたのである。

しかしかかるただしい戰略をもつ階級政黨の出現は、ブルジョア地主的基礎にたつ日本の特異な天皇制權力にとつてまさに致命的なものを意味し、ためにそれをしてはじめて强力な政治的攻勢を決意させるにいたつた。かくて開始された狂暴な彈壓はたまたま勃發した大震災によつて最高潮にたつし、いくた酸鼻な事件と犧牲者とをうみだしたのである。

そしてかかる强壓策は、たとい**プロレタリアート**の意志をくじきえず その鬪爭を消滅させることもできなかつたにせよ、一方ではかれらをして運動の大衆化への必要をより切實に痛感せしめるとともに、他方ではプロレタリアート內部の小ブルジョア的組合幹部・インテリゲンチヤ的分子に大きな衝撃をあたえ、かれらをして運動の右方旋回への決意をなさしめるにいたつた。後者の傾向はかゝるプロレタリアート內部の動搖をみた支配階級の懐柔政策によつてより一そう促進されるとともに、一方では支配階級と共通の利害の上にたつ社會民主主義的上層の發生の端緒をみちびき、他方ではこれを契機に左右對立の徵候をもみちびいた。いずれにせよこれらの事實は、なによりもプロレタリアートの鬪爭がいまだ幼弱であるにせよ實踐的經驗と組織的訓練とによつていちぢるしく成長しつつあることを立證するものであつたのである。

第四章　總同盟の分裂と評議會の成立

（一九二四——二六年）

I　いわゆる左右兩翼の發生

上からの政策とむすびつく勞働者運動內部の左右への分裂の萠芽については前章でのべたが、この點について理論的解明を少しこころみてみよう。大體日本においてはかつて勞働組合が獨立的な社會勢力として支配階級からみとめられたことは一度もなかつた。從來勞働組合は無知な勞働者たちが不逞のやからによつてそそのかされ、社會の拘束者としてことあるごとに不穩な輕舉盲動をなす徒黨の集りにすぎないと、かれらには思惟されていた。したがつてそれはつねに取締りの對象としてまたは社會の「餘計者」として、とりあつかわれきたつた。しかるにいまや支配階級は內外の歷史的社會的情勢におされてちかく普通選擧の實施を聲明し、從來政治の領域外にあつた勞働者農民その他勤勞大衆に參政權を賦與し、かれら勤勞者出身のものに代議士として議政壇上にのぼりうるみちをひらき、さらには國際勞働會議勞働代表を勞働團體の選出にゆだねるという・要するに今までの「餘計者」を一つの社會的勢力としてみとめまたとりあつかわざるをえなくなつた。このことは、支配階級にとつてプロレタリアートの成長がすでに否定せんとしても否定しえない一個の社會的事實となつたこと・これにたいする否定否認の強行はかえつて自分らにたいする眞正の對立物としてかれらを結集せしめるにすぎないこと——等をハッキリ自認するにいたつた結果であつた。

こうした支配階級の勞働者運動にたいする態度の變化は、組合運動の指導者たちにいかなる反應をもたらしたであろうか。今や間接的ながらも勞働組合が公然とみとめられ支配階級とある場合には肩をならべて對等の取扱をうけることができ・あるいは勞働代表として國際會議の代表たりうるということは、今まで封建的な隸從觀念のもとにあつたかれらの一部にとつてはまさに無上の歡喜であり光榮であり、さらにちかき未來における晴の舞臺への登場を夢みさせるに充分であつた。もちろん日本の勞働組合はすでにのべたようにストライキ連盟からうまれ したがつて成立の當初からきわめて戰鬪的であり、幼弱のあいだからサンジカリズム——空想的であつても革命的であつた——の洗禮をうけ、「ボルシェヴィズム」の宣傳のなかに育つてきたから、この點で歐米のごとき改良主義的傳統というものはほとんどないといつてよかつた。しかしまえにもいつたように他面そこには、英雄的な小團體割據主義が支配し、本來民主主義的であるべき近代的勞働組合がかえつて非民主主義的な親分乾分的な人的關係でしばられるという特徵が存在していた。このため少數の組合幹部たちはその傳統がなくても容易にボス的色彩と自和見主義的觀念とをつよめまたそだてあげてゆくことができた。これらの指導者たちは組合員大衆の意識がたかまり組織的な訓練のつまれてゆくとともに當然失脚する運命をもつのであるが、しかし日本の勞働力の構成上またあらたに勞働市場になげいれられる勞働力がおもに農村過剩人口から補給される關係上、組合の非民主主義的性格は徐々にしかとりのぞかれず、かれらはその後もながく存在・活動しうる根據をうしなわなかつたのである。

このように日本の特殊な勞働關係の上に別に何らの傳統もなく突如として改良主義的勞働組合が生れるということ

は、たとえば國際勞働會議勞働代表選出權の勞働組合へ賦與の公示とともに海軍工廠從業員を組織母體として與官業勞働海工會・廣島工廠工傭會・横須賀工廠工友會・佐世保工廠勞愛會・舞鶴工廠共立會等々が急造され、その上に海軍勞働組合連盟が設立され一擧に日本最大の勞働團體となつたという事例にもつともよく提示される。いずれにせよ以上のごとき原因と根據の上に、上からの懐柔政策とともに改良主義的日和見主義的組合幹部があらたに發生し成長してゆくことは必然であり、したがつてまたこれにたいして闘爭によつて陶冶された戦闘的勞働者が下から鋭く對立するにいたることも必然でなければならない。かくて總同盟十三年度大會における左右の對立はその端緒的萌芽であり、それが結局總同盟の大分裂にまで發展したのであつた。

II　總同盟第一次分裂

ようやく大衆化へのみちにつきはじめたばかりの勞働者の組織運動・組合運動の内部に、かつてのアナ・ボルの對立にかわつて早くもあらわれた左右兩翼への分裂傾向は、一九二四年より二五年へかけてしだいに明確となり、とくにその主流をなした總同盟内部において典型的決定的なかたちをとるにいたつた。これよりさき總同盟内に左翼が形成されはじめたころ總同盟外にあつても左翼的色彩の濃厚な數組合が形成されつつあつたが、それらは總同盟十三年度大會（一九二四年）の直後あいついでこれに加入し、ためにその左翼勢力は一段と強化された。かくて左翼の右翼攻撃の第一矢は、この年四月の關東織工組合大會でまずはなたれた。この大會において左翼はその攻撃を右翼幹部の上に集中し、舊幹部の一掃に成功して組合幹部の椅子を自派で占領した。このことは左翼のいちぢるしい進出をしめすとはいえ、この右翼指導者排撃・幹部占領の戦術が問題のポイントを個人的感情的な問題に移行させ左右の對立を歪曲し、のちに右翼派より左翼派に組合攪亂者の名を冠せしめる口實をあたえたことはあらそえず、このため左右の對立は同年秋の關東同盟大會においていつそう激化したのである。

かくて尖鋭化せる雰圍氣の中に開會された大會は、右派の暴力的な言論封鎖と議長（右派）の横暴の結果渡邊政之輔を先頭とする左派の退場となり、大會は完全に右派のほしいままにゆだねられた。右派は勢に乗じて渡邊政之輔ら五名の除名を強行したが、それは總同盟の規約を無視せる非行であつたため強力な反對にあつて承認されなかつた。この内紛はやがて總同盟中央部の問題にまで發展し、全國的性質をおびるに至つた。しかし問題は、一應左派の譲歩によるさきの被除名者達の自發的遠慮と左派諸組合に關東同盟とは別箇に本部直屬の關東地方評議會の結成をみとめることによつて落着したが、それは決して問題の解決を意味せずかえつて右翼化せる總同盟内に組織的な反對派の結成されたことを意味し、これより左右の對立は政策を中心とする完全な組織的抗爭へと移行し、その對立はますます激化したのである。

かくのごとき一觸即發の形勢のもとに、十四年度全國大會は一九二五年三月十五・十六・十七の三日間神戸において開催せられた。大會の第一日第二日は平穏にすぎたが、三日目にいたつて形勢はにわかに緊張した。すなわち質問によつて自己の内面を曝露されその地位に危殆をかんじた幹部派が、急遽ひそかに右翼派の代議員會を開催し左翼分子と左翼諸組合の除名を申合せ、このことが三日目の朝全代議員につたわつたからである。かくて定刻より二時間もおくれて開會された大會第三日の議場では、はたして議案をそとにして除名案のみが問題となつた。しかるに右派

幹部の懸命の努力にもかかわらず大勢は左翼派に有利にかたむいたため、除名案は多數代議員の豫期に反してついに上程されなかつた。しかし幹部派はこの間の議場のドサクサに乘じて、かねて豫定されていた單なる字句上の修正をはかる規約改正案中に、にわかに「中央委員會において加盟組合および個人を除名することを得」という一項をくわえて上程可決し、さらに中央委員を自派に有利に選出し、もつて大會後の中央委員會に左翼派處分の權限をあたえることに成功してひとまづ大會の幕をとじたのである。かくてかれらはただちに左翼派の除名をくわだてたがここでもかれらの豫期に反して成功せず、結局關東地方評議會の解散を決定し、「解散に應ぜざるときは除名すべし」との申合せをつくつて漸く宿望をたつしたのである。

これにたいして左翼派は（この中央委員會の決定たる關東地方評議會の解散はまさにその牙城の崩壞を意味し致命的結果をまねくがゆえに）、この關東地方評議會を中心として全國の左翼諸組合を糾合してこの決定に反對し、幹部糾彈・總同盟刷新の運動を展開すべく日本勞働總同盟革新同盟を結成し、さらに大いに氣勢をあげんとその全國大會を五月二十四・五・六・七の四日間神戸において開催するにいたつた。大會は勢のおもむくところ途中より突如日本勞働組合評議會創立大會に變更され、ここに總同盟は完全に二分し左右兩派は決定的に分裂してしまつた。ちなみにこのときの兩派勢力は、總同盟三十五組合一萬三千百十名・評議會三十二組合一萬二千五百五名であつた。

大たい以上のごとき經過をたどつて勞働者運動における最初の大きな組織的分裂がおこなわれたのであるが、この間における兩派の基本的態度や戰術はどのようであつたであろうか。それはまたいかに評價し批判さるべきであらうか。まづはじめに右翼幹部が幹部としての自己の地位を維持するためにあらゆる方法で分裂を挑發しつづけた——という點が指摘されねばならぬ。すなわち左翼組合員が幹部の醜行を曝露し論難するのにたいし、規約を無視してでも彼らを除名せんとし、組合が除名に反對すれば組合までも除名せんとし、結局左翼組合及び組合員をして總同盟内にとどまることをえないようにしむけた。かれらは左派の影響力の擴大をなによりもおそれ、暴力をもちいてまでも左派の言論を壓迫せんとし、あるいは變則的組織を强引に設立し（關東同盟大崎支部連合會）、共產黨事件以後の支配階級の共產黨にたいする組織的デマゴギーに便乘して反對派に「共產派」なる烙印をおしつける等々、左派を大衆からきりはなすためにはあらゆる手段と方法とをいとわなかつた。しかも左派にたいするかかる必死の努力と鬪爭にもかかわらず、本部が組合自體のためになしたことといえば、わづかに共濟施設以下の社會改良的ないしは共濟的事業とかあるいは有名無實な爭議部の設置等にすぎなかつた。かの有名なプロレタリアートの抑壓法令なる治安維持法制定にさいしても、かれらは全力をあげてこれとたたかうべきであるにもかかわらず「總同盟としては積極的態度にはいでず」となし、一幹部のごときは「治維法は着實な勞働組合勃興のためには必要な法律である」とさえ公言する始末であつた。このことは、當時すでに組合の右翼幹部が幹部として自己の地位を維持するためには、すなわちかれらが鬪爭によつて必然的に戰鬪化・左翼化する大衆に抗して自己の安全と榮達を達成するためには、大衆の左翼化を一定の限界にくいとめることが必要であり、この點において彼等が支配階級と共通の利害關係の上に立つものであることを、明瞭にしめすものであつた。かくてこそ支配階級が普選法と同時に治維法を制定したことは大きな意味をもつたのであるが、これにたいし戰鬪的傳統につちかわれた組合員大衆が憤瞞をかんじたことは當然であり、それゆえにこそ本部指導者たちは種々のマヌーバーによつて何とかこれをさけようとつとめ、「われわれこそ眞正左翼であり、かれらは

エセ左翼であり小兒病である」と悪罵したりしたのである。

さて他方左翼の態度はどうであつたか。左翼はことあるごとにこれら右翼派幹部を「ダラ幹」として曝露論難するとともに關東地方評議會結成以後つねに闘爭の先頭にたつて活動し、治維法絶對反對・普選法の徹底的修正をさけび、關東勞働組合會議や政治研究會と提携して「悪法反對同盟」を組織し、活氣にみちた闘爭を敢行して、かくて大衆のあいだに廣汎な影響力を急速に擴大させた。だがその反面當時の左翼は右翼の分裂政策にたいする闘爭において、あるときは機械的にこれをおこないあるときは理論的にこれを放棄するという誤りをおかした。たとえば十四年度大會後右翼の決定的分裂政策にたいして革新同盟によつて反對したさいにも、左翼自身の獨自のスローガンをかかげず、「一、官僚化し、だらくした最高幹部を弾り、二、總同盟をかれらの手から奪還し、三、總同盟を加盟組合員の意志にもとづいて行動する一般組合員のための總同盟に復歸せしめることである」というごとき單なる反幹部運動に終始したため、意識的分子はかかる不自由な總同盟にいるよりもむしろ分裂して活動したほうが有利だとおもいこむにいたり、執拗な分裂反對運動を展開することなく早急に獨自の組合に結集してしまつた。いうまでもなく大衆の利益をようごする大衆團體たる勞働組合は戰線の統一によつてこそ強力な闘爭を展開しうるのであり、その内部にあつて戰闘的革命的にたたかつてこそ大衆を闘爭にひきいれ戰闘化しうるのであるから、早急なる分裂は廣汎な大衆を右翼幹部の影響下に放置することを意味し、したがつてまた全體としてプロレタリアートの闘爭力をよわめるものなのである。かくて總同盟の分裂はむしろ右翼幹部の分裂政策に乗ぜしめた意味において大局的に失敗であり、その後の日本プロレタリアートの闘爭の上に大きな禍根をのこしたのである。

III　評議會の成立とその活動

これよりさき日本の資本主義は一九二二年ごろ例の反動恐慌の打撃から恢復することができ、物價・生産・貿易の各部面に上向的傾向をしめしはじめ、戰後資本主義の第二期たるいわゆる相對的安定期にはいりはじめた。しかるにまもなく一九二三年九月の突如たる大震災によつてふたたび均衡を破壊され恐慌におそわれたのであるが、政府はモラトリアムや融資政策によつて財界の救濟につとめ、もつて中小企業と勞働者の犠牲の上にこの危機をきりぬけることに成功した。そしてその後の資本の安定と恢復は、一に勞働者への搾取の加重によつて、すなわち賃下げ・時間延長・勞働强化等々によつて遂行され、その間を通ずる技術の進歩・獨占の發展・合理化の强行等々は多くの勞働者たちを街頭になげだし永久失業に拍車をかけるにいたつた。このため勞働者階級の窮乏ははなはだしく、生産と消費との矛盾は増大し、海外市場の行詰りとあいまつてさきの安定の諸條件は早くも一九二五年ごろよりうしなわれはじめ、「戰爭か革命か」の時期たる次の第三期のみちを準備した。これは當然にプロレタリアートの側からする守勢より攻勢への轉換・階級闘爭の一そうの激化をよばないはずはなく、さきの勞働者運動の「方向轉換」が客觀的にみてその公然たる最初の表明であつたとすれば、この段階における運動内の左翼の發生こそはそのヨリ直截なる表現にほかならなかつた。かくて一九二五年から二七年へかけてのこの時期・すなはち資本の安定の諸條件の喪失と動搖の時期の上にあたらしい評議會の全活動・その急速なる成長と擴大とがおこなわれ、また次章にのべる無産政黨の成立と分裂とがおこなわれたのである。

ところでまず、あたらしく成立した評議會の性格は次のごとき綱領の中にきわめて簡潔にあらわされていた。それにいう——。「一、組合運動の目的——組織と闘爭とによつて資本の搾取に對抗し、勞働條件を維持改善し、生活の安定と向上をはかり、勞働階級の完全なる解放と合理公正な社會生活實現のためにたたかうことは組合運動の目的である」・「二、組合運動の教育的任務——組合運動によつて勞働大衆を教育し、勞働階級をして資本主義の精神的支配より完全に獨立し、階級意識にもとづく團體的行動の訓練をあたえることは組合運動の教育的任務である」・「三、行動の一般方針——勞働階級の完全なる解放をもつて一切の組合政策の根本基調とすると同時に、勞働大衆との間に緊密なる接觸をたもち勞働大衆の現實の必要と要求とに立脚した政策によつて闘爭を發展せしむることをもつて組合運動の一般方針とする」・「四、組合組織の原則——組合の一切の機關には一般組合員の意志をもつとも敏速正確に反映せしめ、組合大衆をして常に組合の行動に活潑にたたかわせしめると同時に、大衆の意志と行動とをもつとも有效に集中して最大の闘爭力を發揮せしむるがごとき民主的集中主義をもつて組合組織の原則とす」・「五、組合組織の目標——被搾取者たる共通の利害を、これにもとづく階級意識に立脚して、すべての勞働者を産業的ならびに一大階級的組織に團結せしむることをもつて組織をすすめる目標とする」と。

評議會の一さいの組織活動と闘爭活動とは、右のごとき基本的原則の上に遂行されていつた。まず第一に組織の面において、評議會は總同盟の胎内からうまれたために總同盟の組織形態をなおそのままのかたちで殘存せしめていた。それで産業別組織と地方的組織との矛盾こそは古き組織からあらたな組織へ發展すべき使命をもつた評議會のもつともくるしんだ點であり、地方評議會なるものはその苦惱の象徴であつた。けだし組織率もくくしかも組合が分散している場合、全國的産業別組合の結成はきわめて困難な條件にあり、評議會成立後ただちに産業別整理に着手し、一應金屬・印刷・交通電氣の三産業において産業別全國協議會を開催するにいたつたにもかかわらず、ひくい組織率の上に地方的組織がなお強力な性格をもたざるをえなかつたからである（第九表參照）。したがつて地方的組織が常に強力な執行部をもたざるをえないとともに、かかる組織が獨自の大會をもつべきか否かがつねに全國大會で問題となり、結局全國大會直後地方大會をもつことで妥協的解決をえたのであるが、産業別組合へ發展すべき組織原則と現實的條件とのギップは必然的にふたたび總連合を日程にのぼさざるをえず、これが解決しえないかぎり矛盾もまた解消しえないため、ここに評議會としてはあらゆる努力をまず戰線統一にかたむけざるをえなかつた。

第九表　産業別組織勞働者數および組織率(%)　(1927年)

産業部門	勞働者數	組織勞働者數	組合數	組織率
金屬	317,306	98,030	64	30.9
海上交通	492,396	77,725	14	15.7
陸上交通	282,323	30,918	17	10.9
紡織	972,631	25,063	30	2.5
化學	169,407	7,639	33	4.5
印刷	50,054	6,097	21	12.1
鑛業	289,201	16,410	7	5.6

しかるに最初は、戰線統一を上から幹部間の話合いによつてのみ可能とかんがえ、たとえば國際勞働會議の勞働代表選出會議や二六年六月の勞働組合全國協議會におけるごとくひたすら幹部間の話合いにのみ依存し、大衆の下からの戰線統一への努力をおこたつたために成功せず、その後ようやく下からの戰線統一こそ眞に闘爭力强化のための戰線統一であることを認識して統一運動同盟をつくるにいたつた。しかしそこにあつても組合に政治的意見を强制し、たとえば統一運動同盟に勞働農民黨の支持を綱領にかかげさせたりしたため、右翼・中間派もそれぞれ別個の政治スローガンをかかげだし、ついに戰線統一が單なる黨勢擴張の具と化するにいたつ

た。これに氣がついて、最後に「政黨の對立をはなれて組合の統一」をスローガンにかかげたときはすでにおそく、事態はもはやいかんともしがたい狀態にあつたのである。

以上のような組織面の矛盾になやみながらも、評議會の闘爭活動は守勢より攻勢への勞働者運動の全般的轉換の波にのつて旺盛をきわめ、しかも大きな成果をうみだした。この時期のストライキ件數は、一九二四年三百三十三件・二五年二百九十三件・二六年四百九十五件・二七年三百八十三件と大たいに增加傾向をめしたが、評議會の旺盛な活動のために各年度總件數中組合の關與せる率は、一九二四年の四六・五％より六二・四％、七一・三％、六七・六％と飛躍的に增大した。この組合の關與せるストライキ中評議會のそれが二八・八％（一九二六年）、四二・八％（一九二七年）をしめたということは、總同盟のそれが二〇・一％、一四・六％であつたのと對比して兩者の性格を充分明らかにしているといえよう。

こうした評議會の闘爭的性格は、支配階級の攻擊の焦點がその上にむけられる結果をきたし、官憲資本家側は必死になつて評議會の組織破壞に狂奔した。最初から勞働組合の活動の自由が制限されている日本では、官憲はほしいままに勞働組合の活動を束縛することができるのであるから、評議會の場合一たび大爭議が勃發するか、あるいは大演習や行幸等があつたときには組合の公然の機關がすべて引きさらわれ、その合法性をうばわれ、資本家側また「勞働組合を決定的に崩壞せしむるまではたとえ產をかたむくるもあくまで頑張りとおす」といつた態度にでることは必然であつた。かかる官憲資本家側の態度に對抗するため評議會としても、あらたな爭議戰術その他の新手段の採用をよぎなくされ、たとえば共同印刷爭議にアジトや移動本部等の非合法組織を創出應用し、また一九二六年評議會闘爭史上劃期的な淺松日本樂器大爭議にこのアヂトの組織戰術を最高度に應用したりした。この非合法手段は闘爭戰術に飛躍的な一頁をくわえ、のちに日本共產黨のそれにたいして有力な貢獻をなしたのである。

これらのほか評議會はいくたの創意にとんだ組織方策と闘爭戰術とをうみだしたが、その中でもとくに偉大なる組織者渡邊政之輔の名とむすびついて大きな意義をもつたものに工場委員會の運動があつた。すでにのべたごとく工場委員會は一九二一・二年頃團體協約運動とともにスローガンとしてかかげられてたたかわれたのであるが、當時は結局資本家側にストライキ防止機關として利用せられるとともに、勞働組合にとつては大衆の意識をにぶらしまた工場委員會委員をボス的存在たらしめる點が反省せられた結果、二三年には工場委員會返上が闘爭スローガンとしてかかげられ、當時としてはまつたく失敗のうちに消滅したのである。かくのごとく一たび運動の過程から彈りさられた工場委員會をあらたなる形で闘爭戰術として運動の中へとりいれたのは、じつに渡邊政之輔のすぐれた功績であつた。

かれの創意的な提唱と精力的な宣傳とによつて評議會がこの自主的工場委員會を闘爭戰術として採用して以來同委員會によつて當該工場のストライキを激發し、未組織大衆を組合に加入せしめ、二組合が一工場內で對立抗爭しているのを統一し、下からの戰線統一を達成させるなど、すばらしい發展ぶりをしめした。しかもその後の情勢の激化は一工場のストライキをもつてしては闘爭が困難となつたため、一方で一工場のストライキを全產業のストライキに擴大させるべく種々計畫されるとともに、他方では工場委員會をして一都市一地方の工場代表者會議へと發展せしめる方策がとられた。一九二六年健康保險法反對の神戸工代會議・二七年金融恐慌の際における兵庫縣下工代會議への發展等は、その成功的發展を遺憾なくものがたるのである。

しかし當時評議會は、この工代會議運動をして眞に大衆運動化し、また完成した恒久的組織と化することに成功しえなかつた。またこれとならんで評議會が資本の攻勢に對抗するために計畫し採用した前記ゼネ・スト方針の如きも、一九二七年小樽地方の港灣勞働者のストライキに適用したりしたが、單なる端初的試みにとどまり本格的に展開することはできなかつた。けだし資本家側はこれらの評議會の積極的戰術に對抗して、とくにその巨大工場において全力をあげて左翼組合の侵入を阻止したからであつた。左翼組合が小工場ないし中工場に組織を擴大しえても大工場にくいこむことができず、これを改良主義組合や御用組合の手にゆだねざるをえなかつたかぎり、折角の工委・工代會議の運動もゼネ・ストの計畫も實踐的效果をあげえなかつたのは當然なのであつた。こうした弱點は、左翼組合の組織がのちに容易に破壞されその闘爭力がよわめられる根因となつたのである。

最後に評議會の闘爭の大きな意義は、國際的勞働者運動との連絡協同を擴大し強化したことであつた。ソヴエト勞働組合代表レヴセ一行の招請・上海大罷業への代表派遣・太平洋勞働會議やプロフィンテルンへの參加等、評議會の活動によつて日本の勞働者運動はいちじるしく國際的色彩をくわえた。とくにコミンテルン・プロフィンテルン等とのむすびつきによつて種々の教訓を得たこは、かならずしもそれらの戰術がすべてただしく活用されたのではなかつたにせよ、特記さるべき事實にぞくする。

以上のごとき創意と闘爭意志とにみちあふれた評議會の活動の結果は、結成後一年にして組合員一萬三千六百二十五名（三十一組合）より三萬五千八十九名（五十九組合）への急增ぶりと、ストライキ指導二百七件中勝利をおさめたもの百一件敗北したもの三十五件というすばらしい成果となつて結實した。ただそのかげに警察留置者五千六百六十一人・投獄者百九十六名の犧牲者をだしていたという事實は、忘れられてはならない。

IV　總　括

震災以後の日本資本主義の特徴的發展・その政治支配體制の特徴的な態度と結びついて、勞働者運動內部にも新しい樣相がうまれ新しい局面が展開した。まづ第一に、普選法・國際勞働會議代表選出權の勞働組合への賦與にしめされる一系列の政策と治維法・勞働爭議調停法・暴力行爲取締法にしめされる他の一系列の政策、いわば勞働者運動にたいする「飴と鞭」との政策體系は、組合幹部とくにそのボスどもを恐怖させると同時に軟化させ、かれらをしだいに支配體制の楯としての地位と役割にみちびいた。勿論日本には元來社會民主主義的傳統もなく勞働貴族層のための物質的基盤もないのであるが、しかし他方で資本主義自體が廣汎な中產階級と封建的農村に勞働力の生きたる給源をもつという事情は、たえずプロレタリアートの中へ小ブルジョア・イデオロギーをもちこむ結果となり、勞働者の本來の階級意識の成長をおくらせにぶらせるのである。そしてこれと結びついて急速に形成された組合における本來の組合內デモクラシーの缺如、たとえば嚴密な意味で組合幹部が大會に責任をもたず、年一回の大會を何とかごまかしさえすればあとは何ものにも制約されないといつた非民主的機構こそは、組合官僚の專制機構確立のための絕好の基礎となり前提となるのである。かかる獨自なイデオロギー的背景と組織的基礎とをもつ組合指導者は、それがたとい歷史的な傳統も物質的な條件をも有さないでも、上からの政策と結びついて容易に社會民主主義的立場を形成し改良主義的役割を演ずることができるのである。

しかしかかる新らしい改良主義的日和見主義的分子の形成による全組織運動・組合運動の完全なる右方旋回をくいとめ阻止したものは、合理化と賃下げと大量失業とに抗してようやく積極的攻勢にうつりつつあつた勞働者階級の一般的機運であり、またそれを基盤とする左翼の形成・擡頭・進出であつた。とりわけその生成のはじめより戰鬪的色彩を多分にもつた組合の傳統的威力はいやでもかかる組合幹部の日和見主義的變質につよく衝突せざるをえない。勞働者階級の一般的態度を集中的に反映して組合大衆が左翼化し戰鬪的となればなるほど、幹部の日和見主義的行き方は制肘されざるをえず、そのためときには左翼的な言辭によつてさえ扮裝されなければならない。さらにそれが一定の程度にまでたつすれば、組合官僚にとつてはもはや左翼的言辭で扮裝するよりは戰鬪的分子を一擧にきりすててしまう方がより賢明となり必要となつてくる。右翼幹部の分裂政策はここに由因するものであり、總同盟の分裂はこの左右の對立を決定的な規模で遂行したものであつた。

ところでこれを左翼の戰鬪的大衆の立場からいえば、おくれた組合員大衆に精力的に幹部の日和見主義的變質を曝露し、そのよつてたつ基礎をきりくずし、最後に組合機構の民主化と戰鬪的職分の十全なる發揮とのためにかれらを組合から放逐することが、第一の任務でなければならない。しかるに巧妙な右翼官僚的幹部の分裂政策と充分成長していない左翼の未熟さとは、組織運動を容易に決定的分裂にみちびいてしまい、かえつて右翼を右翼として固定化させ、左翼の影響力の浸透をきわめて困難なものにしてしまつた。それゆえにこそかつては非戰鬪的と非難されることを極度に嫌悪した總同盟幹部のごときも、分裂後の一九二六年大會にはみずから公然と右翼と名のり、「大右翼結成」をそのスローガンにかかげるにいたつたのである。その後はもはやかれらは何もにも制肘されず、資本家官憲側と自在に取引し・妥協し・協調し・屈從し・協力することができたのであつて、そのためには內部にあらたな戰鬪的分子が發生するごとに第二・第三の分裂政策の强行をあえていとわなかつた。かれらがかかる分裂をあえておこないつつしかも組合官僚として自己の地位を維持しえたのも、一にかれらが國家權力と結びつきその支持を得るにいたつていたからであり、それゆえにこそ分裂政策を遂行するにあたつてつねに被除名派に「共產派」あるいは「共產黨と內通」云々のレッテルをはりつけるという悪どいやりかたをとつたのである。かくて治維法こそはその後において組合運動における右翼幹部の存立の必須の條件と化したのであつた。

一方分裂政策にやすやすと乘ぜられ、大衆團體を政治的意見によつて分裂せしめるという重大な誤りをおかしはしたが、左翼は評議會によつて獨自の活潑な鬪爭を展開した。もちろんその間いくたの誤謬・失敗をかさねはしたが、しかし少くともプロレタリアートの利益をもつともただしくもつとも勇敢に代表してたたかつたことは當然みとめられなければならない。かくて評議會の影響力は急速に擴大し、まさに積極的攻勢にうつりつつあつたプロレタリアートの鬪爭力を一段と昂揚せしめ、またこの鬪爭の過程をつうじて鬪爭戰術に組織方法にいくたのかがやかしい教訓をうみだし、勞働者運動史上眞に光彩陸離たる一ページをくわえたのである。

第五章　無產政黨の成立と對立

（一九二六——二七年）

I　組合運動より政治運動へ

日本においては近代的勞働者運動および社會主義運動に先行するブルジョア民主主義運動が徹底的に展開されず、ブルジョアジーは早くも明治期にその本來の歷史的任務を放棄して絕對主義天皇制と妥協苟合するにいたつたから、そのブルジョア民主主義遂行の課題は基本的にプロレタリアートおよび農民の肩の上に移行されてしまつた。そのためすでに明治三十年代日本に近代的勞働者運動の勃興すると同時に少數の指導的社會主義者たちは、政治的自由の獲得その他の民主主義的要求を社會主義的終局目標と結びつけて、プロレタリアートの獨立的政治運動・政黨組織のために果敢に努力し闘爭せねばならなかつた。しかしかかる下からの企圖にたいして當の天皇制を頂點とする全支配體制が何らの容赦をもなさず彈壓をくわえきたることは必至であり、それはまた他方で社會主義運動自身なおプロレタリアートの未成熟のため廣汎な大衆的基礎をもちえなかつたこととあいまつて、ついに永續的政治運動として自己を確立させるにいたらなかつたのである。

その後第一次大戰後の勞働者運動の興起とともに、一時サンジカリズムの影響によつて阻碍されたとはいえ獨立的な階級的政治闘爭の必要が運動の日程に上り、それが一九二二年新舊社會主義陣營の精說を網羅する日本共產黨の結成となつてあらわれたこと、しかしそれもまたただしくブルジョア民主主義革命の遂行を當面の主要任務としたかぎりたちまち天皇制權力の强壓をよび、何ら大衆的基礎をもつにいたらずして壞滅せしめられたこと——これらはすでに前章でのべたとおりである。いづれにせよこうした事情は、この前後をつうじて一さいの政治闘爭の任務までをも勞働組合の手にゆだね、このため本來大衆の日常的利益を擁護すべき組合をして政治的意見の相違によつて分裂させ對立させるという結果をうんだ。このためかえつてプロレタリアートの闘爭が阻害されるという事實は、種々の反省をよばずにはいなかつたのである。

他方で一九二三年ごろよりたかまつた農民闘爭の波は、封建的な農村機構内においてたたかわれなければならない關係上すべての闘爭、たとえば小作料減免の要求ですら政治闘爭によらずしては解決しえないという事實を明白にし、そのため組織農民層のあいだには都市プロレタリアートとの强固な同盟の要求がたかまつてきた。かかる客觀的條件の存在するところへさらに普選聲明がなされたため、ここに勞働者運動の內部に合法的な無產政黨の樹立によつて當面の局面を打開せんとする機運がおこつてきたのである。それはのちにのべるごとく日本共產黨の殘存分子による協同戰線黨の提唱といわゆる山川イズムによる理論的指導とあいまつて、當面のプロレタリアートの闘爭の主要な課題として急速に日程にのぼされるにいたつた。

II　無產政黨の生誕

I　無產政黨の生誕

無產政黨創立への具體的なうごきは、一九二四年六月の「吾人は無產階級の利害に立脚する政黨の樹立を期する」となす政治研究會の設立とともにはじまる。しかしこの政治研究會は內部的に多くの異なつた意見を包含し、その後會內部の左右の對立が激化して右派の脫退をみるにいたつたから、無產政黨の組織準備體たるべき資格を失つてしまつた。次で同年七月には日本農民組合が總本部に政黨樹立準備委員會を設置することに決定し、同委員會は十二月總會をひらいて種々論議するところがあつた。他方で總同盟も中央委員會において無產政黨組織をとりあげ、一九二五年二月第七回國際勞働會議勞働代表選出全國協議會（大阪）において總同盟の指導的色彩が濃厚な自由主義的勞働黨の樹立を提案するにいたつた。しかしこのときの露骨な總同盟幹部の支配權掌握への態度は參加各勞働團體間の反感をかつて失敗し、かえつてこれによつて總同盟は無產政黨樹立についてのイニシアティーヴをうしなうとともに、各勞働團體もまた無產政黨問題に愼重な態度を持し、無產政黨樹立問題はかけ聲に比して一時ゆきなやみ狀態におちいつた。

しかるに普選法は一九二五年春の議會を通過し、いよいよ無產政黨樹立の問題は焦眉の急をつげた。かくて六月日本農民組合はその提唱者となり、無產政黨組織準備會が千名以上の勞働團體參加のもとに開催せられるはこびとなつた。この當時無產政黨組織方針について二つの意見があつた。すなわち第一は、全國的單一政黨をつくること——であり、第二は、一方において地方政黨を組織し同時に全國的大政黨を組織し順次これを合同する——というのである。第一の意見は、評議會を中心として共產黨ビューロー指導のもとに各勞農團體フラクションをつうじて主張されたものであり、第二の意見は總同盟により主張されたもので、後者の方は一九二四年分裂直前の大會のドサクサまぎれに可決せられ、この方針のもとにすでに一九二五年二月總同盟日本鑛夫組合足尾連合會を中心とする足尾立憲公民黨の結成をはじめとして九州民憲黨・千葉民政黨・關西民政黨等がぞくぞくつくられつつあつた。

かくのごとく左右のあいだに組織方針に差があり、しかも總同盟分裂直後日本農民組合が無產政黨樹立を提唱したのであるから、そこには最初から複雜な空氣がながれていた。まづ何よりも評議會はこの提案にもろ手をあげて贊成し、その提案を支持すべきことを宣言したが、これに反して總同盟の立場はこの提案にたいしてけつして好ましいものではなかつた。けだし全國的單一無產政黨の標語は、除名せる評議會をもあきらかに同一傘下にあつめて政黨を組織せんとするものであつて、總同盟が一朝まちがえばその崩壞の運命におちいるべき危險をさえおかして斷行した除名の意義を沒却せんとするものであつたからである。こうした事情にもかかわらず總同盟が日本農民組合の案に應じたわけは、第一にその提案が從　總同盟と最も親密な友黨的關係にあつた日本農民組合の發意によること、第二にそのスローガンが全國的單一政黨という反對しがたき題目であり、多くの團體と共同であること——等にもとづくものであつた。

かかる總同盟幹部の最初からの單一無產政黨への熱意の缺如と、反對に評議會を中心とする左翼のこれを機會とする右翼攻擊の意圖（それはすでに總同盟の地方政黨樹立にたいしてはなたれていたが）とは、最初から準備會の前途の多難さを思わしめるに充分であつた。一九二五年八月十日第一回協議會は、左翼がわのリードのなかに政治研究會・全國水平社・無產青年同盟の參加と各地における協議會の設立とを決定したが、九月十七・八の兩日の第一回綱領規約委員會においては評議會を中心とする左翼と總同盟・官業勞働總同盟の右翼との意見が正面衝突し、はげしい論

爭ののち左翼の主張は貫徹したが、これを機會に右翼の態度は硬化し、今後「終始行動をともにしうるや否やにつき多大の懸念をいだかねばならぬようになつた」（官業勞働總同盟）と、分裂をもつて左翼をおびやかすにいたつたのである。

ここにおいて左翼は讓歩し、第二回綱領規約委員會においては總同盟の主張を全部容認したが、かかる左翼の讓歩に乘じた右翼は追擊の手をゆるめず、政治研究會・全國水平社・無産青年同盟等は評議會の復生團體なるがゆえにこれらを除外せよと要求するにいたつた。總同盟が第一回協議會において政治研究會等の加入をみとめながら今あらためて除外を要求するに至つたのは、政治研究會が十月の臨時大會の結果まつたく左翼の手中におち、右翼派たる高橋龜吉・島中雄三ら十名が脱退をよぎなくされたこと、その後政治研究會が全國各地の支部をつうじて地方協議會を樹立し下から無産政黨組織運動を展開しはじめたこと、ために總同盟はじめ右翼組合が大きな脅威をかんじだしたこと——によるものであつた。

ところでかかる右翼の要求にたいして日本農民組合は、「政治研究會は結黨まで團體として代表參加をゆるすも、結黨後は解體して個人加盟とすること」という妥協案をしめしたが、總同盟は頑として容認せず、ついにみづから準備會から脱退してしまつた。このことは、すでにあきらかなように總同盟にとつては最初から評議會とともに同一政黨内にある意志はなく、なんらかの口實を設けて分裂せんと機會をうかがつていたのであるから、いわば豫定のプログラムにすぎなかつたのである。總同盟の脱退とともに準備會は混亂におちいつたが、結局評議會の自發的脱退・政治研究會の結黨後の解體・總同盟には加盟を勸告せぬことの三つの條件によつて農民勞働黨の結黨を決定し、かくて一九二五年十二月一日、日本最初の全國的無産政黨農民勞働黨の結黨式をあげるにいたつた。しかしこれは生存わづか三時間にして結社禁止を命ぜられた。

しかしこのような農民勞働黨の結社禁止は單一無産政黨樹立の要望をけつしてよわめることなく、ただちにふたたび樹立運動への動きが開始され、今度は日本農民組合・官業勞働總同盟の共同提唱によつて口火がきられた。前回のいきさつから評議會と總同盟の關係について又も微妙な樣相を示したが、結社禁止の理由中あらたに評議會に關係ある文言がもちだされて結局評議會は招請されず、總同盟は招請されることとなつた。一九二六年一月十三日第一回懇談會が成立したが、この席上ではまたもや評議會招請が問題となつた。しかしこの問題は評議會の自發的遠慮の申出によつて解決し、左翼はまつたく消極的態度に終始し、右翼のほしいままの指導にゆだねてしまつた。この結果は、第二回懇談會におけるいわゆる「玉姫クラブ申合」となつてあらわれた。それにいう——。「評議會・政治研究會・無産青年同盟・水平社無産者同盟はその幹部たると平會員たるとを問わず共産主義的色彩あるものは絶對に入黨を拒絶すること、ならびにその他黨の綱領・規約に反するものは一さい入黨を拒絶すること」と。ここにおいて總同盟の態度はますます露骨となり、第一に無産政黨の性質は反共産黨たることを要す。第二に評議會・政治研究會・無産青年同盟・水平社無産者同盟にぞくするものを一さい政黨の構成分子より除外すること。第三にいかなる團體たると個人たるとをとわず共産系ともくされたるものを政黨の構成分子より除外すること——等々を要求する始末であつた。この露骨な要求は一應總同盟の讓歩によつておさまり、かくて一九二六年三月五日勞働農民黨は結成せられたのである。

III　勞働農民黨の分裂

總同盟を中心とする右翼の指導によつて成立した勞働農民黨は、成立の當初から總同盟の四團體排除と大衆のあいだにおける階級戰線統一のための勞働農民黨の門戸開放要求とのあいだにゆきなやみ、とりあえず黨構成範圍を日本農民組合、總同盟ら十團體に限定することによつて一時を糊塗せんとしたが、たかまる大衆の要望は遂に四月十八日の中央委員會において門戸開放決議をよぎなくさせるにいたつた。これによつて全國各地に評議會ら四團體を中心とする支部結成が急速に進行し、その承認を本部に要求しきたつた。總同盟を中心とする右翼派はかかる支部承認が勞働農民黨への左翼勢力侵入を意味するをもつて、七月二十六日第三回中央委員會において前回の決定をくつがえし、評議會・大衆教育同盟（政治研究會の後身）・無産青年同盟の會員の入黨禁止・全國各地支部不承認・共産主義排擊等々を決定した。なおこのとき賀川豐彦より緊急動議として提出された中において、共産主義とは、第一に無産階級の獨裁專制を主張し、第二に言論の自由を暴力をもつて拘束し、第三に少數の意見をおもんぜず、第四に議會政策を否認するもの——と規定されてあつたことは注目すべきであろう。

しかしながら支部結成運動はもはや全國的規模において進行し、一片の決議をもつてこれをしずめることはできない狀勢となり、同時にこれまで消極的態度に終始していた評議會も今や猛然と積極的攻勢の態度にうつり、「勞農黨を大衆の手に奪還せよ」のスローガンのもとに全國的に支部承認要求運動を展開しはじめた。このため十月二十日日本農民組合擴大中央委員會は勞働農民黨の門戸開放を決議し、ここにいわゆる「勞農黨奪還運動」は最高潮にたつしたのである。このような形勢のもとにひらかれた十月二十五日の勞働農民黨第四回中央委員會において、その門戸開放が日程に上るまえに果然東京市電自治會・日本勞働組合總連合・日本司厨同盟は左右の對立を理由に黨よりの脫退を表明し、總同盟また「指導精神のことなる日本農民組合と同一政黨にとどまるをえず」として脫退し、勞働農民黨はわづかに日本農民組合・日本製陶勞働同盟（のちまもなく脫退）の手にのこされ、あらたに大山郁夫を委員長に細迫兼光を書記長として左翼の手によつて再建されることとなつた。

以上の經過によつて明らかなごとく、無産政黨の創立・勞働農民黨結黨の過程をつうじて總同盟に代表される右翼幹部達は、左翼の影響からきりはなされた純然たる議會主義政黨の樹立をもくろんだのであつた。それは、左翼がこれにたいし理論的政策的に妥協をしめしているあいだは無事であつたが、左翼が右翼組合幹部の日和見主義的本質をみぬいてその退却と妥協の態度を一擲して攻勢に轉ずるやいなや、右翼組合幹部は勞働農民黨を自己の統制下に維持することの困難をたちまちさとつて、例の分裂政策をとり、あらたに安部磯雄・吉野作造・堀江歸一らの獨立勞働協會と結んで自己の支配下に社會民衆黨を設立するにいたつたのである。（十二月五日）

こうした總同盟右派の態度にたいして組織勞働者の多數は本能的に不滿をかんじ、勞働農民黨よりの脫退に反對した。したがつて分裂の結果過半の中央委員が脫退したにもかかわらず黨の基礎はゆるがず、かえつて總同盟の組合員大衆までも脫黨に極度の不滿を表明し強硬に抗議しはじめた。そして幹部が社會民衆黨を結黨するにおよんでその不滿は極點にたつし、もはや露骨な右翼政策をもつてしてはかれらの不滿と抗議とをおさえてゆくことができない情勢となつた。そこでこの左翼化せる大衆と左翼政黨の彈壓解散をもつて威嚇する政府との板ばさみにあつた右派の一部

指導者たちは、結局左翼的言辭をもつて大衆をおきえつつ同時に政府の彈壓の危險をさけるべく「階級運動の正道を行く」と稱する中間的な日本勞農黨を別個に結成し、これによつてその苦境をきりぬけんとしたのである（十二月九日）。

かくして今や日本の勞働者農民運動は政治的思想的に完全に右翼・中間・左翼の三つの分野に分裂し、しかも政治的立場にしたがつて總同盟・日本農民組合もまた分裂し、全戰線にわたつて名狀すべからざる混亂におちいり、その闘爭力はいちじるしく阻碍せられる結果となつた。

IV　無產政黨の對立・抗爭

以上のごとくして勞働農民黨は、一年たたずして大きく分裂した。今やプロレタリアートの階級戰線は、右に明白に反共的議會主義的協調政策をかかげる社會民衆黨とその支持團體（總同盟・日本海員組合・海員協會・官業勞働總同盟）とをもち、左に無產階級の政治的經濟的社會的解放を戰闘的革命的闘爭によつて達成せんとする勞働農民黨とその支持團體（評議會・日本農民組合）とをもち、さらにその中間に極左にも極右にも組せずと稱する日本勞農黨とその支持團體（日本勞働組合同盟・日本勞働組合總連合・全日本農民組合）とをもつこととなつた。たかまりくる支配階級の攻勢にたいして勞働者農民勤勞大衆が全力を集中してあたらねばならぬまさにそのとき、その組織と陣列とが大きく分裂しそれら相互が內部の對立抗爭にいたづらに精力をついやすにいたつたことは、味方にとつて大きな不幸であるとともに敵にとつては大きな利益であつた。あたかもこの分裂の年たる一九二六年の翌二七年春には震災後かきねられた經濟的矛盾がかの金融恐慌となつて爆發し、一さいの犧牲と負擔とはプロレタリアート・農民・中小業者の上になげかけられ、ここに勞働者運動は政治經濟の全面に強力な進出と闘爭とを要請されることとなつたのである。

分裂の結果左翼の手にきした勞働農民黨は、その後非合法的に再建された日本共產黨の指導のもとに恐慌による大量的解雇・減賃・賃銀値下・工場閉鎖等々に抗して全力をあげて闘爭し、あるいは少數財閥保護のための五億圓補償案に反對し、あるいは大衆闘爭を強力に展開するための工代會議運動を宣傳組織し、あるいは議會解散請願運動をますます推進せしめ、かくて單に左翼がわの勞働者たちだけではなく中間派や右翼派の勞働者たちをもこの闘爭の中にひきいれて勇敢にたたかつた。その結果は當時日本共產黨が公然と大衆のまえに姿をあらわしていなかつたことと關連して、プロレタリアートの黨は勞働農民黨をおいてほかにはないという印象を廣汎な大衆のあいだにうえつけることとなつた。このことは直接的にいえば勞働農民黨がそれだけ果敢に積極的に活動したことの證明であつたが、しかし他方で日本共產黨の獨自性を大衆團體の中へ解消し、勞働農民黨に前衛黨の役割をはたさしめるという結果をきたした。

このように全體として勞働農民黨は當時の運動の先頭にたつてかがやかしい成果をおさめたが、また一方ではのちにのべる福本イズムの影響によつていくたの誤謬をもおかした。たとえば評議會關東鐵工組合や統一同盟にみられるごとく上から機械的に勞働農民黨支持を強要し、もつて組合の統一も政黨の統一も理論的に區別せずに合同を提唱しまた一九二七年の地方選擧には社會民衆黨・日本農民黨絕對排擊を主張しつつ他方でブルジョア自由主義の革新黨左

翼と協働せんとし、そのため當面なによりも共同闘爭によつて大衆を獲得する要のあつた日本勞農黨との對立をふかめ、さらに一九二八年總選擧においては選擧協定の名のもとに他政黨と地盤協定をなして社會民主主義にたいする闘爭力をよわめ、あるいは東京第五區にみられるごとく一旦選擧協定を締結しながら途中で協定をうらぎる行動にいでる等々——要するに反對派から宗派的分裂主義者の悪罵をうけねばならぬ多くの過失をおかしたのである。このことは勞働農民黨の誤謬であるよりも、むしろ日本共產黨の政治的理論的誤謬の反映であつた。その後日本共產黨がコミンテルンの批判をうけて漸次ただしい軌道の上に闘爭をすすめてゆくとともに、勞働農民黨の在り方も闘爭上の偏向もしだいに是正され、それは前衛黨の性格をぬぐいさつて勞働者農民の闘爭の同盟組織としての本來の姿をとりもどすことができた。しかしいづれにせよそれが二重組織として出發した最初からの矛盾とあやまりは克服されえず、一九二八年三月共產黨への彈壓と同時に上から解散された後にあつても、なおながく組織上の矛盾の解消のためにはやまねばならなかつたのである。

かかる左翼の闘爭ぶりにたいして右翼はもはや純然たるプロレタリア的立場を放棄し、資本家の合理化にたいしては產業民主主義をかかげて相おうじ、階級的政治闘爭にたいしては「共產黨に好意を有するとみとめられるものと協同してはならぬ」と嚴に參加を拒否し、何よりも左翼の影響が自己支配下の大衆へおよぶことをふせぐべく右翼戰線と左翼戰線の分水嶺を明確にし、あるいは左翼にたいして「決死的正面衝突をいどむ」ことが勞働者階級當面の重大任務であると強調力說する等、要するにその活動をつうじて明白に小ブルジョア的本質を露呈するにいたつたのである。

このように明白に右翼化した社會民衆黨幹部に反對せる大衆に追隨しつつもこれを革命的左翼への方向にみちびくだけの勇氣をかき、「階級戰線の正道をゆく」と稱して出發した日本勞農黨幹部たちは、その建前の上から當然右翼のごとく頭から闘爭を否定することはできなかつた。かくて日本勞農黨幹部たちは大衆を現實的階級的闘爭へ動員するかわりにつねに一片の聲明書と決議をくりかえして大衆の要求を脇へそらし、せいぜい「ビラや演說會」によつて闘爭をごまかし、勞働農民黨が戰線統一のために統一運動同盟を提唱するやこれに對立して日本勞農總連合を提唱し、工代會議運動にたいしては賃銀値下反對同盟をもちだし、合同提唱にたいしては「福本イズム排除という單一絶對條件による合同」をとなへる等々——要するに傘下大衆が左黨の闘爭に應じてたちあがることをおそれてこれを左翼の影響からきりはなすために、あらゆる努力をおしまなかつたのである。

いづれにせよ單一の協同戰線黨として出發した勞働農民黨の分裂は階級戰線を混亂せしめ、その後も各派はたがいに對立抗爭しあつて支配階級にたいするプロレタリアートの闘爭力をいちじるしくよわめてしまつた。支配階級またかかる分裂を利用して强力なプロレタリアートの反擊を防止し、とりわけ左翼＝勞働農民黨にたいしてはあらんかぎりの彈壓と組織の破壞に狂奔し、もつて自己を見舞つたあいつぐ危機のきりぬけに成功することができたのであるが、しかもかかる困難な條件の下で左翼の影響力はなおいちじるしく伸長していつたのである

第十表

1927年地方選擧各黨成績

	立候補者	當選者	得票
勞働農民黨	105	13	114,084
日本勞農黨	33	3	37,850
社會民衆黨	30	3	37.780
無產各黨合計	204	28	250,308

1928年第一回普選總選擧成績

	立候補者	當選者	得票
勞働農民黨	40	2	192,552
日本勞農黨	13	1	86,992
社會民衆黨	17	4	114,964
無產各黨合計	89	8	486,502

る（第十表參照）。

V　總　括

日本プロレタリアートが大戰後にはじめてもつことのできた最初の政黨たる日本共産黨は、大衆的基礎をきづきえないうちに天皇制政權の彈壓をうけ、のちみずから解體してしまつた。このため勞働者運動はふたたび無黨狀態へもどつたのであるが、その後の情勢の發展が運動の一そうの大衆化左翼化をもたらすと共にかかる無黨狀態にもとづく矛盾もまた一そう大きくなり、組合が政黨の機能を代行し政治闘爭をおこなわざるをえず、その結果政治的意見やスローガンによつて組合が容易に分裂し大衆の闘爭力をよわめるという弊害をうんだ。他方で農村危機の激化による農民の要求と普通選擧法の制定による政治的必要とは、急速にプロレタリアートの大衆的政黨結成の問題を前面におしだし、ここに一應合法的無産政黨の創立となつておちついた。しかし日本のごとき特殊な政治支配の形態・それとむすびつく勞働者運動の特殊な政治的任務のもとでは、單に一般的に大衆の日常的要求と運動の終極目標・經濟闘爭と政治闘爭とを結びつけるということだけでなく、さらにブルジョアジーによつて放棄された廣汎なブルジョア民主主義的課題を社會主義的課題と結合統一して全運動の先頭にたつという特殊な歴史的任務があるのであるから、勞働者政黨が合法的形態においてもつ機能の制約・活動の限界というものは最初からあたえられているのである。組合運動自體がその合法性を不斷におびやかされている狀態において、合法的勞働者政黨がその本來の歴史的基本的課題を徹底的に追求しうるわけがなく、かくてその後の無産政黨のあり方・方向・役割等々はすでにその最初の出發點から規定され豫定されていたにすぎなかつたといえる。

このようにして結局無産政黨の創立は運動に強力な內部的統一性をみちびきいれるどころか、逆に組合運動・組織運動の矛盾と相剋とを再生産したにすぎなかつた。それは政治的意見による組合分裂の防止どころか逆に組合が組合員に特定の政黨加入ないし支持を强要する結果となり、又組合戰線の統一どころか逆にそれの分裂をひどくし、かくて階級的政治闘爭の强化どころか逆にその全闘爭力をよわめるという結果をきたした。しかしかかる基本的な制約と矛盾とにもかかわらず深まりゆく大衆の窮乏・資本の攻勢の激化・勞働大衆の積極的意欲等は、とくに左翼無産政黨をして一定の役割を演ぜしめ、大衆の左翼化を促進し、また大衆が政治闘爭の經驗と訓練とをつむ上に貢獻せしめた。左翼無産政黨（勞働農民黨）はしばしば誤謬や失敗をくりかえしはしたが、しかし少くとも眞實に大衆の利益を代表しその先頭にたつてたたかつたが故に、多くの勞働者農民勤勞大衆は右翼指導者の枠をのりこえてその旗のもとに結集した。この左翼無産政黨にくらべて右翼・中間派のそれはどうであつたか。最初から自己の地位の維持のために分裂政策を辭さなかつた右翼指導者たちはもつぱら改良主義的・議會主義的政策のもとにたたかい、小ブルジョア的要素と組合官僚と勞働者上層との利害を代表して活動した。かかる右翼幹部に不滿をかんじ意識的となりつつある一部大衆に基盤をおいた中間派指導者たちは、一應戰闘的言辭をもちいつつもなお左翼陣營に投ずる勇氣をもたず、右に左に動搖し策動するほかはなかつた。

次章にのべるこの前後に再建された日本共産黨は、この時代主として左翼無産政黨の名において活動し、後者の積極的成果の多くはその理論的指導におうところであつた。しかし日本共産黨自體この當時あやまれる福本イズムによ

つて支配されていたため、その影響は合法的部面にもいわゆる宗派的分裂主義その他となつてあらわれ、くわうるに非合法的共産党と合法的勞働農民党との二重組織の根本的矛盾は両者の運動を拘束し、これらの弊害の清算のために左翼の全陣營はその後もながくなやまねばならなかつたのである。

第六章　日本共産党の再建と活動

（一九二七――二八年）

I　解党から再建へ

すでにのべたごとく一九二二年創立された日本共産党は、その内部の思想的不統一とセクト的傾向・分派鬪爭と規律の缺如等々いまだ多くの弱點をもち脆弱な基礎の上にたつていたため、一九二三年六月の大檢擧と九月の大震災によつて大きな打撃をうけるとともに、世界的な革命的機運の衰退の影響もくわわつて黨内に解黨主義の思想を生ぜしめた（赤松克麿・山川均）。それによれば、共産黨は大衆の政治的現實的鬪爭の中から自然に發生すべきものであり、したがつて結黨は客觀的條件の成熟するまでまたねばならないというのであつて、一九二四年春の解黨決議はこの見地からなされたわけである。しかしかかる敗北的な方針にたいしてはたちまち黨内の革命的な勞働者・青年層の中から强硬な反對がおこされ、コミンテルン本部もまたこの解黨をみとめず、かくて一九二五年一月上海に解黨論者・解黨反對論者の代表をあつめて討議がおこなわれ、あらためて日本共産黨の再組織方針（いわゆる一月テーゼ）を決議するにいたつた。それにいう。「今日日本の全共産主義者の集中せる組織のないことは、日本の革命運動にとつて大いなる危險である。しかるに現在日本の同志達は運動が相應に自然成長をとげた後に共産黨を結成するという日和見

主義に墮している。この日和見主義を打破することなくしては日本の革命運動は絶對に前進しえない」云々と。

この決議によつて黨强化委員會が組織されたが、これにたいしては堺利彦・山川均らの古參社會主義者たちやまた完全に小ブルジョア的日和見主義の立場に移行した人々はもはや參加せず、黨は荒畑寒村・德田球一・渡邊政之輔らの革命的な勞働者派（いわゆる行動派）の手に歸し、九月にはその合法的機關紙として「無產者新聞」が發行された。

當時再建ビューローの任務としては、第一に、赤松克麿一派の社會改良主義・日本フェビアン協會・政治研究會の舊幹部等の小ブルジョア急進主義を具體的鬪爭の中において克服し、これらを無產政黨運動の圈外に放逐してしまうこと、第二に、大衆自身の興味と活動とによつてのみ大衆的な階級的無產政黨が形成されうるということを認識して、あらゆる宣傳的・組織的方法をもつて大衆を動員すること　第三には、黨直接の指導下にある勞働者教育協會・水平社青年同盟・無產青年同盟ならびに左翼勞働組合を結合して無產政黨內に共產黨のフラクションをつくること――等がさだめられた。またその組織方針としては何よりも、工場細胞を基礎とし民主主義的集權主義の原則にたち勞働者農民の大衆團體の中にフラクションを構成することが、先決問題とされていた。

このようにして共產黨が再建されるための條件が主觀的にも客觀的にも成熟しきたり、ついに一九二六年十二月日本共產黨再建大會がもたれるにいたつたのである。そしてこの解黨より再建への過程をつうじて、黨の指導的理論となつていたものははじめは山川イズムであり、つぎに輻本イズムであつた。以下これについて簡單にのべることにしよう。

II　山川イズムと輻本イズム

まえにのべたように一九二二年「無產階級運動の方向轉換」を發表した山川均は、その後「天上の社會運動家へ」「無產階級の協同戰線」「方向轉換の危險性」「日本における無產階級政黨當面の任務」「無產政黨は如何なる組織をもつべきか」等々の一連の諸論文を次々に發表し、解黨前後の黨および一般のプロレタリア運動の左翼の指導的理論たる役割をはたした。彼ははじめ日本共產黨の方針である「大衆へ」「政治鬪爭へ」をつよく宣傳したが、しかしその場合かれのいう大衆化とは意識のすすんだ分子がおくれた分子と妥協することによつて可能となるのであり、日本の客觀狀勢ではいまだ無產階級の大衆も前衛も充分成長發達していないから、まず無產階級運動の大衆化・政治鬪爭化につとめるべきであり、そのため協同戰線黨をつくつてこれを促進し、しかるのち大衆の自然成長をまつて前衛黨を結集せねばならぬ――といたのである。このことは必然的に共產黨が大衆組織となることを拒否するのみでなく、共產黨自體の存在をも否定してこれを協同戰線黨の中へ解消してしまうことを意味し、一方で革命的要求を協同戰線黨――大衆的無產政黨の中へもちこむとともに、他方でこの協同戰線黨成立のためには革命的分子の妥協と讓步を要求するという結論をみちびくこととなつた。

かかる山川イズムにたいする批判はすでに「一月テーゼ」でなされたのであるが、當時それが一般に發表されなかつたために不幸にも現實的な批判力を大衆にあたえず、山川イズムはなお長く左翼の運動を支配した。たとえば總同盟第一次分裂にさいしても、それは階級運動における意見の相違をすべて意識のすすんだ分子とおくれた分子との

量的差異にきせしめ、質的差異をみとめえないという根本的弱點のために、單に勞働組合の内政問題にすぎずとみなし、改良主義と革命主義の對立であることを看破することができず傍觀的態度に終始してしまつた。このためコミンテルンの指導によつて黨ビューローが分裂に反對せる「五月テーゼ」を作成し、戰線統一をはからんとしたときにはすでにおそく、そのテーゼが國内にもたらされたときには分裂がなされたあとであつた。要するに山川イズムの影響によつて、左翼はネバリづよく分裂に反對するための理論的根據をかいていたのである。

これについで山川イズムが悪い支配的影響をあたえた例は、無産政黨組織問題においてであつた。單一無産政黨成立のため左翼はひたすら妥協と譲歩をこととしてこの協同戰線黨の成立につとめたが、左翼の妥協と譲歩はかえつて右翼指導者たちの露骨な左翼おいだしと、黨を自己の支配下におかんとするかれらの野望とによつてむくいられた。それで意識的分子は、右翼の本質が單なる量的な差異ではなく質的なものであるという山川イズムに反する結論を現實の闘爭をつうじてようやくまなんだのであつた。この結果猛然と左翼は積極的攻勢へ轉換しはじめたのであるが、いずれにせよ山川イズムの組織論が左翼のたちおくれと逡巡とにつよい影響をあたえたことは蔽いえないのである。

最後に大衆はその闘爭の過程をつうじて、山川イズムにおける共産黨の役割の否定のあやまりをさとりはじめた。とりわけ評議會の成立とその果敢な闘爭はただちに官憲資本家側の強硬な抵抗にあい、プロレタリアートの合法性は何らの役をもはたさず、ここに革命的分子は日常闘爭のためにも強固な非合法組織をもつことなくしては勝利をおさめえないという教訓をまなんだから、かれらは強固な内部的統一と理論的一貫性とをもつ非合法の共産黨による指導をもとめだしたのである。かくのごとく「方向轉換」以來左翼陣營に支配的影響をおよぼした山川イズムも、實踐をつうじてその無力を曝露し指導力を喪失し、意識的分子は山川イズムにかわるあらたな指導理論を切實にもとめるにいたつた。まさにこのときかれらのまえにあらわれたのが、福本和夫の理論であつた。

福本和夫は一九二四年十二月「經濟學批判の中におけるマルクス資本論の範圍を論ず」を雜誌「マルクス主義」に發表して突如論壇に姿をあらわしたが、かれが山川イズムへ積極的批判の矢をはなつたのは一九二五年十月「マルクス主義」誌の「方向轉換はいかなる諸過程をとるか、我々はいまそれのいかなる過程を過程しつつあるか」であつて、さらに翌一九二六年二月と五月の同誌上に「山川氏の方向轉換論の轉換より始めざるべからず」を發表して、たちまちにして山川イズムにかわつて左翼プロレタリア運動の指導理論として意識的分子をふかくとらえてしまつた。

福本イズムがこのように瞬時にして山川イズムにかわつて左翼の指導理論の地位にたつたのは、それが主張するいわゆる主體または主體的條件こそは共産黨を意味するかのごとき感をあたえ、このため山川イズムによつて共産黨の存在を否定せられ苦惱と失望の中にあつた意識的分子はこれをみて歡呼してうけとつたからであつた。かれの所論は從來の社會運動が經濟闘爭ならびにこれに立脚する政治闘爭すなわち「組合主義的政治闘爭主義」にとどまれる點を痛烈に批判し、これを「全無産階級的政治闘爭主義」にまで發展轉化すべきことをつよく要求したのであつた。そしてそのためにいわゆる結合の前の分離の必要と理論闘爭の必要とを强調力說した。すなわち「我が無産者運動を通じて脈々たる一脈の力——マルクス的政黨の、マルクス的勞働團體の、核心、マルクス主義——が脈打つているのを發見した」「我々は全國的一大結合の中にあつて、この力——マルクス的の要素——をいかに生かし、深め、浸透

せしめ展開せしめるかの道をしらなければならない。そしてその道とは所謂『結合に關するマルクス的原理』に外ならない。だが我々はいまこれを一時に、その十分なる形態にまで戰いとるをうるものと考えてはならぬ。無產者階級は、今や果敢にしてたゆむことなき理論的闘爭によりて特に之を戰いとらなければならない必然に迫られている。だが暫くその限度に止まらねばならぬ」云々と（「マルクス主義」一九二五年十月）。

このようにして福本イズムは山川イズムを左から右へおしだし日本共產黨の指導理論となつたのであるが、のちに指摘されたようにそこにいう主體または主體的條件とはあくまで意識であり觀念的主體にすぎないのであつて、それは勞働者階級の闘爭の現實の組織とは無關係のものであつた。かれは何より大衆の成長が大衆の「外部」における意識分子（とくにインテリゲンチャ）の政治的曝露と理論闘爭によつて遂行されるとみなし、結局インテリゲンチャの役割と理論闘爭の意義との過重評價におちいつたのであつた。かくて福本イズムは、共產黨をもつてマルクス主義的に思考する人々・すなわち何よりもインテリゲンチャの集團であつて勞働者階級の闘爭組織ではないとかんがえ、したがつて共產黨を大衆より孤立せしめ黨の大衆化を拒否し、プロレタリアートの獨立性を大衆團體の中に解消してしまつた。そしてそこからプロレタリアートの大衆組織に共產黨の役割を演ぜしめ、黨があたらしい力をくみとる貯水池でありまた前衛と全勞働者大衆とをむすびつけるベルトであるプロレタリア大衆組織を破壞するにいたつたのである。

いづれにせよこの福本イズムの影響のもとに、まづ從來の一さいの運動上の分裂はその「分離結合の理論」によつて合理化され、評議會その他の實踐面の人びとは工場內の闘爭をはなれていわゆる「理論闘爭」に熱中するにいたつた。最初は評議會がのちには勞働農民黨が前衛たるの役割をになわしめられたため、これらの組合員や黨員は意識の完成と規律とを要求され、いわゆる「理論闘爭」が組合や政黨をその中にまきこみ、組合その他の中央部はさながら「指令發行所」の觀をていするにいたつた。このように日本共產黨を支配した福本イズムの影響は、無產政黨や勞働組合の戰術と組織とにきわめて强烈にあらわれたため、實踐の發展とともにその矛盾はしだいに顯著となり種々の害惡をもたらしはじめた。黨は一九二七年金融恐慌以後のいわゆる日本資本主義の危機情勢における勞働者農民の奮起にたいし、工代會議運動・議會解散請願運動・對支非干涉運動等を指導し、この闘爭をつうじて大衆を革命化することに努力し、すべての重要な運動を「工場へ」のスローガンのもとにおしすすめたのであるが、それらの闘爭がすべて福本イズムの指導のもとに勞働農民黨・評議會をつうじておこなわれたことは、あらゆる點でプロレタリアートの闘爭の混亂と破壞をもたらす主因となつたのである。かかる主因となつた福本イズムに徹底的批判をくわえ、もつてプロレタリアートの運動をただしい軌道にのせる動因をなしたのが、一九二七年七月のいわゆる「日本に關する決議」にほかならなかつた。

III　黨の再組織と三・一五事件

これよりさき黨再建の指導精神となりその再建大會における一さいの方針を決定した福本イズムにたいして、コミンテルン本部はまつさきにつよい反對を表明しその徹底的討議のために黨の代表を招集した。かくて一九二七年六—七月モスコーにおいて日本の黨代表者參加のもとに討議せられ、その結果できあがつたものが「二七年テーゼ」であ

つて、これは日本の黨が當面する革命運動の一きいの組織的問題・戰略戰術問題についてあますところなき批判と決定とをあたえたのである。日本の黨代表は二七年十一月このテーゼをたずさえて歸朝し、ただちに十二月二日擴大中央委員會を開催してこのテーゼを討議し、壓倒的支持のもとにこのテーゼを實踐にうつすことを決定した。福本イズムが實踐上で種々の矛盾と混亂とをひきおこしつつあつたさいとて、このあたらしい方針は運動の前途に決定的展望をうちひらいたのである。

黨はこのテーゼの方針にもとづき、ただちに黨全體の根本的再組織と改革とをおこなつた。第一に從來の組織方針を一變し組織の重心を工場におきかえ、從來の五人組組織をあらためて工場細胞または工場細胞準備會をつくり、ここにはじめて大工場に直接その根をおろすにいたつた。次に從來の大衆から全然姿をかくし合法的組織をつうじて間接に指導するという活動方針をも一擲し、はじめて公然と政策・綱領をかかげて大衆の前にたちあらわれた。すなわち中央委員會は、政治・組織・勞働組合運動・當面の諸政策等に關するテーゼをそれぞれ討議決定するや、これをただちに公表し、また別に中央機關紙「赤旗」を創刊し、これを黨員のみならず黨の周圍の革命的勞働者のあいだにもひろく頒布したのである。こうした組織活動方針の根本的轉換によつてその後黨の組織的勢力は急速に擴大し、再組織前の黨員數百五十名前後が一躍して數千名に增加し、その階級構成比も以前の勞働者六〇％・インテリゲンチャ三〇％・農民一〇％の割合が勞働者八〇％・インテリゲンチャ一〇％・農民一〇％割合に變化するにいたつた。けだし從來評議會・勞働農民黨をつうじてのみ黨の活動に接し合法的行動の制約になやみつつあつた多くの革命的勞働者が、公然たる黨の進出に應じて急速にこれに吸收せられたからである。

黨がその再組織によつていわゆるボルシェヴィキ化のみちにはいり本來の勞働者黨としての實質をおびるにしたがつて、古い山川イズムや福本イズムの殘滓は急速に淸算されていつた。山川均を先頭とするおもに古參社會主義者の人びとは黨の再建に消極的態度をじしてはいたが、いまだ公然とこれより分離しまたは對立してはいなかつた。しかるに二七年後半テーゼ發表前後よりそれが福本イズムを批判している點をとらえて猛然と進出を開始し、のちに呼稱された「勞農派」なる分派を形成し別に機關誌を發行して、理論的にも組織的にも黨と對立するにいたつたのである。本來かれらをもすべて抱擁して日本の革命的社會主義的要素をうつて一丸とすることがテーゼの趣旨であつたが、舊山川イズムと福本イズムとの特殊な歷史的關係はもはやこれを不可能ならしめており、ここに黨は翌二八年二月の第二回全國組織會議で勞農派を正式に除名せざるをえなかつた。

山川イズムにつづいてこれまで黨の指導理論となつていた福本イズムも黨の自己批判をつうじて急速に淸算克服されていつたが、しかしその影響力がきわめて廣くかつ深かつたそれだけ、再組織過程が黨の內外にある程度の混亂と動搖をひきおこしたことも否めなかつた。大衆組織たる評議會の方はこれによつて革命的勞働組合としての機能と職分とを全幅的に發揮しうる條件をえて問題はなかつたが、最大の課題はこれまで唯一の勞働者黨として前面におしだされていた勞働農民黨にたいする根本觀念を打破することであつた。轉換が急激でありしたがつてそれに應ずる實踐的な鬪爭力・宣傳力もなお充分でない以上、勞働農民黨を唯一の革命的政黨としんじている大衆のかんがえを急速に打破することは困難であり、それで黨は最初これと機械的に對立せずむしろブルジョア政黨との對立の面においてはこれを支持し、無產政黨間の共同鬪爭の發展と合同化への一つのかけ橋たる役割をはたさしめんとの方針をとつた。

そしてその間に、勞働農民黨が革命的政黨たるものではなく勞働者農民の政治的ブロックにすぎないということを、精力的に宣傳しようとこころみたのである。しかし問題は、黨がなお合法的無產政黨なるものを日本の特殊條件の上における大衆の自然成長的な政治的ブロックとしてその存在理由と積極的意義をみとめたところにあり、ここからたとえば日本勞農黨がコミンテルンによる福本イズム批判の事實を强調して宗派的分裂主義の克服を絶對條件とする全無產政黨合同を提唱したのにたいし、黨の合法的機關紙が「全無產政黨の無條件合同」（無產者新聞）をさけぶといつた混亂ぶりが現出されたのである。無產政黨そのものにたいする態度の不徹底と曖昧さとが、結局社會民主主義や日和見主義にたいする鬪爭・批判をある程度拘束し混亂せしめたのであつた。

ともあれその急速な再組織の上に、黨は公然たる鬪爭の歷史的第一歩を一九二八年の總選擧においてふみだした。黨は、何よりも第一に工場を基礎として黨をきずきあげ黨の勢力を擴大するために、第二にブルジョア議會の階級的本質を曝露しプロレタリアートの階級鬪爭の發展と組織化をうながすために、この選擧戰を最大限に利用し、黨のスローガン「勞働者農民の政府」を勞働農民黨にかかげさせ、勞働農民黨候補者として黨員を立候補せしめた。これらの黨員立候補者たちは黨の統制に服しつつ全國各地においてあらゆる大衆鬪爭の先頭にたち、集會・デモ・工場組織活動にもつとも勇敢に挺身して、もつてひろく大衆の支持と信賴とをうるのに成功した。この選擧に他の無產政黨をひきはなして勞働農民黨がおさめた多大の成果は、じつに共產黨の直接間接の影響と指導のおかげであつた。

總選擧を終つた二月下旬、中央委員會は第二回全國組織會議をひらき、それまでの諸鬪爭の結果を檢討し集約し確認した。そしてそこで、組織方針・スローガン・無產政黨合同問題・選擧後の鬪爭・勞農派處置問題等々についての決議を可決し、これを一段階として四月中に黨大會を召集するにけつした。しかるにまさにこの大會準備中の三月十五日、黨はふたたび大彈壓をうけることとなつたのである。これよりさき黨の公然たる進出によるその影響力・組織力の急速な擴大に恐怖した支配階級は、いちはやくこれへの彈壓を決意し、總選擧後の好機をとらえてここに大規模な攻擊を敢行したのである。このために支配階級は全國二十一檢事局と、東京のみで五萬の警官を動員し、突如一千名ちかくの勞働者農民を逮捕し、勞働農民黨・評議會の全機關を破壞し、すべての事務所を警官によつて占領するという暴虐のかぎりをつくし、四月十日には勞働農民黨・評議會・無產青年同盟の結社禁止を命ずるにいたつた。

しかも支配階級はかかる組織的計畫的な階級鬪爭彈壓を隱蔽するために、「國體に關し國民の口にするだに憚るべき暴虐なる主張を印刷して各所に宣傳頒布するにいたつては、不逞狼籍言語道斷のしだいで、天人倶に許さざる惡虐の所業である」（田中首相謹話）という最大級の惡罵をふりまき、みづからの非道を辯護しつつ、共產黨の影響力擴大を防止せんとくわだてたが、しかもなお支配階級自體「今回檢擧された人びとの中には非常にまじめな分子が多いのである。ひつきようするにかくのごとき思想がびまんしてゆくということは、そこにかれらの共鳴する何物かがあらねばならぬ。そこに社會組織上に何等かの缺陷があるのではあるまいか」（小山檢事總長談話）と、自己批判の言葉をはかねばならなかつたのである。

IV　三・一五事件以後

三・一五事件とそれにつづく三團體解散とは、日本共產黨にとつてもまた意識的勞働者たちにとつても大きな打擊

であつた。しかしこれによつて黨もプロレタリアートもけつしてひるまなかつた。黨は檢擧の網にもれた黨員たちによつて急遽に再組織と機關の恢復とに着手し、四月末にははやくも全國的な連絡を回復し、「赤旗」の再刊すら可能ならしめた。檢擧をまぬがれた黨内外の革命的勞働者・インテリゲンチャたちも、自發的に工場細胞の再組織や大衆團體の再建のために活動した。こうした大衆の下からの力に立脚しつつ黨は大衆的抗議運動を宣傳し、暴壓反對運動をおしすすめた。黨は、勞働農民黨の解散にたいしてその政黨的再建ではなくて勞農協議會の組織によつてたたかうことを提唱し、また評議會の解散にたいしては産業別組織を基礎とするあらたな再建への方針を主張した。なお無産青年同盟の解散にたいしては、何よりも共産青年同盟の再建の方針をとつた。

このほかにも再建途上の闘爭において、黨は當時政府が企圖した山東出兵に猛烈に反對し、中國共産黨と共同會議をひらいて日本帝國主義の中國侵略反對の共同宣言を發した。このとき黨が組織した對支干渉にたいする大衆的反對闘爭こそは、その後一貫して黨の活動をつらぬいた反戰闘爭の第一歩だつたのである。しかしかかる黨の再活動と恢復とに面した支配階級は、さらにこれへの根こそぎ的な組織的彈壓をくわだて、まづ一さいの革命運動を死刑をもつておびやかす改惡治安維持法を緊急勅令によつて公布し、他方で同時に彈壓主體である特別高等警察網を全國にわたつて設け、一さいの教育機關を動員して天皇主義教育の强化と「思想善導」に突進せしめ、大學から左翼教授を追放し社會科學研究を抑壓し、要するに民主主義的進歩的革命的運動にたいするありとあらゆる迫害策をこうじたのである。こうしたあくなき官憲の追究・逮捕・拷問等々によつて一部の分子は恐怖し動搖し、一方では獄内の中から解黨派なるあたらしい裏切り分子を發生せしめるとともに、他方では再建運動の中に合法主義的傾向をうむにいたつた。

しかしこれらは一部分たるにとどまり黨の大勢は一歩もひるむことなく、暴壓への闘爭をつうじて着々と陣營をたてなおしていつたのであつて、このことはさきの「第一次共産黨」檢擧の場合と比較し、勤勞大衆の左翼化革命化が日本資本主義の危機の上にいかにすすみつつあるか、黨がこれに對應していかにただしい組織と戰術とをとつているか、これによつて黨がもはや以前とことなりいかに强固な地盤と基礎との上にたつているか、等々を明證してあまりがあつたのである。これらは要するに、七月テーゼ以後黨が大工場の中にはじめて根をおろしえたおかげであつて、その思想的陶冶とあいまつて黨はその後も連續的な彈壓にもかかわらずもはやみずから解黨するごとき敗北主義におちいることはなかつた。

この全國的な破壞狀態からの急速なたちなおりにおいて、もつとも大きな促進要素となつたものの一つにこの二八年夏にひらかれたコミンテルン第六回世界大會があつた。この大會のために黨は三・一五の暴壓以前より準備していたため、これになんらの支障なく豫定どおり代表たちは參加することができた。コミンテルンの全時期をつうじてこの大會は日本の黨の勢力が最もつよく代表された場合であつて、世界革命運動の一等星たる老セン・片山を筆頭に山本懸藏・市川正一・佐野學・高橋貞樹らの代議員たちが一さいの討議に參加し、めざましい活躍ぶりをしめしたのである。とくに注目すべきは、日本の黨の大衆化・黨員の大衆的吸收・大工場の獲得・評議會の再建・改良派組合内での革命的反對派の結成等々を强調せる日本問題に關する特別の決議が採擇されたことであつた。これのほかにも大會で決定された植民地革命運動に關するテーゼが、合法的無産政黨の役割と意義とを明確に否定したことは、當時勞働農民黨の再建問題に當面していた日本の黨の方針・態度のために決定的な基準をすえつけたのである。これら世界大會

の諸決定やテーゼは、代表たちの手によつて二八年秋から年末へかけてぞくぞく内地へもたらされ、すでにしだいに恢復しつつあつた黨組織の方向を確立しその活動を強化し、ここに黨は翌二九年初頭にはほとんど完全に陣容をたてなおし、より積極的な反撃にうつらんとする態勢にはいつた。ただこの再建途上、獄中にうばわれたいくた優秀な指導分子のほかに、もつともすぐれた指導者たる渡邊政之輔の非命にたおれた一事は、黨およびプロレタリアートにとつて最大の犠牲であつた。

V　總　括

大戰後最初のプロレタリアートの黨として結成されながら解黨というあやまつたみちにふみこんだため、日本共産黨が廣汎な大衆の左翼化の上に再結成されたときには、すでに合法的無産政黨が種々の大衆團體を地盤として成立し、しかもそれがもつ基本性格の必然の故にはやくも分裂相剋の混亂に入らんとする狀態にあつた。かかる事態に面して日本共産黨は、ひきつづきその再建前後をつうじてただしい指導理論をもちえなかつたため、これにただしい態度をとることができず、單に敵にたいしてだけでなく味方の大衆からもみづからを隱蔽し、左翼無産政黨の名によつて自己の政策を間接的に遂行するというあやまれる方針をとるにいたつた。

このように日本共産黨がはじめは山川イズム、ついで福本イズムといういずれも小ブルジョア的觀念的な理論によつて指導されたという事實は、これを客觀的にみてけつして偶然ではなかつたといえるであろう。ながい沈滯期をへて第一次大戰後突如急潮のごとく勃興發展した日本の勞働者運動にあつては、先進諸國のごとくながい鬪爭經驗の中からきたえられ訓練されつつ社會主義意識と結合して強固なプロレタリアートの前衛が形成されていくといつた餘裕はなかつた。このため前衛黨としての共産黨は、少數の革命的インテリゲンチャと勞働者とにより主として上から早急に形成され、これは天皇制權力の狂暴無比な抑壓と勞働者運動全體としての未熟とあいまつて、おのずから最初は日和見主義的な觀念的なまたはセクト的な理論の支配をうけざるをえなかつたのである。かくて山川イズム（解黨主義）や福本イズム（宗派主義）の黨への影響は、黨が苦難にみちたジグザッグのみちをたどりつつ一歩一歩ただしき方向にむかつて發展成長してゆく上での一里塚と稱すべきものであつた。

この山川イズムが共産黨の組織的獨立性を否定し、大衆の成長の中から自然發生的にうまれるべきものとして黨を大衆團體の中へ解消せしめたとすれば、福本イズムは共産黨をなによりもマルクス主義的に思考する人びとの集團として觀念的に規定し、黨本來の機能を大衆團體に代行せしめてしまつた。兩者いづれも共産黨の獨立的な組織と機能を大衆から隱蔽してしまい、その結果一方で黨の思想的影響力と組織力との間に大きなギャップを生ぜしめるとともに、他方で黨に對する支配階級や社會民主主義者の組織的デマゴギーにたいして公然と抗爭しうるだけの立場をうしなわしめたのである。そのためたとえば、「共産系とはどういうものか」という一讀者の質問に無産者新聞編輯部が「共産系といつているのは改良主義者の一つのデマゴギーである」とこたえたり、無産政黨の組織問題において黨にぞくする革命的勞働者が共産黨員でないことを辯明せねばならぬといつた矛盾と混亂が生じたのであつた。

このように未成熟な黨を支配したあやまれる理論のため、その鬪爭の過程においていくたの過失をおかす結果をきたしはしたが、それにもかかわらず黨はそれが歴史的におかれた地位と役割の故にまた世界革命運動との結びつきの

故に、すべての誤謬と失敗とを勇敢に清算し克服しつつ、眞の革命的前衛黨たるの眞價を發揮していつたのである。

第七章　合法と非合法との相剋

（一九二八——三〇年）

I　日本資本主義の危機

すでにみた如く一九二七年四月金融恐慌の形で現れた日本資本主義の安定の崩壞は、勞働者大衆の窮乏化をもたらし左翼勞働者運動の急速な發展のための條件をつくつた。しかもその恐慌では一時的救濟政策によつて矛盾が彌縫されたにすぎなかつたから、その後生產と消費との矛盾は益々擴大し、操業の制限・合理化の强行・大量失業等の犧牲によつて獨占資本はようやくその發展を維持することができた。しかもこのような根本的矛盾、すなわち一方に生產力の擴大・生產の增加とともに巨大金融資本のヘゲモニーによる全產業部門での獨占の强化、他方で勞働者・農民・小市民の窮乏の增大という根本的矛盾は、一九二九年末には未曾有の程度にたつしてしまつた。かかる矛盾の推移の上に同年アメリカ合衆國に發した世界經濟恐慌のおそるべき大浪が翌三〇年の春よりおそいかかるにおよんで、日本資本主義は今や根底から震駭されるにいたつたのである。戰後資本主義の一般的下降傾向に反して例外的に上向的發展をつづけきたつた日本の經濟社會は、この決定的一擊をうけて全矛盾を爆發せしめ、未曾有の危機におちこんだ。

何より一方の極における巨大獨占金融資本の制覇の推進と他方の極における構成的失業者の大群の發生・プロレタ

リアートの生活條件の悪化・中小企業の沒落等々——これらは必然的にプロレタリアートの闘争の激化・全體としてのその左翼化を一そう促進せずにはおかない。このため支配階級は露骨な階級的政策をとり、その抑壓體系の強化・白色テラーの強行とともに、また勞働者運動内における社會民主主義的翼との結合・その利用と懐柔とにも努力する。かくて大衆の左翼化の上にその利害を代表してたたかわんとする革命的要素と支配階級の要求に對應せんとする日和見的要素との相剋は、ますます激化し尖鋭化するのである。

こうした事情を、以下數字的にややくわしくのべてみよう。まず第一に恐慌と合理化の強力的推進は、プロレタリアートの上に就業勞働者數の減少・失業者の激増・勞働者階級の生活條件の悪化となつて直截にあらわれる。すなわちこの時期は企業の整理・解散の時期であり、巨大獨占資本は産業合理化によつて大量解雇を實施し、弱小資本もまた巨大獨占資本に集中されるかもしくは自滅するかによつて大量整理あるいは全員解雇をもつておわらざるをえないため、失業者の激増と比例して、就業勞働者は絶對的にも著減する（第十一・十二表）。しかもこの間をつうずる産業合理化は、日本ではとくに勞働日の絶對的延長・勞働強度の増進の方向においておこなわれ、巨大資本においてのみわずかに勞働日の延長と併行して規格化標準化による生産性の向上がおこなわれるにすぎないため、就業勞働者の一般狀態は急速に悪化してゆく。このような失業による飢餓の脅威と就業條件の悪化とはかれらをしてストライキその他の經濟闘争の激化えとおもむかせる。

第十一表

勞働者總數

年次	
1927	4,703,757
1928	4,824,780
1929	4,873,081
1930	4,713,002
1931	4,670,275

第十二表

工場勞働者數

年次	
1927	1,898,872
1928	1,936,249
1929	1,825,022
1930	1,683,563
1931	1,660,332

第十三表

爭議およびストライキ統計

年次	爭議 件數	爭議 人員	ストライキ 件數	ストライキ 人員
1927	1,202	103,350	383	46,672
1928	1,021	101,893	397	46,252
1929	1,420	172,144	576	77,444
1930	2,290	191,838	907	81,862
1931	2,456	154,528	998	64,536

かくて一九二九年三〇年と爭議およびストライキ件數は飛躍的に増加し、一九三一年には前者で二千五百件、後者で一千件になんなんとする數字をしめすにいたつた（第十三表）。その闘争内容も恐慌による資本の攻勢をうけていちじるしく自己防衛的守勢的性格をしめすとともに、他方で闘争形態は激化しさきの反動恐慌のさいとおなじくしだいに長期化しネバリすよくたたかわれる傾向をしめす（第十四・十五表）。そしてこの間の闘争をつうじて勞働者の組織が急速にのび、ストライキその他の闘争への組合關與率もまた著増するにいたつた事實は、大衆闘争の激化と組織運動との密接な因果關係をものがたるのである（第十六・十七表）。（このさい一言注意しておきたいのは、一九二八年の一時的減少はかの暴虐な三・一五事件およびそれにつづく三團體の解散にもとづく

第十四表

爭議要求事項別比率（%）

年次	積極的要求	消極的要求	不明
1927	28	36	36
1928	31	33	36
1929	18	48	34
1930	11	76	13
1931	20	66	14

第十五表

ストライキ繼續日數別比率（%）

年次	3日以内	4日–10日	11日–30日	31日以上
1927	37.6	30.8	17.8	12.0
1928	40.1	34.0	17.9	6.3
1929	28.8	34.2	25.3	9.7
1930	20.5	35.0	29.7	12.1
1931	27.2	30.6	24.4	14.8

第十六表

ストライキと組合關與件數

年次	總件數	組合關與數	比率（%）
1927	383	259	67.6
1928	397	233	58.7
1929	576	362	62.8
1930	907	596	65.6
1931	998	713	71.4

第十七表

組織勞働者數と組織率

年次	組織勞働者數	組織率（%）
1927	309,493	6.6
1928	308,900	6.2
1929	330,985	6.8
1930	354,312	7.5
1931	368,975	7.9

ものであるということである）。

ところで最後に、こうした大衆の闘争力の昂揚がやがて右翼組合幹部の意志をのりこえてすすんでいつたという事實を指摘しておこう。たとえばすでに一九二七年の野田醤油大争議において總同盟關東同盟會の罷業回避方針および勸告にもかかわらず、支部組合員大衆の闘争心昂揚によつてストライキに突入し、十カ月にわたる日本勞働爭議史上最大の大爭議を展開した事實があらわれ、一九二八年社外船ストライキでは日本海員組合幹部たちがストライキに反對し平和的交渉による解決を希望したにもかかわらず、大衆はかかる態度に反對してストライキを敢行しており、一九二九年には組合官僚にたいする大衆の不滿が總同盟第三次分裂となつて典型的に表示された。いずれにせよかくのごとき經濟恐慌と階級闘争の激化は、それにたいする革命的指導の如何によつてその資本主義機構に重大な影響をあたえずにはおかぬであろう。ここに勞働者運動そのものは前段階の左右兩翼の對立よりは、むしろ支配階級との闘争における合法か非合法かの相剋となつてより深刻尖鋭な形態をとるにいたつたのである。

II　新黨準備會から新勞農黨へ

すでにのべたごとく、日本共產黨が大衆のまえに公然と政策・綱領をかかげて進出していまだ數カ月もたたないうちに官憲の大彈壓をうけるにいたつたため、黨が破壞された全組織の再建を開始したときには、いまだ舊勞働農民黨にたいする大衆の旣成觀念を打破し、唯一のプロレタリアートの黨は共產黨以外にないというかんがえをひろく確立せしめるまでにいたつていなかつた。じつにこの問題が黨の再建問題と勞働農民黨とのそれを交錯させからみつかせ、爾後數年間にわたつて合法か非合法かの相剋の中に全左翼陣營の精力を傾注消耗させ、そのいずれをもへト〳〵に疲勞せしめる禍因をなしたのである。

これよりさき二八年四月評議會その他の三團體が解散されるや、舊勞働農民黨の全國の同志たちは黨が擁した大衆勢力の分散をふせぐために、とりあえず新黨準備會なるものをつくつて黨の再建にそなえた。このとき同じく破壞された組織の恢復に努力しつつあつた日本共產黨の指導者たちは、この新黨準備會なるものが工場・農村に根をもつた勞働者農民の協同組織體＝大衆の動員組織たるべきであるという建前から、それが「かかる暴壓期にいたすらに形式的結黨をいそぐのは間違いである。むしろこのさい結黨えの方向を勞農協議會確立の方向へむけるべきである」との方針を確立したのである。しかるに當時大衆の大多數はなお勞働農民黨がプロレタリアートの唯一の黨であるとかんがえていたから、暴壓によつて一層たかまつた闘争心のもとに結黨へ結黨へとそのみちをつきすすめていつた。かかる大衆の意志に面してこれを共產黨再建の方向に全面的にきりかえるべく時間的餘裕も指導的能力もまだ充分でなかつた共產黨は、結局勞働農民黨の再建に追隨せざるをえなくなり、その勞農協議會の方針は實質的には結黨えの大勢の前におしながされてしまつたのである。

かかる中にコミンテルン第六回世界大會（七—九月）がひらかれ、その諸決議が黨代表者たちによつて日本へもちかえられたのであるが、とくにその中の「植民地および半植民地における革命運動に關するテーゼ」が「特別の勞働者農民政黨は一時の間は革命的性質をもとうとも、あまりに容易に普通の小ブルジョア的政黨に變化するおそれがある。それゆえにかかる政黨を組織することは得策ではない」とハッキリ規定していたことは、折から勞働農民黨再建

問題に當面しつつあつた共產黨の態度と方策とを決定的にするに充分であつた。これよりさき共產黨は、勞働農民黨をもつて唯一のプロレタリア黨としんする大衆の觀念を打破し、共產黨こそ唯一のプロレタリアートの前衛であり政黨であるということを宣傳しつつあつたが、しかしこのさいとても共產黨と併立する勞農政黨の存在そのものはけつして否定せず、むしろ日本のごとき特殊な條件下にあつては勞働者農民の結合同盟の組織として勞農政黨は絶對に必要であるとみなしてさえいたのである。このように共產黨を唯一の黨としながら他方で政黨としての勞働農民黨をみとめたのであるから、そこに種々の矛盾と混亂を生じ大衆にあいまいな印象をあたえたことは當然なのであつた。しかるにこのあたらしい規定は、今や共產黨と併立する一さいの勞農政黨の存在を否定したのであるから、當面の新黨準備會の結黨運動にたいする黨の態度もここに根本的に轉換せざるをえなくなつた。

一九二八年九月十日の無產者新聞社說は、「そもそも大衆的勞農政黨は我國資本主義發展の歷史的客觀的諸條件にもとづき絶對不可缺的必然にせまられた組織であつて、この大衆黨は絶對に組織しなければならず、また組織しうる客觀的條件を具備しているものである」として結黨運動を支持し、十月二十日同紙社說もまた「わが勞働者農民が資本家地主の搾取と壓制から解放されるためには、强固なる前衛黨の指導とともに、勞働者農民の結合同盟たる勞農政黨の組織が絶對に必要である」と勞農黨の再建を强調していた。しかるにさきのテーゼによる黨方針の根本的轉換のため、十二月五日の無產者新聞社說は突如として勞農政黨の意義を根底から否定し、「我々は政黨と動員組織との區別にたいするハッキリした認識をかいたために、共產黨以外に合法的無產政黨が必要であるかのごとき誤謬におちいつた。この解黨派的見解は、今日急速に淸算されなければならぬ。……この共產黨の組織を拒否しその非合法活動を排擊する合法的無產政黨はいかに表面對立を裝ふとも、いずれも社會民主主義を奉するものであつて、それはひつきよう同じ穴のむじなにすぎない」と宣言し、同十五日にはさらに新黨準備會の結黨運動の合法主義傾向を警告し、「新黨の今後の組織形態は、帝國主義戰爭反對同盟・治安維持法廢止同盟・團結權獲得同盟・議會解散鬪爭同盟・勞働者農民選擧同盟等々の合法的舞臺をつくりだし、これを組織內容とした勞農協議會としてますます發展してゆくであろう」とその方向をさえ指示するにいたつた。しかしこのときはすでに新黨準備會の結黨準備は全國的に着々進行し、十二月二十二日の結黨大會まで豫定されていたのであるから、共產黨としては單なる一片の指示のみによつてこれを阻止することはできない情勢にあつた。そのため黨は、一方では合法政黨の意義を否定しながら他方で新黨準備會の結黨を擁護するというジレンマにおちいらざるを得なかつた。

この矛盾を解決するため黨がとつた方針は、「革命的結黨にむかつている大衆をしてその結黨運動をおしすすめて支配階級と衝突せしめ、大衆自身の經驗によつてプロレタリアートの革命的政黨は合法政黨にもとめえられないということ、支配階級はプロレタリアートの合法的政黨が鬪爭的革命的であるかぎりけつして容認しないということをまなばしめ、もつてプロレタリアートが眞に支配階級と抗爭しうる黨は共產黨以外にないということをおしえるために利用する」というのであつた。いわゆる玉碎主義のスローガンはかくして生れたのである。したがつて豫想どおり十二月二十四日勞働者農民黨結成大會（第三日目）が解散を命ぜられるや、ただちに合法政黨組織にかわる勞働者農民の鬪爭組織＝政治的自由獲得勞農同盟（政獲同盟）の結成をつよくよびかけたのである。

かくの如く政獲同盟は今や共產黨大衆化のため一つのふみ石たるべきものであり、大衆をして三度合法政黨をつく

1　新黨準備會から新勞農黨へ

る意志を放棄せしめるとともに漸次そこに結集された大衆を黨の中に吸收してゆく手段たるべき役割をもつたものであつたのであるが、それにもかかわらずこの間に若干の誤謬がうまれ、「戰鬪的勞働者農民を分散させないためにすなわち鬪爭實體確保のために政獲同盟を組織せよ」のスローガンが第一線におしだされてしまつた。すなわち合法政黨を組織するかわりに政獲同盟を組織せよという、いわば政獲同盟に固定的永久的性格を賦與する傾向がうまれたのである。このことは前衞の鬪爭經驗の不足と戰術適用の不なれとをしめすものであるが、何より前記のごとく合法的勞農政黨否認の宣言があまりにも唐突にかつ上からおこなわれたためそれはホンの一部にしか徹底せず、これによつては當時黨内外になお强固にのこつていた舊勞働農民黨の役割にたいする評價と執着とをとうてい打破できなかつたのが根本理由であつた。

かくて黨は、いまやかかる黨内の動搖と不確信を清算するためには政獲同盟を革命的に解體しなければならないという結論に到達した。ここに革命的解體とは、同盟内の革命的要素を急速に共產黨へ再組織することを意味するのである。しかるにこの正しい方針を中央部が決定して（二九年三—四月）まもなく、ふたたび官憲の大彈壓が下り（四・一六事件）、前の檢擧でもれた活動的分子の大部分は檢擧せられるにいたつた。この大檢擧は黨の組織を根底から破壞し指導部を崩壞にひんせしめ、經驗にとんだ多くのオルガナイザーをうばいさりその連絡網を切斷した。このおそるべき打擊こそが、じつに折角決定された政獲同盟解體方針を一擧に逆轉せしめるごとき形勢をもたらしたのである。すなわちあらたに生じた黨空白狀態の中に、主として舊勞働農民黨の合法面に活動しきたつた人びとの間に、「このさいわれわれはふたたび勞農政黨をつくり共產黨が再建されるまで獨自の指導部をつくつて鬪爭をすすめてゆくべきではないか」という意見が生じてきたのである。こうした意見は、四・一六の打擊によつて政獲同盟に結集せる大衆が全國的な統一的指導をうしない、いわゆる分散鬪爭の傾向を生ずるおによんで有力な實踐的地盤をえはじめた。わずかにのこされた黨の指導部は、事態を收拾しこの傾向を克服するべく全力をあげてたたかつたが、しかしついに力およばなかつた。かくして勞農政黨否定のための黨の努力を一擧にくつがえす公然の企てが、一九二九年八月七日大山郁夫・細迫兼光・上村進連署の「新勞農黨樹立の提案」となつてあらわれたのである。その結果政獲同盟は分裂し、左翼陣營は今や合法派・非合法派の慘たる相剋の修羅場と化するにいたつた。

III　左翼陣營の分裂と混亂

以上のごとく革命の主體的勢力の弱化と指導力の後退は、小ブルジョア的指導分子に活動の機會をあたえ、結集すべき組織をみうしなつた左翼大衆の一定部分をして新勞農黨に參加せしめてしまつた（二九年十一月一日）。しかしながら新勞農黨は結成の最初から共產黨の反對をおしきつて成立したのであるから、もはや舊勞働農民黨のごとく共產黨と組織的連絡をもつことは全然なく、その指導部は最初からいわゆる勞農黨第一主義をもつて運動を推進せしめていつた。したがつてその活動はすべて現實には左翼の勢力を二分し、共產黨や日本勞働組合全國協議會と對立し、または對立を固定化し、左翼勢力の擴大强化とはまつたく逆に左翼勢力を分裂せしめる以外のものではなかつた。このことはその後の鬪爭の過程をつうじてますます明白となり、一九二九年末の大阪ゼネラルモータース會社のストライキのごとき、この新勞農黨の役割を明白にした典型的事例であつた。これによつて當初新勞農黨に進步的意義をみ

とめて參加した左翼分子もしだいに反省しはじめ、新勞農黨の存在自體が左翼の擴大强化のために有害ではないかと疑いだすにいたつた。この傾向は結局翌三〇年八月の勞農黨大阪連合會の解消運動となつて表面化し、十月には河上肇・上村進・神道寛次の「戰鬪的解消」運動えと擴大し、新勞農黨はここに形骸だけの存在と化してしまつたのである。

このようにしてその最初からあたえられた性格の論理的結果として新勞農黨が一年餘にして自壞作用におちいつたのにたいして、直接これと關連ある共產黨そのものはどうであつたか。上からのひきつづく彈壓と內部の合法派との鬪爭に全精力を消耗せしめられたこの黨は、この一九二九年より三〇年へかけてもつとも不幸な狀態におちこんでしまつた。何より、四・一六事件の打擊ののちながい努力によつてようやく恢復された黨指導部を構成したものは、もはや以前とは全然質をことにしたルンペン・プロレタリア的な冒險主義者のグループであつた。しかもそれによつて黨がつねにただしい方針とあらたな力とをくみいれていた革命的プロレタリアートの種々の國際的組織との組織的連絡がこの前後を通じて完全に切斷されたことは、この不幸を倍化したのである。こうした內外の主體的條件の惡化は、當時客觀情勢の一そうの險惡化と相應じて意識すると否とにかかわらず、戰鬪的大衆のあいだに一種の焦燥感を發生せしめるに充分であつた。この戰鬪的大衆のあいだにおける焦燥感と黨の冒險主義的指導とはただちにむすびつくことによつてここにいわゆる極左的偏向が必然的にうまれてきたのであり、新勞農黨との相剋がさらにそれとむすびついて事態を一そうおそるべきものにしたのである。

いづれにせよこの極左的偏向は、その主體的條件を無視して機械的公式的な戰術の適用を結果した。具體的にはすべての運動を一さい地下へ地下へとおいこみ、合法活動を蔑視し機械的に合法活動に對立した結果、それは暴力的破壞行爲に墮しさつた。その影響と結果とは、當時の共產黨および下部組織とくに一九二八年末舊評議會より再建された日本勞働組合全國協議會（全協）の一さいの組織と活動の上に集中的にあらわれた。たとえば「一切の鬪爭を政治ゼネ・ストに集中せよ」というスローガンがかかげられ、これが他の一切の客觀的諸條件を無視して機械的に適用せられた結果、ゼネ・スト萬能主義をみちびいた。あるいは一九三〇年川崎市における全協の武裝メーデー・岸和田紡績・東京市電・建築金物商會・京津電車爭議等々にみられたごとき工場破壞・武裝ストライキ・赤色テロル・燒拂い等のまつたく冒險的極左的な一連の手段と行動とをうみだした。また合法組合指導のストライキの破壞に全力を集中する等、いたるところに名狀すべからざる混亂を招來したのである。かかる戰術上の誤謬と混亂とは、內部の組織の誤謬と混亂とむすびついていた。大體評議會の末期以來勞働組合は大衆の日常的な鬪爭組織であり、廣汎な大衆をその政治的意見にかかわらず結集すべきものであることが强調せられていたのである。にもかかわらず全協を共產黨の組合部と混同し、組合員に一定の世界觀を强要したり上からの指令一本で全組合を動かさんとしたりする極左的逆轉をひきおこしたから、ここに必然的に極左的指導に不滿をかんじた大衆を解黨派の指導のもとにおいやり、あるいは「刷新同盟」のごとき內部批判的分派行動を發生せしめるにいたつた。

これらすべての誤謬は、客觀情勢がまさに强力なただしい革命的鬪爭の指導を要請しつつあつたそのときになされただけ、日本のプロレタリア運動の上にきたした不幸と損失とはじつに甚大なものがあつたといえるのである。この共產黨や全協にあらわれた指導力の弱化と孤立化は、恐慌の深化にともなうブルジョアジーの强硬な態度・官憲の暴

虐な白色テロルの横行の結果であつたにせよ、なおこれに乗ずる右翼改良主義分子の進出・強力かつただしい指導をうしなつた廣汎な組織大衆の混亂・さらに一般未組織大衆の放置、等々の事態をうみだしてしまつたのである。

IV　革命運動の再建へ

一九三〇年早々世界恐慌の激浪をひつかぶつた日本資本主義は、その年後半より農業面への恐慌の擴大・農業恐慌による農村危機の激化によつて、いよいよ深刻な矛盾を露呈しはじめた。農産物價格の急落・金融資本の搾取・租税の重壓等のため農家の負債は激増し自作農は沒落し、農村の階級分化は急激なテンポをとるにいたつた。大量の沒落者は都市の恐慌のため農村にとどまらざるをえず、同時に恐慌は都市失業者の大群を歸農者として農村へおいやつた。このため土地飢餓が激成され、小作爭議は土地闘爭を中心に急增し、廣汎な小貧農層は中農層をもまきこみつつ「土地かしからずんば死か」の旗をかかげて闘爭にたちあがつた（第十八表）。

このような農村危機の激化・農民闘爭形態の尖鋭化・爭議の政治闘爭化等々は、必然に都市におけるプロレタリアートの闘爭とのむすびつきをつよめ、資本主義の體制的矛盾とくに天皇制を先頭とする政治支配體制の大きな動搖をひきおこさずにはいない。他方で都市にあつても恐慌の深化擴大は、その打撃を直接うける中小工場の廣汎な未組織大衆をストライキ闘爭にたちあがらせ、官憲の彈壓や右翼改良主義組合の策動にもかかわらずその闘爭力をしだいに昂揚せしめた。このような條件の上に、過去二年間合法と非合法との相剋の中に疲勞しつくした左翼陣營も、ようやくただしい軌道にうつりうる可能性をもつことができた。左翼を分裂せしめた合法派（新勞農黨）の自壞傾向、絶望的極左的偏向の中に運動を混亂せしめた非合法左翼（共産黨）の指導部の清算——これらは一九三〇年後半より、おのづから左翼の全陣營をふかい自己批判と反省と統一と強化との方向にむかわせた。何よりもコミンテルン・プロフィンテルン等の國際組織は、二九年以後の冒險主義的傾向につよい反對を表明し全面的な批判をくわえ、ただしい方針と戰術とによつて黨が大衆の革命化とむすびつきこれを指導すべきことの急務を強調した。

表八十第

土地闘爭の激化

年次	小作爭議件數	土地返還件數	比率（%）
1928	1,866	461	24.7
1929	2,434	704	28.9
1930	2,109	892	42.6
1931（上半期）	1,523	866	56.9

これらの意向が國内にもたらされるとともに、黨はふたたび急速に自己批判の上にたつて擴大強化されはじめた。しかもすでに勞農黨結成より解消運動の過程に如實にしめされた合法政黨の役割の限界性は、實踐をつうじて革命的分子の眼に共産黨の擴大強化によつてだけかう以外に眞實の革命的闘爭のありえないことを明確におしえた。他方で闘爭の激化とともに左から右までの一さいの改良主義幹部の指導の限界性は闘爭にたちあがつた大衆の不滿をよびおこし、幹部と大衆の對立・ストライキ打切にたいする大衆の反對・ストライキ中のダラ幹排撃等々となつてあらわれつつあつた。これらすべての大衆の動向は、断乎たる闘爭によつて支配階級を顚覆せしめんとする共産黨の闘爭とむすびつくべき可能性をしめしたのである。そのほか一九三一年のよりばじまつた獄中の共産黨員の公判闘爭が黨の姿をより廣く大衆の間にしめした事實も、その意義は小さくなかつた。

かくて黨はふたたび大衆としだいにむすびつき廣汎な領域に指導力を擴大するにいたり、改良主義的日和見主義的指導者にあきたらざる大衆は續々と共産黨の指導下に入り、ためにすべての闘爭分野・組織部面において非合法勢力

におびやかされた右翼幹部は左翼の攻撃にのりだしはじめた。かくてこれまで左翼陣營を二つにひきさいた合法・非合法の對立は、左翼の統一化とともに今度は勞働者運動の全面での基本對立として整理され再現されたのである。いずれにせよ革命運動の再建は、黨と組合の活動の諸部面にあたらしい成果をつぎつぎとうみだしてきた。まず一九三一年以來プロレタリアートの國際的諸組織との連絡が強化されて黨は急速にたちなおり、從來黨内分派として黨の鬪爭力をいちじるしく阻害していた解黨派（自稱日本共産黨勞働者派）を黨内から驅逐した。公判鬪爭・獄中被告無罪釋放運動・選擧鬪爭等々では大衆動員に成功し、「米よこせ」の運動ではじめて劃期的な農民委員會の組織を實現させた。あるいはプロレタリア文化運動の推進によつて單に勞働者のみならずインテリゲンチャ・小市民層の間にまで思想的影響力をいちじるしく擴大させた。黨とともに再建された共産青年同盟も、機關紙「レーニン青年」その他に據つて組織の擴大と強化にのりだしはじめた。

また一方全協も共産黨の擴大強化に應じて極左的誤謬を清算し、さきに復歸した刷新同盟を併せて傘下單一組合の整備と強化につとめ、また日本海員組合その他の改良主義組合内に革命的反對派を結成した。全協はまた「下からの統一戰線」運動を強化するとともに大衆の不滿の先頭にたつて鬪爭を組織しはじめ、大衆に改良主義幹部の本質を曝露宣傳し、たとえば一九三〇年十月の大會において東京交通勞働組合（東交）の指導權をにぎり、函館・大阪・兵庫等の地方組織をいちじるしく伸長せしめその地域の鬪爭に大きな影響をあたえる等、強力な進出をしめしはじめたのである。

V　總　括

一九二七年の金融恐慌より一九三一年の滿洲事變前夜にいたる期間・とくにその最後の二年間は、日本資本主義にとつて未曾有の危機であつた。大戰後くりこされた内部矛盾はその重みにたえきれずして爆發し、革命の客觀的諸條件は急速に形成され發展し成熟した。しかるにまさにこのとき革命の主體的條件をなすべき諸勢力は、ただに上からの壓迫によつてのみでなく、自己みずからの精力の浪費によつても力をよわめた。革命的組織がその出發點にあたつておかした重大な組織的過失は、その修正のために二年以上の年月と尨大な内的エネルギーとを賠償として要求した。日本共産黨が單に支配階級にたいしてのみでなく被支配階級自體にたいしてもながくその身をかくし、他方で合法的勞農政黨の存在價値をたかく評價し、後者の名にかくれて自己の政策綱領を遂行せんとしたやり方は、一定の限界において成功したそれだけ、その清算と終局的解決とのために大きな犠牲を必要とした。二年餘にわたる合法か非合法かの左翼内部の相剋こそは、じつに革命的勢力が當初の大きな組織的失策を訂正するための苦惱の集中化された姿にほかならなかつた。しかしかかる内部相剋も、客觀情勢の變化と政治支配の上からの抑壓と組織内部の自己反省の結果としておのずから解決され、革命組織は統一化されてその運動はしだいに正規の軌道にのるようになつた。たとい時間的にも精力的にも多くの無駄と浪費とをみたとはいえ、革命運動は客觀條件の切迫化への追いつき工作をここに開始したのである。だがいずれにせよ日本資本主義の未曾有の危機を前にして演ぜられたこの深刻な自己清算が、資本主義をして戰爭か革命かの岐路にたたしめた次の瞬間における革命的主體勢力の强度を規定したことは否定できないであろう。

ところでこの當時における組織勞働者三十萬・その全勞働者にたいする比率は七%、しかも二百有餘の組合十九の

連合體に分散し反目し抗爭しつつあり、日本共產黨の影響力はさらにその何％かに限定されているという實狀にあつて、果してひとは革命の主體的條件についてかたりうるであろうか。だがわれわれはここで、恐慌と危機の深化が廣汎なる大衆の革命的昂揚をまねき、革命的組織のたちおくれを一擧に回復せしめる可能性を忘却してはならない。脆弱な基礎の上にたち內的矛盾にみちみちた日本資本主義にとつては、革命的勢力の量よりもむしろその質こそがおそるべき致命傷となるのである。そしてこの故にこそ支配階級の氣ちがいじみた左翼陣營への暴壓が必然化し、小ブルジョア的な右翼日和見主義分子の策動が必至化する。戰爭か革命かの日本資本主義の危機の頂點における階級鬪爭のこれらの內的相關關係について、以下にその解明をこころみるであろう。

第八章　戰爭と社會民主主義（一九三〇——三二年）

I　日本社會民主主義の特質と形態

すでにのべたごとく日本の勞働者運動が本格的恒常的な發展のみちに入りはじめたのは、日本資本主義が獨占資本主義・帝國主義の本格的展開をしめしはじめた時であつた。しかもその獨占資本主義は國內および植民地プロレタリアートのきわめて苛烈な搾取の上にのみ自己を維持しうるという特殊な形態をもつていたから、先進諸國にみられるごとく超過利潤の一部によつて廣汎な勞働貴族層を培養するなどはまつたくおもいもよらず、一きいの下からの反抗はひたすら鎭壓政策の對象となり、あるいは個別資本にたいしてせいぜい福利施設と勞働組織における封建的位階制的編制の採用によつて對處せしめる以上にでなかつた。同時にプロレタリアートもその社會關係における廣汎な封建的殘存物の影響によつて組織運動の出發點からして種々の特殊性を刻印され、とくに組織運動における朋黨的小英雄主義すなわち民主主義的な近代勞働者運動內部における非民主主義的要素の强固な殘存という現象を發生せしめた。しかしそれにもかかわらず支配階級の强壓政策は、プロレタリア運動に戰鬪的性格を賦與せざるを得なかつた。かかる戰鬪的性格が客觀的情勢の展開につれて急激な組織の擴大と運動の昂揚とをもたらすや、支配階級はこれに

面してあらたな對應策を講するを餘儀なくされた。一方では國際勞働會議勞働代表選出權の勞働組合えの賦與と普通選擧法の施行、他方では治安維持法・暴力行爲取締法と勞働爭議調停法——がすなわちこれである。これらは先進諸國においてみられるごときプロレタリアートにたいする「飴と鞭」ではなく、日本のプロレタリアートにたいしてはただ鞭のみでありその指導者たちにたいしてのみ「飴か鞭」かの二者撰一として提出されたのである。大衆には飴の一カケもあたえず指導者たちにたいしてだけ飴をしめすことによって何らかの意義を生ぜしめうるということ、これは何よりも日本の組合運動の非民主的缺陷をついたものであり、いわば指導者たちの腐敗墮落によって非民主的組織を骨ぬきにしうることを確信した支配階級の經驗の集約化でもあつた。

このように日本の支配階級が先進諸國のごとき廣汎な勞働貴族層培養のための物質的基礎をかき、ためにそれを節約して一握りの勞働官僚の培養によって代替せしめた——というところに日本社會民主主義の特殊な組織的出發點がおかれた。かかる組織上の特殊性は、同時にその機能役割上の特殊性と不可分にむすびつく。日本の支配階級は西歐のごとく戰術的に社會民主主義をプロレタリアートにたいして廣汎に利用する必要をかんじない故、勞働官僚の培養によって「運動の委任」をもとめるのではなく、むしろ戰鬪化革命化防止の役割・國內の敵との鬪爭膺懲の役割等をもとめるのである。しかもこの場合日本の支配體制の特質に對應して、生れたばかりの社會民主主義は最初から半中世的な天皇制の楯（社會君主主義）たる性格と獨占金融資本の楯（社會ファシズム）たる性格との二重性を不可避的にもたしめられる。

そしてこうした特殊な組織的前提と機能的役割とをもつて形成された日本社會民主主義が、その維持と發展とのために必要とした條件は次のごときものであつた。第一に客觀的條件としてプロレタリアートの特殊な構成內容、すなわちその大多數が繼承的勞働者でなく農村から不斷に流入交替し、ために封建的あるいは小ブルジョア的イデオロギーに影響されて勞働者の階級意識の覺醒が遲らせられる——という事情がこれである。第二には上からの不斷の擁護すなはち勞働官僚の繩張りを維持强化するための治安維持法以下の暴壓體系・および公然隱然の改良主義勞働者運動の官憲の擁護——がこれである。じつに上からの不斷の援助によって改良主義は對左翼鬪爭を展開しえたのであつて、飴によつて大衆を眩惑させることのできぬ日本資本主義は、ただ鞭の强化によつてのみ大衆を威嚇し前進をおもいとどまらせようとし、それだけ殘酷苛烈をきわめたのである。第三に恐慌から恐慌へよろめく資本主義の矛盾の中に必然的に左翼化する大衆が日和見主義的改良主義的指導のもとからはなれんとするとき、それを吸收・組織・指導すべき左翼の力の不充分または戰術の誤謬——がこれである。社會民主主義がその基礎の脆弱性・役割の限定性の故に最初から統一的形態をもつことができず、狹少な組織的基盤と團體利己心と個人的野心との上に分裂相剋をくりかえし、しかも他方で大衆の不斷の左翼化革命化という事態にみまわれながら、なお相對的に存續の餘裕をもちえたのは、かかる社會民主主義傘下の大衆および廣汎な未組織大衆を指導し吸收すべき左翼革命分子の力の不足と戰術上の誤りとが一理由をなしたのである。

およそこうした特質をもつ日本の社會民主主義は、一九二四——五年總同盟の左右分裂・一九二六——七年勞働農民黨の分裂と左右中間派の對立・一九二八——九年左翼陣營の分裂と相剋等々の起伏の中に形成され發展し、一九三〇年ごろにはおのずから次のごとき三つの分野を構成するにいたつた。まづ第一は右翼社會民主主義であつて、社會

民衆黨とその組織的基盤（總同盟を基軸として日本海員組合・海員協會・海軍勞働組合連盟・官業勞働總同盟・日本農民組合總同盟）および小ブルジョア・インテリゲンチャの諸團體がこれに屬する。これらは大なり小なり經濟闘爭において協調主義・組合主義を、政治闘爭において議會主義を主張する。その階級的基礎は一部は海員協會・日本海員組合・陸海軍官業勞働における勞働貴族層（すなわち海員中の一部の高級船員と數次の整理の結果實質的に一般よりやや勞働條件のよくなつた官業勞働者の上層）と都市小ブルジョアジーであるが、大部分は意識水準のひくいおくれた勞働者層とりわけ團體協約による締付工場の勞働者たちである。とくに後者では、闘爭によらず資本家による組合幹部の人的信用にもとずいてクローズド・ショップの協約がむすばれ（かの總同盟第一次分裂の因をなした岡部電機製作所との場合、總同盟關東同盟主事土井直作が人事係として會社に入つた）、その典型たる製綱勞働組合と東京製綱株式會社との團體協約をはじめ一九三〇年には十一組合五十二の協約・その締付勞働者五千七百七十名をかぞえ、また日本海員組合も團體協約によつて日本最大の組合員數を擁した。これらの活動上の特徴は、一方でたとえば「わが總同盟の爭議に關する方針は一貫して罷業最小化の方針である。罷業の政治闘爭化・罷業激發主義は總同盟の斷乎として反對するところである」（一九三一年總同盟第二十一回全國大會）として極力闘爭を回避するとともに、他方では自己の地位保全のために斷乎として分裂を強行する點である（總同盟第一——三次分裂）。この分裂にさいし相手がわを「共產派」と名づけることは右翼幹部の常套手段で、官憲の共產主義誹謗につねに便乘する。官憲そのものにたいしてはいんぎんをきわめ、とえば總同盟機關誌「勞働」のごとき「爭議における官憲の態度」という一欄をもうけ、「官憲の態度公平」等をしばしば宣傳し、官憲を公平な第三者的存在であるかのごとき幻想をふりまく。

かかる右翼社會民主主義が多數の勞働者たちをその影響下におきえたのは、革命的組合や黨派の闘爭に恐怖した資本家たちが革命的組織の侵入にたいする防塞としてかれらを極力利用し擁護したためで、この事情は逆に後者からいつて「共產黨が全然なくなつてしまつても自分達に都合がわるい。がもちろん共產黨は絶對に彈壓されていなければならない」ということになるのである。したがつて恐慌の深化が大衆の左翼化をもたらすやかれらは最初に打擊をうけざるをえず、その結果は議會主義政黨としての社會民衆黨の一九三〇年普選第二回總選擧の慘敗となつてあらわれた（立候補者において前回より十六名增、當選者において二名減）。

さて第二は中間派社會民主主義であつて、一九三〇年七月合同した全國大衆黨（前身は一九二八年の日本大衆黨＝一九二六年の日本勞農黨）と、その傘下組織（全國勞働組合同盟を基軸として日本勞働組合總連合・東京交通勞働組合の一部・全國農民組合の一部）がこれにぞくする。これらの性格はその成立の事情にもつともよく表明され、その活動の基本的限界もまたここに存在する。すなわち中間派幹部は、右翼官僚の露骨な裏切りにあきたらざる大衆を基礎とし、それに追隨して成立したのであるから、勢い大衆の要求を無視することはできず、さりとてその要求のままに實踐するときは自己の中間派としての地位の保持に危險をきたし、ここに闘爭的扮裝をまとい、いつつ闘爭をサボタージュし、口さきで左翼的言辭を弄しつつ實踐でそれを回避するという特異なやり方が生ずる。かれらは最初から本來の大衆的階級的基礎をもたず、單に右翼指導者に不滿をかんじたプロレタリアート・とくに左翼えの彈壓强化の狀態においてかれらを階級的指導者として信用し參加した勤勞者層を基礎とするにすぎないから、右翼社會民主主義のごとく總同盟・海員組合といつた經營體としての確固たる繩張りや勢力範圍をもつことができない。その指導分子は大

體個人的野心をみたさんとする右から左までの多種多様の構成分子をふくむいわば同床異夢の集團であり、一方では大衆の要求と他方では官憲の取締とのあいだを彷徨し、そのため常に左右から脅威せられて地盤維持に躍起とならざるをえない。日本大衆黨——全國大衆黨——全國勞農大衆黨（一九三二年七月）えの變遷はこれをものがたり、また全國農民組合（一九二八年五月日本農民組合・全日本農民組合の合同體）・東京交通勞働組合（一九二九年東京市電自治會・現實同盟の合同體）等の成立は、共產黨事件による左翼勢力の弱化を機にこれらを自己の支配下におかんとするかれらの企圖をしめす。その內部の不斷の紛爭は特有の現象である。

かくのごとく中間派社會民主主義なるものはいわば烏合の衆であり、大衆に追隨しつつしかも自己の保身と野心をたつせんとする二律背反的苦悶の象徵であり、極言すれば左右兩翼からの「はきだめ」的存在であるから、危機の切迫と抑壓體系の强化とは必然的にかれらをしだいに右へおしださざるをえない。要するにかれらはその主觀的意圖如何にかかわらず、客觀的には階級戰線を攪亂分裂せしめ、左翼化する大衆に關所を設けて左えの流入を防止し、大衆のただしい革命的指導を阻碍する役割をはたすのである。

さて第三の陣營は左翼社會民主主義であつて、勞農派・解黨派のグループ・新勞農黨およびその傘下組織（日本勞働組合總評議會・全國農民組合の約半數・東京交通勞働組合の一部・大阪金屬勞働組合）等がこれにぞくする。かれらは最初は大なり小なり正統左翼ないし共產黨の陣營にぞくし、それが彈壓の加重とともに非合法的革命活動にたえきれず小ブルジョア的本質を曝露して戰列を脫したのであつて、對君主制鬪爭の放棄と合法主義との點ですべて一致する。最初の解黨派たる山川均を先頭とする勞農派を省略すれば、第二次解黨派は一九二九年六月大阪における三・一五事件共產黨被告第一回公判廷において、大阪地區責任者村山藤四郎が「黨の批判」と稱してその非合法革命主義に反對し、綱領中より「君主制の廢止」その他を撤廢しコミンテルンと絕緣し、合法的共產黨樹立のための黨の即時解體を主張したのにはじまる。その後この主張に應じたおもにインテリゲンチャを主とする獄內黨員の一派は、日本共產黨勞働者派を自稱し、一九三〇——三一年正式に外部において活動、下部組織として勞働組合統一協議會をもつにいたつた。

これら左翼社會民主主義は、それが分派行動であるかぎりは革命運動の力をよわめ（勞農派・日本共產黨勞働者派）みずから革命運動の正統派を僭稱するにいたつてはこれをスポイルする（勞農派）。しかるに絕對主義天皇制の權力による野ばんな支配と抑壓のもとにあつては、革命運動は鐵の團結と强固な統制・組織をえてはじめて實踐的に勝利しうるのであるから、情勢の進展に應じてかれらは結局自己批判の結果ふたたび革命運動へ復歸するか（新勞農黨解消運動・全產業勞働組合全國會議——勞農派の唯一の組織的實體——の解消）、あるいはみずから中間派社會民主主義に合流するにいたる（新勞農黨・日本共產黨勞働者派）。

大體以上がこの當時に定形的な組織をもつた日本の社會民主主義の姿容であり、特徵であつた。

II　社會民主主義の戰線統一

恐慌の深化による日本資本主義の危機は階級鬪爭の激化をまねき、一方でその外延的擴大（借家人運動・電燈料金およびガス料金値下運動・大家族主義溫情主義を標榜する鐘紡における大爭議の勃發・日傭勞務者および土建業にお

ける爭議の頻發・映畫館從業員およびその他中間階級えの爭議の波及）と同時に、その內包的發展（幹部の統制をこえての大衆の鬪爭力昂揚・官憲との衝突・暴力行爲の頻發）をもみちびいた。かかる鬪爭の激化と大衆の左翼化とは社會民主主義の無力と裏ぎりとをつぎつぎと曝露させ、かくてかれらにたいする大衆の不信を增大させずにはおかない。その結果はまず一九三〇年普選第二回總選擧における合法無產政黨の慘敗となつてあらわれ、次いで同年秋における勞農黨解消運動となつてあらわれた。そして大衆はもはや鬪爭力を强化しなければ日常鬪爭の勝利すら覺束ない結果、「ダラ幹排擊・戰線統一」を一そう熱烈に要求した。こうした現實は社會民主主義の全陣營、とりわけより動搖的な基盤の上にたつ中間派陣營にもつとも深刻な影響をあたえ、かれらをして地位の維持と强化とに狂奔せしめた。けだし中間派幹部傘下の大衆は、その指導者たちが階級的良心をもつ人たちと信じて參加したものが多かつただけに、實踐における幹部の無力と裏切りによる信賴感の喪失はふかく大きかつたからである。かくて一九三一年七月、全國大衆黨と勞農黨と社會民衆黨一部とによる全國勞農大衆黨の結成となり、まず中間派社會民主主義陣營の「戰線統一」が實現された。

ところでこの全國勞農大衆黨結成にさいし、右翼社會民主主義者が分裂を賭しても「指導精神を基準とし、勞農黨」除外」を要求し、その參加を拒否したことは注目すべきであつて、このようにかれらが左翼社會民主主義者との合同を絶對にこばんだということは、口さきだけのものにしろ鬪爭的色彩の一カケでもがかれらの支配下の組織へ流入することをきらつたということ・そのためには自己の支配下の組合員をある程度うしなうこともあえて辭さなかつたということ・要するにかれらがその存立の基盤を大衆の上にもたず資本家の一部の上にもつていること――等々を立證するものにほかならなかつた。組合企業家としての地位をすでに確立せるかれらは、組合經營――資本家との取引の利害打算の上から、左翼社會民主主義者との協同が損失をまねくことを豫想せる結果、右の行動にでたのである。たとえば、この當時右翼社會民主主義者の有力な支柱の一つである日本海員組合は組合財產八十萬圓（一九二八年）を有し、總同盟は一九三〇年八勞働會館（建設費五萬六千圓）・罷業基金一萬七千圓（關東同盟會のみ）・關係消費組合出資金および積立金六萬五千圓・全國に有給職員七・八十名（一九三二年）を擁する狀態であつて、この收入源はおもに組合費（とりわけ團體協約締付工場のそれはもつとも確實で、日本海員組合の資產內容の良好はこの結果である）からなり、それ以外に資本家との平和的關係から生ずる有形無形の收入からなるのである。

さてこれとならんで大衆の左翼化と戰線統一の下からの要求は、組合運動の面にもおなじような影響をおよぼしてきた。これにたいして改良主義的組合幹部たちは、いずれも單に自己の組合を中心とする「產業別の全國的統一達成」のカラ題目をかかげてお茶をにごしていたが、やがてすすんで大衆の戰線統一の聲をたくみに利用しつつ自己の地位の維持强化をくわだて、一九三一年八月日本勞働クラブを結成するにいたつた。これより先き一九三〇年の國際勞働會議勞働代表としてアムステルダム・インタナショナルの大會に出席して歸朝した總同盟會長鈴木文治が、みずから中心となつて構成している勞働立法促進委員會を母體とする大右翼結成＝日本勞働組合會議を日程に上したにはじまり、それと竝行して中間派は一九三一年二月全國勞働組合同盟を中心に全國大衆黨支持組合（日本勞働組合總連合・純向上會・東京ガス工組合・東電從業員組合・東京市從業員組合）をもつて全國勞働組合會議準備會を結成したのである。兩者いずれも改良主義勞働官僚が自己の地位の强化をねらつたものであつたが、とりわけ中間派社會

民主主義者は當時大衆の左翼化とその組織内の革命的反對派の活躍によつて地盤をおびやかされ、より動搖的たらざるをえなかつた。この中間派の動搖に乘じて一九三二年五月日本海員組合が兩者に戰線統一を提唱し、「共產主義・無政府主義・ファシズム の指導精神に反對し、國際勞働機關そのものにたいして反對せざる」ことを條件として兩者をむすびつけ、ここに日本勞働クラブが結成せられたのである。それは八勞働團體二十八萬人の組合員を擁すると號し、大右翼結成えの巨歩をふみだした。それはその後の情勢の發展にともない、左翼社會民主主義者の動搖に乘じ、「健全な勞働組合主義をもつて指導精神」とし國際勞働會議にたいする態度をとわないこととして大右翼の擴大をはかるとともに、組織を强固ならしめるため翌三二年九月には日本勞働組合會議へ擴大强化されていつた。これは組織運動の面において、中間派の左翼的駈引の困難の增大とその右翼化をしめすものといえる。

しかしかかる大右翼結成たる日本勞働クラブにたいしては、中間派諸組合大衆から猛烈な反對がおこり、それはクラブ排擊運動として昂揚した。かかる機運に乘じ中間派諸組合内の革命的反對派は精力的に活動し、急速に大衆を獲得しはじめた。これをみてとつた全國勞働組合同盟一部幹部（加藤勘十・關家博・石橋憲一・高橋涉等）は大衆の反幹部機運に乘じ、そしてまた革命的反對派を防止し大衆を自己の影響下におかんものと、反對派二十二團體をもつて全勞クラブ排擊同盟（排同）を結成した。これによつて革命的反對派の影響によつて左翼化しつつある大衆を改良主義の影響内に固定化せしめると同時に、大衆の反幹部運動を反對派幹部たちの勢力擴大の具に利用せんとしたのであつた。したがつて革命的反對派の影響力が擴大するとともに、排同内幹部の一部は孤立化し失脚の危險にさらされだした結果、かれら（關家博・高橋涉・石橋憲一等）は全國勞働組合同盟本部と策謀の上一九三二年七月組合同盟へ復歸し排同を破壞せんとくわだて、分裂を强行した。その結果殘留派（加藤勘十・灘波虎一等）は全勞統一全國會議と改稱し、合法左翼として日本勞働組合總評議會・東京ガス工組合・東京電燈從業員組合・東京市從業員組合等と關東勞働組合統一協議會を結成した。この全勞統一會議はすでに數度の分裂によつて右翼分子を脫落せしめた結果、革命的反對派の影響力はきわめてつよく、したがつて幹部たちも大衆の壓力によつて必然的に左翼的行動をとらざるをえず、たとえば共產黨員無罪釋放要求闘爭・勞農救援會・ソヴィエト友の會・岩田義道勞農葬等々へ積極的に參加したりしたのである。

以上のごとく危機的情勢は中間派社會民主主義をもつともおびやかし、そのあわただしい離合集散の過程をつうじてかれらの大部分はいちじるしく右翼化し、またその一部は大衆に追隨して左翼化するにいたつた。

III　滿洲事變と社會民主主義

「戰爭によつてひきおこされた危機は日和見主義の眞の性質を曝露し、それがプロレタリアートにたいする闘爭におけるブルジョアジーの直接の幇助者たる役割をうけもつていることを明示した」（レーニン）。第一次大戰はヨーロッパにおいて一さいの勞働者運動と社會主義運動とを試練にかけふるいにかけ、その内容と性格と役割とを曝露せしめたが、この當時日本ではいまだ試金石にかけられるほどの實體的な運動は存していなかつた。たちおくれた日本の勞働者運動は、一九三一年九月日本帝國主義が滿蒙侵略戰爭えの突入によつて第二次大戰の歴史的な火つけ役となつたとき、かつて十七年まえにヨーロッパ の先輩たちが經驗したとおなじ歴史的な試金臺の上にのせられたのである。

滿洲事變はいうまでもなく、世界恐慌の影響をうけてその內的危機を激化せしめられ脆弱な體制的基礎に致命的一撃をうけた日本帝國主義が、この危機より脱せんがためわずかにみいだしえた唯一の活路であり、いわば自己の運命を賭しての危機打開策であつた。この侵略行動の中には冒險的な軍閥官僚の政治的志向と金融獨占的ブルジョアジーの領土占領慾とがむすびつき、近代的帝國主義の攻撃的侵略性が封建的絶對主義の野ばんな收奪慾によつて倍加された加重された。この日本帝國主義沒落の第一歩たる武力行動の開始は、日本の全勞働者運動のまえに爾後の發展方向としてはただ二つのみちしかありえないことを確固と明示した。すなわちそれは、「戰爭に贊成か、反對か」の二者擇一のみちであつた。これにたいする左翼共產主義陣營の態度がいかなるものであつたかは次章にゆずり、ここでは社會民主主義陣營のそれについてのみのべることにしよう。

まず右翼社會民主主義は原則として侵略行動を正當づけて、「すべての民族は平等に生存權を主張する權利がある。故に我日本民族のみが島國にとじこもり『世界平和』の犧牲となる義務を課せられているとはかんがえられない。支那大陸にでもアメリカ大陸にでも自由に發展してさしつかえない。これを妨害するものは『正義』の名において膺懲するに何の不思議もない筈だ。絶對的生存權の名において日本の行動は正義化されなければならない」（總同盟機關紙「日本民衆新聞」一九三一年十月十五日）となし、さらに正式に「㈠日本國民大衆の生存權確保のため滿蒙における我條約上の權益が侵害さるるは不當なりと認む、㈡我等は從來のあやまれるブルジョア的滿蒙管理を排してこれを社會主義國家管理に移す」ことを決議した（一九三一年十一月二十二日社會民衆黨第二回中央委員會「滿蒙問題に關する決議」）。これはまえにのべたごとく右翼社會民主主義が本質において支配階級と同一の利害を代表するものであることを立證しており、この戰爭行爲をかれらが條件つきで承認したことは要するに帝國主義ブルジョアジーの利益の分前にたいする中小ブルジョアの要求を代辯したにすぎない。十一月社民青年同盟の三井銀行デモのごとき、巨大ブルジョアの利潤獨占にたいする小ブルジョア的な分前の要求を反映するのである。

次に中間派社會民主主義者は事變にたいし反戰鬪爭特別委員會の名において聲明して、「隣邦中華民國にたいする政府ならびに軍部のとりつつある帝國主義政策——出兵・策謀等々は、世界大戰を誘發すべき危機をはらむものにして、我等は斷乎として反對す。我等は政府にたいし即時撤兵と對支內政絶對非干涉を要求し、軍部の跳梁に向つては徹底的に抗爭す」（一九三一年九月三十日全國勞農大衆黨常任中央執行委員會）といい、右翼とは一應正反對の立場をあきらかにした。このことはかれらの大衆的基礎がなお後者と異なりおもに勞働者農民の上におかれ、したがつてその大衆的意向を反映していることの證明であつた。しかしかれらの戰爭反對の立場の最大の特徵は、それがあくまで合法性の範圍內でなされ、したがつて單なる聲明以上に實踐的には何事もなされえないというところにあつた。かれらは（以前からそうであつたように）決議や聲明の上ではいくらでも戰爭に反對するが、實踐的具體的な反戰鬪爭は彈壓と非合法を理由になに一つやらず、一さいの積極的活動をサボタージュする。その反戰反軍部の立場は要するに、下からの大衆の意志に適應して自己の地位をまもらんとする單なる方便たり手段たるにすぎないのである。かくてこの中間派の內部から、「滿蒙の危機もつともはなはだしき今日、スローガンのだし放しで鬪爭の完全なる無力を曝露している」（全國勞農大衆黨京都府連合會神田兵三・半谷玉三脫黨聲明書）と批判の手があがり、指導部に對して「黨の活動を休止して黨をも黨指導下の大衆をも俗惡な日和見主義に彷徨せしむるにいたつた」（全國勞農大衆黨中央執行委員

今村等・藤岡文六・安藝盛・望月源治・岩内善作の意見書）との痛罵がくわえられたのも、なんらふしぎではなかつた。要するに以前とおなじく大衆に追隨して口に革命的言辭を弄しつつ實踐でこれをうらぎる中間派の本質を、ここでもかれらは遺憾なく立證してみせたのである。

これらとならんで左翼社會民主主義者も、この事變が對支懸案强制解決のための滿蒙の保證占領・あたらしい世界戰爭の誘發・無產階級の彈壓・軍部による軍事ファシスト獨裁樹立の努力——等々を意味するとして一應猛烈に反對した（一九三一年十月「勞農」、「第二世界大戰の危機と闘へ！」）。しかしかれらもまた中間派とおなじく戰爭とファシズム反對をとくだけでその本質を曝露せず、とくにファシズム反對の中に天皇制の役割と反君主制闘爭の意義とを抹殺し、その戰爭反對も紙上だけでなんら實踐的に活動せず、かくて要するに以前とおなじ左翼社會民主主義的性格を露呈するにすぎなかつた。

このようにその外面上の態度の相違にかかわらず、社會民主主義陣營は結局積極的消極的に戰爭行爲を承認ないし支持する點で一致し、かの西ヨーロッパの先達の例に忠實にしたがつた。その組織的基礎が單純に中小ブルジョアでなくなお勞働者農民勤勞大衆に部分的におかれていたかぎり、かれらはまもなく全陣營を統一したのちも大衆の意向に應じて戰爭反對をスローガンとしていた。しかしそれはあくまで合法の範圍・紙上の範圍にとどまり、實踐的にはむしろその逆の方向をとり大なり小なり侵略政策遂行えのみちをひらくにつとめたのである。

すでにのべたごとく日本の特異な支配體制のもとに、支配階級はこれまで社會民主主義にプロレタリアートを委任する必要をみとめず、これを單に革命運動との闘爭抑壓のために部分的に利用せんとするにとどまつたのであるが、しかし戰爭行爲の開始とともに內的危機が一そう尖鋭化し革命の前提條件が成熟するに應じて今やこれにたいしてもあらたなる態度をとり、あらたなる役割を要求する。そしてこの要請に應じて社會民主主義が當初から刻印づけられた二重的性格（社會君主主義的性格と社會ファシズム的性格）は前面におしだされ、それぞれの性格の濃淡と比率と度合とに應じてあらたなる離合集散と陣列の再編成とをおこなわざるをえない。かくて一九三二年一月經濟問題研究會（下中彌三郎・佐々井一晃・滿川龜太郎等）を中心に日本勞働組合總連合・日本村治派同盟（室伏高信・橘孝三郎・權藤成卿・長野朗等）・全國勞農大衆黨京都府連合會脫退派（神田兵三ら）等は日本國民社會黨準備會を結成し、「國民主義の黨・反資本主義の黨」を標榜しつつ、「一、我黨は行動的國民運動により天皇政治の徹底を期す」、「二、我黨は日本國內における反資本主義統制經濟の實現を期す」「三、我黨は人種平等と資源公平の原則の上に新世界秩序の創造を期す」という綱領をかかげた。ついで同年四月社會民衆黨から分離した赤松克麿一派（日本農民組合・遞友同志會・社會青年同盟その他）は、全國勞農大衆黨脫退派（今村等ら五人組および大矢省三・山名義鶴等）とその組織（全國勞働組合同盟大阪・九州・高知連合會の一部）とともに五月に日本國家社會黨を結成し、「一君萬民の國民精神にもとづき搾取なき新日本建設を期す」の綱領のもとに大體前記とおなじ天皇主義的主張をかかげた。これらはいずれも戰爭による上からの要請に對應して、日本の社會民主主義が內包していた獨自の社會君主主義的要素が前面に進出し獨立化して、今や公然と天皇主義的排外主義的右翼反動團體・暴力團體（國粹會・大化會・建國會・正義團等々）と直接に連繫するにいたつたことをものがたるのである。

IV　社會大衆黨の成立

日本資本主義の危機にもとずく階級闘爭の激化・プロレタリアートの力の成長が、左翼社會民主主義と中間派社會民主主義との大衆的基盤を動搖せしめて、ために大衆左翼化の強力な防壓のために政治經濟闘爭面で戰線統一を實現させるにいたつたことはすでにのべたごとくである（全國勞農大衆黨・日本勞働クラブ）。しかるに戰爭の開始とともに一方で大衆の左翼化にともなう革命運動の一そうの昂揚と、他方で天皇主義的右翼反動陣營の進出というあたらしい現象が發生し發展し、社會民主主義は今や全體として反動陣營と革命陣營との左右からの挾撃をうけることとなつた。かれらの內包せる思想と實踐との矛盾が、戰爭反對の故をもつて極右反動陣からの攻撃をまねき、その反戰的立場の口ぎきだけの故をもつて左翼共產黨からの批判をうくる結果となるのである。かかる挾撃のもとでのかれらの苦境は、一九三二年總選擧における得票數の激減となつてあらわれ、何らかの對應策を講ずるを決心せしめた（第二十表）。くわうるにその內部からの社會君主主義的要素のあいつぐ分出は、もはや社會民主主義內部の組織的對立の意義をほとんど減却せしめたから、ここに一九三二年七月左右中間をつらねる完全にちかい戰線統一が達成され、全國勞農大衆黨・社會民衆黨の合同による社會大衆黨（社大黨）が出現したのである。

第二十表

1930. 32 年總選擧結果

	立候補者 30年	立候補者 32年	當選者 30年	當選者 32年	得票數 30年	得票數 32年
社民	33	15	2	3	170,965	122,262
日大	23	13	2	2	166,579	134,364
全民	4		0		19,695	
勞農	14		1		80,762	
無產派計	91	36	5	5	495,994	290,979

日大＝日本大衆黨，全民＝全國民衆黨，32年は三黨合同し全國勞農大衆黨となる。

この合同において主導的地位にたつた中間派社會民主主義者は、さきに日本勞働クラブ結成問題にさいし「積極的に內部に入つてクラブの反動性を打破しなければならぬ」と稱したごとく、今回の合同にあたつても「階級協調主義反對・議會主義反對・ファッショ排撃・帝國主義戰爭反對の戰線強化」のためと稱し、あたらしい黨をして「極左一黨の盲動を蹴破し、ファッショ反動の腐敗運動を一掃し、ここに無產階級解放の大旆を高揚す」（社大黨創立宣言）ると宣言せしめた。すなわち天皇制的反動と革命運動との中間にたち、はじめて統一的な社會民主主義翼を形成してあらたな情勢に對處せんとするのである。この統一的社會民主主義黨の理論的基礎は、山川均が共產黨の代用物としてつとにとなえきたつた單一無產政黨の理論であつて、それは「勞働者農民の結合を經とし、中間階級層を緯とし、もつて大衆的闘爭的なる方途において」目的を達成せんとするのであつた。

このようにして、勞働者階級の上層部分や意識のおくれた層・自作農・都市小ブルジョア等を基礎として、獨占資本主義の相對的安定期にはじめて發足した日本の社會民主主義は、戰後資本主義の第三期たる戰爭と革命の時期に入つてはじめて統一化された結集をなしとげた。このことはそれが最初からおわされた二重の性格を終極的に清算したことを意味しなかつたにせよ、なおそれが合法的ブルジョア的限界內で「軍閥にたいし痛烈なる批判と彈劾をこころみこれを齋藤內閣打倒・軍事豫算反對に集中し、「民衆の眞實なる要求を大膽卒直に表明する」（三二年十二月二十三日社大黨「院內闘爭方針」）を聲明したかぎり露骨な天皇主義的右翼反動と自己を區別した。しかし同時にそれが「日本共產黨か社會大衆黨かの一線を劃して大衆にのぞむべきである」（社大黨機關誌「社會新聞」一九三三年一月五日）と、とくに共產黨との對立を力說强調したのは、今や獨占ブルジョアのファシズム化にあたつてその社會ファシズムたるの性格を

よりつよく前面におしだしはじめたことを意味したのである。

V　總　括

本格的な帝國主義段階にようやく自己を確立させた日本の勞働者運動にあつては、社會民主主義の傳統的な歴史もなく、またそれの本來の物質的前提條件もかけていた。しかし資本主義の矛盾の尖鋭化とともに、それは勞働力構成のおくれた狀態・組織運動の非民主的機構・上からの抑壓體系等のむすびつきのもとに組合運動の戰鬪化・政治鬪爭の革命化にたいする防塞としておのずから形成され發展した。しかし定型的な勞働貴族を培養する餘裕も必要もなかつた支配階級は、かかる防塞を何よりも「安價な出費」たらしむべく、單なる一にぎりの勞働官僚の培養でもつてこれに代替した。かゝる勞働官僚がともかく一定の組織的基礎をもち恒常的存在たりえたのは、農村の過剩人口と結びつく特殊な勞働力の低賃銀と半失業とを特徴とする植民地的勞働條件において熟練工・中堅工すら特權的意識をもちうるという現實であり、同時に資本主義の矛盾による大衆の急速な左翼化にもかかわらず權力による革命的左翼陣營の不斷の破壞という事實であつた。

このようにして特殊な發生條件と存在條件とをもつた社會民主主義は、客觀的にみて單に勞働者運動におけるブルジョアジーの幇助者としての役割だけでなく、また封建的な絶對主義權力の代辯人としての役割をもはたさねばならなかつた。それがもつ「二つの魂」は、組織的基礎そのものの特質に應じて（右は官營工場勞働者から左は中小町工場・締付工場の勞働者上層にいたるまで）、その一さいの組織と活動の上に複雜な比重と組合せとをもつてあらわれざるをえなかつた。戰爭の開始とともに社會民主主義が根本的再編成を要請されたのも、一にかかる特徴的性格にもとづくにほかならない。戰爭の危機にさいして天皇制權力を先頭とする日本帝國主義の支配體制は、その社會的基礎として右は天皇主義的極右反動團體から左は純然たる社會ファシズム組織にいたるまで、ありとあらゆるニュアンスにとむ複雜多樣な形態を必要とした。社會民主主義陣營のあらたな分裂・合同・再編成の過程は、かかる政治的要請えの自己の適應過程をものがたるにすぎないのである。いずれにせよこの一九三二年の社會民主主義陣營の統一化は、もはや極右反動と直接につらなるにいたつた社會君主主義的要素を別とすれば、今や次章にのべる共産主義陣營とならんで勞働者運動を完全に二分し、その重要な一組織分野を形成するにいたつたといえるであろう。

第九章　革命運動の昂揚と衰退

（一九三一——三四年）

I　戦争にたいする革命的闘争

すでにのべたように一九三一年九月滿洲侵略戰争の開始は、前年來の經濟恐慌の進展によつて急速に尖鋭化された內的危機からの脫出をはかろうとする日本の支配的諸勢力（天皇制・地主・大ブルジョアジー）の直接の意向の表明にはかならなかつた。これによつてかれらは、一方で世界新分割のための戰争準備にたいする自己の計畫を實現させ他方ではアジア大陸に確固たる足場をきずき、原料資源の確保と戰略地點の奪取とによつてより强固かつ有利な經濟的軍事的基礎を獲得せんともくろんだ。またかれらはこれによつて、革命化しつつある中國と建設途上のソ同盟とのあいだに戰略的なくさびをうちこみ、反社會主義戰争の準備とそのための陣地の創設とをはからんとした。さらにまたかれらは、この軍事行動の展開の中に恐慌によつて激發された勞働者農民の革命運動を壓殺し、廣汎に展開されんとしつつある大衆的革命的闘争を排外主義の波の中におぼらせようとも企圖したのである。およそこうした一石三鳥的な效果をねらつて日本の帝國主義者は、その冒險事業の第一歩をふみだしはじめた。

かかるあたらしい政治的軍事的情勢は、革命運動そのものにたいしていかなる展望をうちひらいたであろうか。戰争が支配階級にとつて恐慌と危機からの脫出のためにえらばれた唯一のみちであつた以上、その軍事行動自體が深刻な支配體制の內的危機を反映包藏し、とくにその成否いかんがもつとも重大な政治的意義をふくむものであることはいうまでもなかつた。なによりも客觀的に戰争の開始は國內の階級對立を激化させ、勞働者農民の革命的闘争の一そうの發展をうながさずにはおかない。恐慌の打擊によつて生活の惡化した勤勞大衆が、開始された戰争にたいしてまず猛烈な反對意志を表示することは必至であろう。かくて勞働者の前衛黨にとつて、あたらしい情勢は眞に廣汎な大衆を革命運動の中にひきいれうる大きな可能性をひらいたものであり、また自己が先頭にたつて近い將來巨大なる革命的事件を開始しうる可能性をひらいたものでもあつた。じつに支配階級や社會民主主義者の戰争えの活路にたいする革命的活路を、血と鐵との活路にたいする平和と自由との活路を、罪惡と悲慘との活路にたいする連帶と繁榮との活路を、提示し對決させ、もつて日本の全人民をただしい歷史の方向と軌道にみちびくこと——これこそが當時日本の革命組織と革命運動に課せられた唯一かつ最大の任務にほかならなかつたのである。

かかる展望と任務とのもとに、日本共產黨は事變の開始とともに猛然として反戰運動に進出し、一さいの活動をこの部面に集中した。すでに事變開始の數カ月もまえから、黨はのちにコミンテルンの全組織を驚嘆せしめたほどの的確さと先見とをもつて戰争の開始を豫言し、內外の大衆に警告をはつしていた。たとえば事變より二ケ月半以前の一九三一年七月六日、その中央委員會は機關紙上に「日本帝國主義の戰争準備にたいして闘争せよ」と題して滿蒙侵略の開始を明確に豫見し、それとの闘争を勞働者農民大衆につよく訴えた。また萬寶山事件に關連しておなじ「赤旗」紙は、七月十六日、「滿蒙の完全な植民地化のために」軍事的警察的支配を强化しつつある日本帝國主義とたたかえと

日本・中國・朝鮮の大衆に檄を發したのである。これよりのち黨が終始一貫して強力に遂行し實踐した戰爭反對鬪爭こそは、おなじ黨の中央部が一九三一年春におかした戰略上の誤謬と過誤（四月の政治テーゼ草案）をつぐなつておあまりがあつたのである。

さて事變開始後、はたして大衆のストライキ運動は增大し上昇し、その經濟鬪爭は天皇制ならびに全ブルジョア地主的支配にたいする政治的不滿にまで發展し昂揚した。ストライキ鬪爭や小作爭議はますます頻繁に官憲との街頭での流血衝突にまでたち至つた。こうした大衆の革命的機運の上に、黨は積極的に大衆によびかけいくたの反戰鬪爭を組織し反戰カムパニヤを遂行し、一さいの組織と宣傳力とを動員して戰爭反對運動を啓蒙し指導することにつとめたのである。一九三二年七月には中央部に軍事部をもうけ、九月には兵士を對象とする特別の機關紙（兵士の友）を創刊し、とくに兵營や軍艦內における細胞の形成と組織のために具體的に活動した。あらゆる困難を排して敢行された猛烈なこれら反戰活動の事實こそは、當時社會民主主義的翼が合法主義の限界の故に遂に口さきだけの戰爭反對に終つた事實と明確な對照をかたちづくつたのである。

反戰活動とむすびついて、黨はいわゆる大衆化のための組織運動をも強力に展開した。まず黨員採用方針を緩和して大量的な黨員獲得鬪爭をおこしたため、一九三一年末よりは七千名前後の數を擁することができ、さらに翌三二年三月に從來の「第二無產者新聞」を廢刊、かわつて四月より「赤旗」の活版刷を實行したため前者の讀者網を完全に後者のそれに吸收再編成することに成功した。この年はまた公判鬪爭・無罪釋放運動・選擧鬪爭その他によつて黨の活動ぶりを大衆に印象すけ、さきの大衆化方針を一そう具體化してかつてのセクト的存在をはじめて清算し、廣汎な影響力を確保することができた。そのため種々のカムパニヤや鬪爭の大衆動員に成功し、その整然たる組織と統制・強力な資金網とその運用・尨大なる地方組織の確立等々とあいまつて、かの一九二八年當時のそれに匹敵しうる革命運動史上の光彩陸離たる一頁を展開した。この革命運動の昂揚にさいして、あたかも發表されたただしい三二年テーゼの方針は、過去一さいの戰略上の動搖や誤謬を清算して、全運動の方向と任務とを確固不動の基礎の上にすえつけたのである。

このようにして日本の革命運動は、戰爭の中にかもされた支配體制の深刻な危機に乘じて急速に擴大强化され、過去の組織的制限と戰術的水準とを脫してここにはじめて前衛と大衆・合法と非合法・理論と實踐・組織と戰術等々のただしい統一結合の實をあげはじめたのであつた。

II　革命運動の打擊と衰退

このように一九三一年以來戰爭の危機に乘じて昂揚しきたつた革命運動にたいして、官憲がわは最初のうち充分な攻勢にでることができなかつた。けだしあたらしい革命組織とその活動とは以前のごとき脆弱で不安定な組織活動とは一應ちがつた性質のものであり、それは過去數年間の非合法活動の一さいの成果と教訓とをたくみに吸收し活用しつつあつたからである。そのため官憲がわは一九三一年八月以降おもに關西方面の組織に間斷なき追究を加えながら、なお運動の全般的組織と基本的內容とについてハッキリしたものをつかみえず、運動の中樞部をほとんど無疵のまま放置せざるをえなかつた。ながい準備期間と陰險きわまるスパイ政策とによつて、かれらははじめて革命運動え

の全面的攻勢にうつることができたのである。

支配階級はこれまでにもあいつぐ白色テラー・日和見主義者の利用・解黨派の使嗾等々によつて左翼陣營に對處していたが、いまや戰爭か革命かという重大な岐路にたつにおよんでこれえの決定的對應策としてスパイ政策をとることを決心した。この政策は要するに運動の中心的主體をなす共產黨中央部へ警察のスパイを潛入させ、その組織を內部から破壞し、大衆の共產黨にたいする不信をおこさせ、もつてこれを一擧に壞滅せんとするのである。一九三二年十月のいわゆる赤色ギャング事件および熱海事件はかかるスパイ政策の典型的あらわれであつた。そしてこれより以後官憲がわの一せい攻擊がはじまつた。これより翌三三年一月へかけて千五百名の革命的分子が犧牲となり、このため黨組織とくにその中央部は甚大な打擊をうけた。かくて大衆的動員とその革命的指導はいちじるしく困難となり、革命運動の全分野にいまや決定的な轉換がはじまつた。

これよりさき黨中央部はスパイ政策にそなえて祕密行動・非合法活動の方法を不斷に改善し、發覺にたいする豫防手段その他黨活動を中絶させぬための準備をなしてはいたが、官憲がわが共產黨との鬪爭に回を重ねるごとに熟達し豐富な經驗をくわえるに反して、黨の方は檢擧ごとに非合法活動に練達せる有能の士をうしなつてゆくため、戰術的にはつねに官憲がわに一歩ゆずらざるをえなかつた。他方で入黨方針を緩和し、資金活動を重視し、黨員のイデオロギー的審査を怠る等の事情も加わつて、黨指導部はついにその最高機關にまでスパイにくいこまれるというおそるべき過誤をおかしたのである。このため黨の信用を一擧に破壞せしめるていの計畫的挑發事件をつぎつぎにおこさせてしまい、のちには黨員相互のあいだにすら同志的信頼をもたしめざるにいたつた。それで一九三三年後半には黨はまつたく內部のスパイ肅正その他に全エネルギーを消耗せしめられ、他方でスパイの挑發事件はすべて支配階級によつて百パーセント利用喧傳され、いわゆる「赤の恐怖」を大衆のあいだに浸透させるに役だつた。一九三三年末のいわゆるリンチ事件はかかるスパイ政策の大詰めであり、黨再建運動に甚大なる打擊をあたえたのである。

ところでこうしたスパイ政策とならんで官憲が採用した最大の黨破壞工作がほかにも存在した。獄中の舊指導分子にたいするいわゆる「轉向」政策がそれである。一九三一年夏の公判鬪爭以來黨の姿が大衆のまえに大きくクローズアップされ、革命運動に有形無形の力を賦與しただけ、黨內外の大衆の信望は獄中指導者の上に集中され、そのため一九三二年獄中被告奪還運動がおこされたほどであつた。それだけにこれら獄內指導者たちの精神的思想的破壞がきわめて有效な革命運動えの打擊たることをさとつた官憲は、外部運動の弱化によつてその一部に精神的動搖と脫落的兆候のきざしはじめたのをみてとるや、これに乘じてありとあらゆる手段によつてその策謀をおしすすめた。その結果は一九三三年六月九日かの佐野學・鍋山貞親兩巨頭の轉向聲明發表となり、それにつづいて黨指導分子のなだれをうつての轉向現象となるにいたつた。じつに翌七月末の轉向者は、既決三百九十三名中百三十三名（三五・八％）、未決千三百七十名中四百十五名（三〇・三％）をはやくもかぞえたのである。これらの轉向指導分子をかつては無條件的に信頼していただけそれだけ、黨內外の大衆の失望と動搖は大きく、廣汎に思想的確信をゆるがさしめ、この期の革命運動の轉換に拍車をかけるにいたつたのである。

このようにして一九三三年に入つて革命運動が決定的轉換をしめしはじめて以來、官憲がわは勢に乘じて同年度および翌三四年にかけて苛烈な追擊戰を敢行し展開した。すでにのべたごとく黨中央部の再建運動はつぎつぎと破壞さ

れて陣容をたてなおすいとまもなく、一九三三年末のスパイ肅正事件（リンチ事件）による大量的逮捕を最後に本格的な再建工作えの基盤を喪失してしまつた。スパイ政策と轉向政策に成功した支配階級は、この時期には革命運動の廣汎な貯水池をなす大衆運動・組合運動・文化運動の上にそのおもな攻擊對象をもとめた。ことに黨と密接な關係にあつた日本勞働組合全國協議會（全協）は、一九三二年九月に第一回中央委員會をひらいて重要産業と重要地方における活動方針を確立し、行動綱領と規約をも決定して積極的活動にうつりつつあつたから、一九三三年度には官憲の主要な攻擊對象となり、一月より十一月まで東京のみにても千七百名の組織構成分子が檢擧せられる狀態であつた。これとならんでモップル（勞農救援會）や共産青年同盟等黨の外廓をなす組織からも數千名が逮捕され、また一九三二年より陣營を整備して過去の非政治主義の克服・國際的連帶性の強化のために果敢に鬪爭し大きな成果をおさめつつあつた日本プロレタリア文化連盟（コップ）にたいしても假借なき彈壓がくわえられた。これらの合法的組織活動にたいし、血まよつた支配階級はその事務所を閉鎖し、指導分子を檢束し、一さいの集會を解散し、すべての出版物を押收禁止する等ありとあらゆる蠻行をえんじてはするところなかつたのである。

内外からの强壓によるかかる革命運動の弱化と衰退、とくにその中心的主體たる共産黨の徹底的な勢力・信用の失墜にたいし、その内部からじだいに强烈な反擊の火の手があげられてきた。大量轉向やスパイ事件の責を中央部指導方針の誤謬に歸する一部黨員の批判的態度は、一九三四年三月ついに中央部否認の反幹部派的聲明（全國農民組合全國會議派のフラクション・日本消費組合連盟フラクション）となつて表面化し、五月にはさらに日本共産黨中央奪還全國代表者會議準備委員會（多數派）の結成、機關紙「多數派」の發行となつて全面的な分派鬪爭にまで擴大し、こ

こに日本共産黨史上未曾有と稱せられる黨内分派運動の展開をみるにいたつた。これら多數派の分派活動にたいして一九三四年秋以後正統派の黨再建工作もまたおしすすめられたが、翌一九三五年春より夏へかけて、多數派・正統派とも官憲の追求のもとにいずれも壞滅せしめられるにおよんで一應終止符をうつたのである。

以上のごとくにして支配階級の血と鐵との方策・戰爭と掠奪の政策に對抗して平和と自由の活路のためにたたかつた革命運動も、あらゆる分野の鬪爭にうちやぶられ粉碎せられた。それは一九三三年を轉回點として爾後一路衰退と不振と弱化の狀態におちいり、それより回復する氣力をもちえなかつた。侵略戰爭の一應の成功的進展・社會情勢の全般的變化・政府のあいつぐ彈壓と抑壓・味方陣營内部からの裏切と脱落——これらのもとに運動の指導的地位にたつ諸組織はますますその活動の範圍をせばめられ、その後はわずかに地下に餘命をたもつの慘たる事態におちいつたのである。眞に民衆の利害を代表し、いくたの犧牲をつみかさねながら、革命的プロレタリアートの鬪爭は本格的な形においてここに終止符をうつた。一九二八年より三四年の滿七年間における治安維持法違反事件檢擧者數五萬九千二百四十人そのうち司法處分に附されたもの一萬一千十三人——天皇制政府の司法省が發表せるこの數字こそは、日本の革命運動の本格的展開期をそのもつとも集約的な形において表現しているといえるであろう。

III　衰退の客觀的諸條件

一九三二——三年を轉期とする革命運動の衰退は、直接的には天皇制權力の狂暴なる彈壓と白色テラー・ブルジョアジーのそれえの同調・日和見主義者のうらぎり等々にもとづくものであるが、より客觀的全體的な要因としては何

よりかれら支配階級の武力行動が一應成功的に推移したという事情があげられねばならない。その危機切抜策としての侵略行爲が當時の複雜な國際情勢の中に一應成功的におしすすめられていつたことは、脆弱な日本資本主義の補强を成功せしめたのみでなく、急速に昂揚したプロレタリアート農民の革命的闘爭心を鎭靜せしめる上にも役立つたのである。このことを理解してはじめて、從來のごとく打撃をくわえられても否打撃をうけるたびに、より擴大された規模で回復再建されきたつた共產黨を先頭とする日本の革命運動が、一九三三年を轉期としてついに今次敗戰まで大きな力をもちえず「帝國主義戰爭を內亂へ」みちびくことに完全に失敗したその眞の事情を把握できるであろう。そしてこれとむすびつけてわれわれは、プロレタリアートの革命的闘爭を敗北におわらしめた種々の客觀的要因や條件を以下に具體的にみることにしよう。

何より侵略戰爭の順調な進行の結果、日本經濟は軍需インフレーションと爲替低落を槓杆として沈滯から活況へと轉化しはじめた。貿易の伸長・物價の上昇・就業勞働者數の增加・生產制限の緩和等その經濟指標はいちじるしく改善され、重工業を中心として景氣は一路回復のみちをたどつた（第二十一表）。

この景氣の回復はプロレタリアートに一體いかなる影響をおよぼしたであろうか。第一に就業勞働者數の增加は必然的に失業者數の減少をもたらし、そしてこのことはながい不景氣をつうじて飢餓と失業のもとに呻吟せる人びとにようやく經濟生活の前途をうちひらいた。もちろん景氣回復が軍需インフレーションと爲替安（ソシアルダムピング）によつて推進せられたかぎり、それは價値の非生產的浪費（戰爭）と價値以下での輸出を、すなわち國民の年々の總生產物の增加ではなくて國民の總生產物の不生產的浪費を意味するものにすぎず、しかもそれによつて支配階級の

第二十一表

主要經濟指標の推移

年次	事業活動指數	生產業指數	東京卸賣物價指數	貿易指數	勞働人員指數	利潤率(%) 上	利潤率(%) 下
1931	87.4	105.7	121.6	165.4	74.4	5.1	5.4
1932	90.1	112.3	134.5	197.8	74.7	7.9	10.0
1933	96.9	129.7	158.9	262.7	81.9	12.8	15.1
1934	103.3	146.2	159.7	304.4	91.3	14.8	15.5
1935	105.8	161.4	162.9	335.4	99.9	16.4	15.8

利潤率各年度「上」は上半期「下」は下半期の略
各指數基準，事業活動指數はノルマル＝100
生產業指數は　1928年＝100　物價指數は 1913年1月＝100　貿易指數(金額)は　1913年＝100
勞働人員指數は 1926年＝100

アートにとつてはむしろ生活條件の改善向上としてうけとられる。このためプロレタリアート自身戰爭によつて直接間接に最大の犧牲をはらわせられているにもかかわらず、一時的に戰爭によつて狀態が改善されたかの幻想におちいり、戰爭による恐慌の克服という支配階級の意圖の中にみずからひきずりこまれてゆく。革命運動の退潮は、こうした事態の中に有力な客觀的根據を有するのである。

景氣の回復にともなう經濟狀態の外面的活況とならんで革命運動の發展を制約した他の有力な客觀的要因は、この時期の工業構成および勞働力構成にふくまれた內部的弱點であつた。一般に工業勞働力構成の高度化傾向、すなわち

狀態が改善され安定されたかぎり必然的にプロレタリアートおよび農民の搾取の强化を條件とするものにほかならなかつた（第二十二表・第二十三表）。勞働時間の延長・定額賃銀實質賃銀の低下・勞働條件の惡化——これらをつうじて全體としての勞働者階級の狀態はますます惡化するのである。

しかしかかる生活條件の本質的惡化も、軍需インフレーションによる殘業や夜業の增加・それにもとづく實收賃銀の增大や手取現金の增加等によつて外面的に隱蔽され、意識のおくれた廣汎なプロレタリ

工業部門的には生產手段生產部門勞働力の絶對的相對的增大・性別年齡別的には成年男子勞働力の絶對的相對的增大等はそれ自身としてプロレタリア運動の發展に有利な要因をなすのであるが、日本の場合にはかかる高度化傾向は單純にそうした役割をえんじえなかつた。というのは一般傾向としてこの時期に、勞働者總數中の工場勞働者比率の增大・輕工業より重工場えの工業構成轉換・性別構成における男子勞働力比重の增加等々の高度化傾向があらわれたにもかかわらず、その具體的內容においておもにキイ・インダストリーに婦人少年工の比率が增大し、また全般就業年數比にあつて短期就業勞働者の比重が增加するという逆轉的現象が內包されていたからである（第二十四——二十八表）。

かかる高度化傾向それ自體に內包された基本的弱點のうちとくに重要なのは臨時工の問題であつて、一九三四年內務省社會局の發表によつてみても、機械器具工場において常傭工數の二四・六%が臨時工によつてしめられる狀態である。注意しなければならないことは、かかる臨時工がけつして未熟練工ではなく常傭工と一般的になんら區別しえぬ勞働者であるにもかかわらず、單により安價にそして法律による保護義務をまぬがれうるという理由のもとに廣汎

第二十二表

勞働者就業時間・就業日數平均

年次	就業時間（1日）	就業日數（1ヶ月）
1931	9時間33分	2 .9日
1932	9 〃 41 〃	27.3 〃
1933	9 〃 47 〃	27.4 〃
1934	9 〃 52 〃	27.5 〃
1935	9 〃 51 〃	27.5 〃

第二十三表

賃銀指數

年次	名目賃銀 定額	名目賃銀 實收	生計費指數	實質賃銀 定額	實質賃銀 實收
1931	91.3	90.7	100	100	100
1932	88.1	88.2	99.8	98.2	99.8
1933	85.1	89.2	105.0	90.2	95.2
1934	82.9	91.2	108.7	84.8	94.9
1935	81.3	91.1	112.6	80.3	92.4

第二十四表

勞働者總數中工場勞働者の占むる割合（%）

年次	比率
1931	35.5
1932	37.7
1933	37.0
1934	37.5
1935	40.1

第二十五表

工場勞働者產業別構成比（%）

年次	總數	重工業勞働者 總數	重工業勞働者 金屬	重工業勞働者 機械	輕工場勞働者 總數	輕工場勞働者 紡織
1931	100	28.6	5.7	12.1	71.4	50.9
1932	100	31.2	6.0	13.6	68.8	48.0
1933	100	34.7	7.0	15.4	65.3	45.1
1934	100	38.3	8.1	17.7	61.7	42.8
1935	100	38.7	9.0	15.9	61.3	41.6

第二十六表

工場勞働者中男女性別構成（%）

年次	男	女
1931	46.9	53.1
1932	48.8	51.2
1933	50.9	49.1
1934	53.0	47.0
1935	54.3	45.7

第二十七表

金屬，機械工業勞働者中婦人及16歲未滿幼少年工の占むる割合（%）

年次	金屬	機械
1931	8.85	9.01
1932	9.28	10.47
1933	9.76	1 .2
1934	9.17	11.89
1935	9.69	12.62

第二十八表

工場勞働者就業年數別比（%）

年次	5年未滿	5年—9年	10年—14年	15年以上
1. 總數				
1930	52.5	24.4	12.3	10.8
1933	53.4	22.8	11.4	12.4
1936	61.8	16.0	9.4	12.2
2. 男子				
1930	36.5	24.1	19.4	17.0
1933	38.1	22 6	16.9	22.4
1936	51.2	16.6	12.7	20.1

に充用され利用されるという事實である。資本家たちは重畳するとせざるに關せずこれによつて、從來から日本に於る特徵的事實である封建的勞働組織の再版たる位階制的身分制的勞働編成とむすびつけてプロレタリアートを特權的層と非特權的層とに分化せしめ、その結集を阻碍した。このことが勞働力構成の高度化にもかかわらずその結集にいちじるしくマイナスの影響をあたえたことは否定できないであろう。いずれにせよこれらのあたらしい客觀的經濟的諸條件は大なり小なりプロレタリア

ートの闘争の上に反映せざるをえない。われわれはかくて景氣の回復につれて一九三二年以降闘争の波がしだいに低下しつつある事態をみるのである（第二十九表）。これらの勞働者の諸闘争は、單に量的減少をふくむだけでなく質的低下の傾向をも内包し、ストライキのごときもしだいに短期間に解決または放棄されてゆく（第三十表）。ことに改良主義的右翼組合幹部のいわゆる爭議最小化方針の强化によって組織的闘争の指導は放棄され、一九三二年以降ストライキえの組合關與率は逆轉的に減少するのである（第三十一表）。そしてかかる改良主義者の勞働者の利益えの裏ぎりと對應しあつて、非常時態勢を名目とする警察官憲の爭議えの干渉は增大し、そのため闘争においてしめる工場プロレタリアートの比重もまたしだいに減少してゆかざるをえない（第三十二・三十三表）。

以上一九三二年を機とする軍需インフレーションを基軸としての恐慌よりの回復・上向的發展は、實質上プロレタリアートの狀態をますます惡化させたにもかかわらず現象的な好轉（失業者の減少・實收賃銀の增加）によってプロレタリアートの下からの闘争の一そうの激化を制止し緩和するに役だつた。外面的な經濟上の活況は、あたかも戰爭によってプロレタリアートの狀態が改善され今後もされうるかのごとき幻想を廣汎にうちひろげ、とりわけ軍器製作部門勞働者上層のごとき「われらもし現下の國際情勢が滿洲問題を契機として世界戰爭の危機にありとすれば日本は自衛上敢然戰わざるをえないことを確認するものである。われらは軍器製作に從事する勞働者なるがゆえに一層優秀なる軍器を作成するに努力し、もつてわが國体を死守せんとするものである。そこに眞に平和がもたらされ、したがつて勞働者階級の幸福がえられるものなるを確信す」（一九三二年日本造船勞働連盟の日本勞働組合會議脱退聲明書）との完全な侵略主義的排外主義的イデオロギーを吐露する始末であつた。かくて支配階級の戰爭政策の一時的成功によつて景氣が回復してゆく過程は他方で政府の假借なき彈壓によつて革命運動の波がしだいに退いてゆく過程でもあつたのである。

第二十九表

爭議統計

年次	爭議數 件數	爭議數 參加人員	ストライキ 件數	ストライキ 參加人員
1931	2,456	154,528	998	64,536
1932	2,217	123,312	893	54,783
1933	1,897	116,733	610	49,423
1934註	1,915	120,307	626	49,536
1935	1,872	103,962	590	37,734

註　1934年の增加は關西風水害に伴う製瓦業爭議の結果という例外的現象をふくみ，これを除けば前年度より更に減少せり

第三十表

ストライキ繼續日數別比(%)

年次	3日以内	4日—10日	11日—3ヶ月	3ヶ月以上
1931	27.1	30.5	24.4	13.4
1932	32.1	30.0	22.1	11.8
1933	43.1	32.3	16.9	6.7
1934	57.8	32.2	10.8	4.4
1935	47.4	33.0	12.3	7.1

第三十一表

ストライキと組合の關與

年次	件數	組合關與件數	比率(%)
1931	998	713	71
1932	893	562	63
1933	610	303	50
1934	626	248	39
1935	590	256	43

第三十二表

爭議調停件數

年次	爭議數 A	調停件數 B	關與者	B/A (%)	警察官吏による調停數 C	C/B (%)
1931	2,456	685		28	176	25.7
1932	2,217	627		28	204	32.5
1933	1,897	602		32	218	36.2
1934	1,915	601		31	241	40.1
1935	1,872	746		40	416	55.7

第三十三表

ストライキ件數中工場勞働者件數の占める比(%)

年次	件數	參加人員
1931	72.5	75.6
1932	62.7	53.6
1933	65.1	51.4
1934	64.2	53.6
1935	60.7	69.1

IV　非常時と社會ファシスト

すでにのべたように滿洲侵略戰爭を契機とする社會民主主義陣營の急速な再編成は、いわば戰爭の危機にさいしての支配上層の再編成・その內部的再整理・內部の一時的對立と利害の衝突等々に對應するものであつた。戰爭えの活路をふみだすにあたつて支配體制內部に一時的におこつた混亂、とくにその時期や方向や形式や手段等の點をめぐる相對的な對立は、そのまゝ社會民主主義陣營の動向に反映し、その中から社會君主主義的要素の公然たる分離獨立化をひきおこすとともに、他方でのこされた左右中間派の組織的分立の意義をひくめかれらの大同團結をもたらした。このうち前者は天皇制權力の社會的基礎として右翼反動團體と直接に連繫し、後者は後者で「軍部ファッショ」反對、共產黨反對の名のもとにその社會ファシスト的性格をより前面におしだしたのである。

しかるに侵略戰爭のその後の成功的推移は、日本資本主義の支配體制の一時的相剋や混亂を清算させ、一九三二年の五・一五事件を契機に政府形態におけるブルジョア地主政黨の役割の減少と天皇制官僚とくに軍部の政治的比重の增大とをもたらした。激變しつつある內外の情勢において遂行されたかかる政治上層の再編成はいわゆる非常時の名をかつて國民に合理すけられ、これに應じて社會民主主義陣營にもあたらしいイデオロギー的動向が發生した。軍事的封建的帝國主義の侵略性のヘゲモニーのもとに、獨占ブルジョアジーの帝國主義政策が完全にこれと合成し同調しさり、他方で革命運動が衰退しきつたことは、すくなくとも社會民主主義內部における戰爭にたいする態度の相違や背反をもはや無意味ならしむるに充分であつた。事變直後の社會君主主義的要素の分出によつてその左右中間派の對立の意義がひくめられたごとく、あたらしい現實は戰爭をめぐる社會君主主義と社會ファシズムとの分立や相違そのものすらしだいに無意味にしたのである。かくて戰爭の進展につれて大なり小なり社會民主主義および社會ファシズムの戰爭政策の公然の支持が現象し、それと社會君主主義とのイデオロギー的差別は消滅していつた。

かくてこの時期には、一方にはたとえば「祖國の繁榮なくしては何ぞ日本の勞働者の幸福あらん」とする日本勞働組合總連合の日本主義原則採用、「祖宗建國の國是と三千年の民族的傳統にしたがい……もつて勞働報國の實をあげんことを期す」という海軍勞働連盟の綱領改正、その他大阪合同勞働組合・東電愛國同盟・逓信從業員同盟・大日本忠孝勞働組合・中部港灣勞働組合等の右翼反動組合の續出――等々の事實にみられる勞働者運動の公然たる右翼反動化がおしすすめられるとともに、他方では社會ファシズム陣營のより「穩和」にして巧妙な戰爭政策謳歌・軍部禮讚・民族主義宣傳がおしすすめられるにいたつた。すなわち後者の統一戰線をなす社大黨は、その「轉換期日本の建設政策」（一九三三年）において「大衆インフレは下層階級にとり好ましいものである」と軍需インフレーションにたいする大衆の幻想に拍車をかけ、おもに國家資本主義の强化と東洋經濟會議・國民經濟會議のごとき民族主義的「建設政策」なるものを强調し力說した。さらにこの社大黨は一九三四年度の運動方針中「われらの階級運動は小乘的階級運動ではない。國民の永遠性を無視し民族と階級を反撥せしめる利己的な階級利害を意味するものではない」「今日及今日以後において戰爭の問題はもつとも愼重に具體的に扱わるべく、單に反對を書き又は叫ぶにすぎざりし在來の機械的概念的アナーキスト的取扱い方はげんに淸算を要する」として明白に階級利害の立場を放棄して支配階級の戰爭政策に同調するにいたつた。さらにまた同一九三四年有名な陸軍パンフレットの公表にさいして、社大黨は陸軍の軍

國主義思想を完全に支持し、これを大衆運動に利用するという政策およびイデオロギー上の根本的轉換をおこなつた。すなわちいう、「われわれは滿洲事變・五・一五事件以來當時のファッショ的反動勢力と戰いつつも日本の國情より觀察し日本の軍隊の本質より推理してファッショの不可能を確信し、（中略）したがつて日本の國情においては資本主義打倒の社會改革において軍隊と無產階級の合理的結合を必然ならしめている」（社大黨書記長見解）云々と。

このようにしてあらたな事態は、さきにその社會ファシズム的面をつよく前面におしだした社會民主主義陣營をして、かれらの日本的なイデオロギー上の特質がじつに社會帝國主義・社會愛國主義にあるという事實を明白にせしめた。統一化された社會民主主義はかかる社會帝國主義の點において、さきの社會君主主義分子やさらには天皇主義的右翼分子とも合一協同しうる可能性を有することをみずから曝露したのである。いずれにせよあらたな事態に處せんとする社會民主主義の動向は、この時期の一さいの政治運動や經濟鬪爭の上に直截にしめされた。爭議最小化方針や團體協約の徹底化・勞資協調の强化・國家的見地からの紛爭回避の努力——これらすべてにかれらの本質的役割は遺憾なく發揮され、ついには內務當局をして「最近の勞働運動は全般的にみるならば從來の階級鬪爭的方針を緩和或いは放棄いたしまして、或いは產業報國・產業協力を叫び或いは爭議の最小化を唱うる等國家產業人としての地位の自覺の上に穩健な運動を進めんとするの風がありましてこれは誠に喜ぶべき傾向であります」（一九三五年特高課長會議における社會局長官訓示）との賞讃の言葉をはかしめるほどであつた。

しかし社會民主主義や改良主義のかかる勞働者の利益の放棄・公然たる社會帝國主義えの移行が、現實において勞働者大衆の鬪爭意志と矛盾し拮抗せざるをえないのは當然であつて、そのため「軍部と協力することによつてプロレタリアートのための革新が斷行されうる」との聲明の足の下から總同盟組合員による軍事工場の"ストライキがまきおこされ（一九三四年大阪機械製作所）、あるいはその產業協力主義の宣言の足の下から總同盟工場の官憲との衝突にいたる爭議が發生する（一九三五年花原製作所）というありさまであつた。こうした事態をまえにしてなお勞働者階級本來の立場を放棄しえざる一部の分子が、いわゆる合法左翼の名のもとに一九三四年日本勞働組合全國評議會（全評）を結成するにいたつたのはふしぎではなかつた。この合法左翼なるものがじつは革命的勞働組合たる全協の弱化とそれの大衆からの隔絕によつて相對的な代位的役割をえんじたにすぎなかつたにせよ、なおここへ革命的分子の多くが結集した結果は全體としての社會民主主義陣營の公然たる反動化を拘束する上にある程度役だつたのである。ただそれは主觀的には革命的鬪爭のための組織として評價されたが、しかし客觀的にはむしろ合法主義の限界えの運動の限定・左翼陣營の再建强化の防止という基本的役割からはなれることができなかつたのである。

V　總　括

戰爭そのものが內包する政治的危機に乘じて、眞に人民の自由と解放とをめざす革命的黨派は他の一さいの勞働者運動內の諸黨派があるいは公然と戰爭政策に左袒しあるいは口さきだけで戰爭反對をとなえつつあるとき、猛然と反戰鬪爭に進出し積極的活動を展開した。それはプロレタリアート農民の利害を代表して戰爭の眞の性質を徹底的に闡明し宣傳し、もつて大衆を流血のみちから革命的活路にみちびくべくいくたの英雄的鬪爭を敢行した。その自己犧牲的な鬪爭のもとに昂揚した革命運動も、しかし觀的な諸條件客に制約されてしだいに不利な情勢えとおいこめられざ

るをえなかつた。戰爭行動の一時的成功・軍需インフレーションを積杆とする恐慌よりの景氣の回復・重工業勞働者の需要の激增とその相對的改善・廣汎な勞働者層の失業苦からの解放と實收賃銀の增加——これらは革命運動の一そうの進展にブレーキをかける客觀的條件をかたちづくつたのである。

これらの制約にくわえて危機を自覺した支配體制の上からの必死の抑壓・スパイ政策から轉向政策・野蠻な中世的取締りにいたるありとあらゆるその對抗策・右翼反動團體から社會君主主義者にいたる全反動分子の恥しらずな革命運動攻擊・社會民主主義者や日和見主義者の公然または隱然の勞働者運動えのうらぎり・最後に革命組織自體におけるいくたの誤謬と失策・相剋と內紛——これらはあいまつてついに全革命運動に決定的轉換をもたらすにいたつた。階級間の力關係の變化に應じて、軍需インフレーションにめぐまれた一部の勞働貴族的要素から臨時工の給源たる廣汎な意識のおくれた勞働者層にいたるまで、大なり小なり社會帝國主義的イデオロギーの宣傳の對象となり、その影響のもとにおかれてしまつた。しかしこのように革命運動の弱化と衰退によつてえられた支配階級の安定化も、それが單に侵略行動の一時的成功と經濟條件の外面的回復によつてささえられたものにすぎないかぎりけつして永久的なものでありえず、その基盤もきわめて動搖的であり、かくてあらたなる軍事的戰略的情勢の展開と經濟的諸條件の惡化とは必然にあらたなる革命的勢力の擡頭・革命運動の再開を豫定するものであつた。

第十章　人民戰線運動（一九三五——三七年）

I　人民戰線の意義

一九三一年日本の滿洲侵略戰爭の開始・同年ドイツにおけるナチスの擡頭・一九三三年ドイツプロレタリアートの敗北・ナチスの政權掌握等々を劃期とするいわゆるファシズムの暴壓と世界戰爭の危機の到來は、世界のプロレタリアートをふくめた一さいの民主主義的な人民大衆をしてまさにその生死にかかわる重大危局に當面せしめた。ファシズムと戰爭の危機にたいしてたたかうことが、いまやもつとも重大な課題として日程にのぼされたのである。とくにドイツにおける失敗と一九三四年以來のフランス・スペインにおける反ファシズム鬪爭における人民戰線派の勝利の經驗は、この危機にたいする鬪爭にいくたの重大な示唆と教訓とをもたらした。そしてかかる世界史的な危局の關頭にたつて全世界のコミュニストの新情勢えの對應策を議するために開催されたのが、一九三五年七月モスコーにおけるコミンテルン第七回世界大會にほかならなかつた。

この大會は一九二八年第六回大會以來七年ぶりに招集せられたものであり、この開催の事實自體にこの時期の重大性が內包されていたのであるが、大會においてはまず世界のプロレタリアートの當面の鬪爭目標が反ファシズム・反

帝國主義戰爭であることが明確に規定され、そのための闘爭方法を反ファッショ統一戰線戰術と決議するにいたつたこの決議は、要するに共産黨員にとつて社會民主黨の勞働者や未組織の廣汎な勞働者大衆と共同闘爭をおこない、勞働運動の統一を獲得することが喫緊の課題であり、そのためにはいかなる些細な民主主義的要素にも注意し、それと結合し各種各様の統一戰線の形式を採用して、あらゆる勞働組合・大衆團體内で運動をすすめることが最大の任務であり、これによつてのみ人民戰線は結成せられまたこれこそが反ファシズム闘爭に勝利をもたらしうる要訣である——ということを明示したのである。

このことにしめされるごとく世界の民主主義愛好國民のすべてにとつて、いまやファシズムと戰爭の危機にたいするたたかい・人民戰線の結成が前面に提出されたのであり、とくにフランスおよびスペインにおけるかがやかしい人民戰線の勝利はその偉大な效果をうらがきするに充分であつた。もちろんこの勝利はやがて國際情勢の變化にともなつて崩れさり一時世界はファシズムによつて蹂りんされるかの觀をていしたのであるが、しかしこの新手段が單に革命的プロレタリアートのみならず一さいのプロレタリアートと自由と平和を愛するすべての人びとを統一戰線に結集しファシズムにたいする闘爭にたち上らせたことは大なる成果であり、そのためこれは爾後の一さいの民主主義的・プロレタリア的運動に大きな貢獻をなし、ファシズムと軍國主義倒壞後の今日なお不朽の價値を存せしめているのである。

このような世界史的重大問題にたいしてしかもドイツとともにそのもつとも重要な一環をなした日本が、當然人民戰線・反ファシズム闘爭の世界的なよびかけに呼應しないわけはなかつた。もちろん日本においては單純にファシズムの支配が現出したのではなくて、いわば二重の帝國主義に由因するより複雜な、したがつて日本のプロレタリアートにとつてより困難な事態が現出されたのであるが、しかし日本のプロレタリアートが切迫しつつある世界的危機の中に革命の前衛としてもつとも重大な任務を課せられ、その成否が世界史をあらたな方向にみちびく最大の要因を形成すべきであつたことにかわりはなかつた。以下において、かかる重大な時期における日本プロレタリアートのおかれた社會經濟的地位とその闘爭についてみることにしよう。

II　いわゆる「準戰時體制」

世界史にさきがけて侵略戰爭に突入し國際情勢と内部の左翼革命勢力の抵抗を排除しつつ一應強引に體制のたてなおしに成功した日本の支配階級は、あたらしい世界史の轉換點に直面していかなる態度を要請されたであろうか。何より軍需インフレーションと低爲替ソシャル・ダムピングを基軸として展開された恐慌克服景氣回復策も、一九三五年にいたり輸出貿易の停滯と輸出産業の不振とをさきがけにしだいに破綻にちかづき、軍需インフレーションを唯一の推進力としてもちこたえさせるにすぎなかつたが、滿洲における大規模の軍事行動の一應の終了は一般に軍需インフレーションの前途にも一沫の不安をなげかけ、ここに産業界は一九三五年上半期を頂點として停滯ないしは不振に轉じはじめた（第三十四表）。他方農村は農業恐慌以後不安と窮乏に蔽われ、産業界の景氣の回復も農産物と工業製品の鋏狀價格差を克服することができず、かくて間斷なく絶對主義權力の經濟的基盤をほりくずした。しかも國際的にはナチスの政權獲得とヴェルサイユ條約破棄・再軍備宣言・伊エ戰爭やスペイン内亂等、世界的不安が加つて、日本

の支配諸勢力はふたたび內部的再編成と對外的進出とを日程にのぼさざるをえなくなつた。ここに國體明徵問題・二・二六事件・日獨伊防共協定等を指標とする軍事的封建勢力の進出と、さらに一そう大規模の侵略戰爭すなわち日獨伊樞軸諸國による世界再分割の問題が前面に登場しきたる。これらは支配勢力にとつて文字どおり準戰時體制えの强行的轉化を意味するものであつた。

第三十四表

製造工業收益率（%）

年次		收益率
1934	上半期	14.8
	下半期	15.5
1935	上半期	16.4
	下半期	15.8
1936	上半期	15.7
	下半期	15.6
1937	上半期	18.2

以上を要約していえば、危機よりの脫出が戰爭により推進せしめられ、しかもそれが內的諸矛盾を擴大再生產しつつ戰爭と軍需インフレーション によつて表面的に糊塗されていたにすぎなかつた。それだけ、戰爭と軍需インフレーションの退潮はただちに危機情勢のより大規模での再現を可能ならしめ、これを回避するためにふたたび戰爭と軍需インフレーションを强化せざるをえないという、おそるべき惡循環の泥沼の中に、日本の資本主義はまさにおちこんだわけである。

ところでこのいわゆる「準戰時體制」は、プロレタリアートにとつてただその狀態の惡化と抑壓の强化を意味するにすぎず、とくに經濟的には實收賃金增加の停滯と實質賃金の一そうの低下・結核罹病率や災害率の上昇にしめされる勞働强化等々、その生活條件・勞働條件の惡化以外の何ものをも意味しなかつた（第三十五表）。このことはプロレタリアートの內部に廣汎な不平不滿をよびおこさずにいなかつたが、しかも絕對主義權力の强化と排外愛國主義的國家意識の强調・社會民主主義の社會帝國主義化・同時に他方で左翼革命勢力の衰退等は、プロレタリアートの鬪爭力をいちじるしく減殺し、組織的攻勢のかたちでこれを强力に展開せしめえず、かくて大衆の日常的不滿はかえつて內攻せしめられてゆくばかりであつた。しかしかかる矛盾の激化は、ついに自然發生的に爆發せざるをえなかつた。一九三七年の突如たる爭議の波の昂揚はこれを端的に明示するのである（第三十六表）。

第三十五表

貨銀指數

年次	實收賃金	生計費	實質賃金
1934	91.2	108.7	94.9
1935	91.1	112.6	92.4
1936	91.8	115.2	91.8
1937	96.8	120.2	91.1

第三十六表

爭議統計

年次	ストライキ 件數	ストライキ 參加人員	爭議合計 件數	爭議合計 參加人員
1934	626	49,536	1,915	120,307
1935	590	37,734	1,872	107,962
1936	547	50,900	1,975	92,724
1937 上半期	481	109,749	1,455	181,531

かかる大衆の不滿の激發・その下からの爆發的鬪爭の昂揚は社會帝國主義組合幹部たちをして狼狽せしめるに充分であり、かれらは一九三五年はじめごろには「今日の健全な勞働組合の動向はすでに階級鬪爭・勞資協調の時代をすぎさり、國家產業を基準として經營と技術と勞働との產業協力主義をとり」（社大黨龜井貫一郎議會演說）、「勞働組合はできるだけストライキを回避し、そのため涙をのんで賃銀の値下をしのび、三十人の馘首は二十人でくいとめて幾多の苦痛をしのばねばならぬ」（西尾末廣議會演說）とし、組織的には臨時工ないし日傭勞務者の加盟を忌避し常傭工＝特權的勞働者層によつてその中心部分を形成し、大衆の窮狀に目を蔽わんとしたにもかかわらず、大衆のあいだの日常的不滿の擴大におされてその後「黨最近の行動はイデオロギーの變更を意味するものではなく、あくまで階級鬪爭を基調とし無產者の黨として解放運動を展開するための工作の一態樣にほかならぬ」（三五年秋社大黨第三回大會）と態度を豹變せざるをえなかつた。すなわちスローガンだけでも軍備縮小・資本主義的帝國主義的侵略政策の廢絕・反ファシズムをかかげることを餘儀なくされ、さらにその後の鬪爭の

波の昂揚により總同盟幹部をして全國支部に賃上闘爭の指令を發することを餘儀なくされたのである。このほか當局より東京交通勞働組合（東交）の帝都ゼネ・スト計畫として逆宣傳・彈壓の材料にされた一九三七年東京地方交通產業のストライキの昂揚のごとき、事實は東交の働きかけをまつまでもなく自然發生的に勃發し、かえつて未組織の職場のストライキが東交にもちこまれた結果にすぎず、合法左翼組合としての東交は單に大衆に追隨したにすぎなかつたのである。

かくのごとく廣汎な大衆の日常的不滿の爆發と社會帝國主義者たちの指導力の無力さと追隨性は、左翼革命勢力の衰退による後者の利用意義の消滅化とともに、支配階級がわにとつてもはや合法組合の意義と役割をすら無用と感ぜしめ、右翼組合ボスや改良主義幹部にかわる警察的官僚的權力の直接支配を決意させるに充分であつた。かくてこの前後に勞働爭議における警察官吏の調停の年々の激增（調停件數中それの占める比重は三五年五五％・三六年六〇％）と、巨大軍需工場に於る事實上の爭議の禁止すなわち會社當局と爭議團との直接交渉の禁壓と警察當局の兩者の交渉における指導權の掌握、あるいは海軍工廠における「自由平等を基調とする勞働契約思想を徹底的に排擊し積極的犧牲の精神的努力」を强調する工員規則の改正、一九三六年陸軍工廠勞働者の勞働組合加入の禁止等々——あらたなる權力的支配の事態があらわれきたるにいたつた。

以上のべたように當時支配階級から呼稱されたこの準戰時體制の意義は、日本の二重の帝國主義が自己を維持强化するために、すでに口火をきられた侵略政策のよりあらたなまた擴大された規模での遂行と、同時にそれを獨伊のファシズムとのすびつきの上に、世界史的な侵略戰爭として展開すべき準備期たるところにあつた。したがつてこの時期は支配階級がプロレタリアートをもふくめた日本國民をその帝國主義的奴隷化政策の手先たらしむべく全力をそそいだ時期であり、それをはたすべく日本の社會帝國主義が本質的に無力なことをきとつて直接絶對主義權力がプロレタリアートの前面に進出し對決するにいたつた時期でもあつた。こうした事態に面して國際的國內的に課せられた世界史的任務を解決すべく、まさに日本の人民戰線問題が日程に上されてきたのである。

III　人民戰線運動の展開

以上のごとき事情のもとに現實的に日本の人民戰線問題が登場しきたつたのであるが、ここで何よりも重要な點はこの運動の主體たるべき本來の組織的勢力が無力化されているという特殊事情であつた。すなわち日本共產黨は政府のテラーとスパイの破壞とによつて完全にその勢力をよわめられ、コミンテルンをしてとくに「日本の黨が今後不斷の勝利を獲得せんがためにはセクト主義の殘滓を斷乎として一掃し、一切の合法的機會を眞に利用して勞働者階級の日常利益のために闘爭しなければならぬ。これは同時に黨の政治上および組織上における强化の先決條件である。この條件が存在してこそはじめて反動勢力にたいする反對へと勞働大衆を導引することができる」（ピーク「第七回大會報告演說」）との忠告を發せしむるでいの狀態に沈倫していたのである。人民戰線の核心となり推進力となるべき左翼革命的プロレタリアートの組織のこのような劣勢は、人民戰線の問題においてたちまち致命的缺陷を曝露せしめずにはおかなかつた。この時期において左翼革命勢力は合法的小新聞雜誌（生きた新聞・ズドン・文藝街・時局新聞等）によつてわずかに文筆的宣傳活動をおこなうにとどまり、大衆の不安と動搖・闘爭えのたちあがりを組織し統一するだけの能力

ほとうてい有さなかつた。したがつて今や人民戰線の問題が闘爭目標としてかかげられたときも、その主導力たるべき革命組織の無力のために理論的實踐的にこれが歪曲されねじまげられてゆくのをいかんともすることができなかつたのである。

元來日本の勞働者運動においてファシズムにたいする闘爭が運動のスローガンとしてかかげられたのはすでに十年も以前のことであつて、しかもファシズムと日本の二重の帝國主義にたいする理論的分析の缺如ないし不充分は、兩者の明確な歴史的本質的差別を把握しえず單純に軍事的封建的帝國主義をファシズムにぬりつぶし、もつてその壓迫をファシズム＝金融獨占資本の壓迫にふりかえ、大衆に支配階級反對の闘爭を對資本の闘爭とあやまつて理解せしめ、したがつて反ファシズムを有名無實の空題目と化せしめる傾向がすくなくなかつた。ここからたとえば「勞働組合の主要目的はいふまでもなく勞働條件の維持改善である。ファッショ反對闘爭のごときは副次的な枝葉問題にすぎないから、その枝葉問題で意見の一致をみたからとて」（一九三五年十二月五日總同盟大阪連合會機關誌）「左翼と提携してまで現狀とたたかわんと欲せず」（一九三五年十月總同盟關東同盟大會）というがごとき奇妙きわまる論理が平然と横行したのである。

しかしまえにのべたごとく準戰時體制下における社會經濟情勢なかんづくプロレタリアートの狀態および二・二六事件・メーデー禁止・陸軍工廠從業員の勞働組合加入禁止・爭議およびその他の運動にたいする彈壓の強化・言論思想出版の自由にたいする極端な制限・國際的諸事件等々は、大衆にとつてますますたえがたい苦難と壓迫とをかんじさせ、くわうるにフランス・スペインの反ファッショ人民戰線の勝利とその宣傳はかれらのあいだに反動攻勢えの強力な對抗組織の必要をみとめさせるにいたつた。とくに共産黨の衰退以後階級闘爭主義をかかげて左翼的大衆をその傘下にあつめたいわゆる合法左翼諸組合（全評・東交等）は反動勢力の重壓を眞正面からうけ、その組織えの壓迫は加重されいまや一歩一歩と後退するをよぎなくされたから、強力な人民戰線・統一戰線えの要求はこれらの傘下大衆からもつとも熾烈におこされてきたのである。しかも當時その中心勢力たるべき左翼革命勢力がきわめて劣弱であつた結果、日本の人民戰線運動においてかんがえらるべき組織的中心としては社大黨——日本勞働組合會議の線をおいてほかになく、したがつてこの社大黨——組合會議を基軸として合法左翼諸組合その他の獨立組合・農民組合・水平社・その他大衆的文化團體を統一戰線に組織し、廣汎な未組織勞働者・農民・都市小市民をその周圍にひきつけ・反動勢力とたたかうことが當面の組織的戰術的課題とされた。しかるにこの中心勢力たるべき社大黨——組合會議が明白な社會帝國主義者によつて牛耳られている實情は、この組織的統一化に於て上からの努力はとうていのぞむことができず、ただ下からの大衆の要求および壓力を強化促進することによつてのみその達成をのぞむことができた。かくてこの運動の推進力たる役割は、全評・東交等の合法左翼諸組合および農民組合の肩上に課せられたのである。それでは當時これら合法左翼はかかる役割にたえうべき能力を有していたであろうか。かれらは街頭的にこそはなばなしかつたが「工場的基礎においてどれだけ強靱であるかという點に重大な缺點をもち」（全勞統一全國會議運動方針）、組織的實體はきわめて動搖的であり、力關係において右翼諸組合に比していちじるしく劣勢であり、しかもそれが右翼組合幹部たちとのあいだに理論的個人的感情的に對立意識をふかめていたという事實は、かれらの爾後の役割と動向とを根本的に制約せずにおかなかつたのである。

このような當時の組織的勢力の實情の上に人民戰線運動はともかく展開されていつた。この運動の具體的展開はまず勞働戰線の統一要求としてあらわれ、一九三五年四月大阪港南地區の總同盟・全勞の職場大衆（十五工場四千六百八十人）の下からの戰線統一の要求はこの運動の口火をきり、たちまちにして全國的な下からの要求としてもり上つた。かくて七月には兩組合幹部の合同協議會が開催せられるまでに進展したが、合同範圍・役員・財政問題で暗礁にのりあげ、結局「新組合成立と同時に日本交通勞働總連盟・東京市從業員組合その他（全評は除外）の可能なる範圍の合同を可及的速やかに實現する」という條件で一九三六年一月單獨合同をおこない、全日本勞働總同盟を成立せしめた。このことは大衆の下からの全國的戰線統一の要求をたくみにふみにじつたものであり、人民戰線實現の第一歩を蹉跌せしめたものであつた。

さらに政治戰線においては一九三五年八月東交の「社大黨を中軸として、ファッショ反對の明白な旗幟のもとに社大黨以外の階級的勢力をイザコザいわず卒直に全部を統一すること」（日本交通勞働新聞）という提案にはじまり、一九三六年二月總選擧における大阪勞農團體協議會（全評・大阪市從業員組合・大阪木材勞働組合・全國水平社・全國農民組合・大阪消費組合・勞農救援會・新興佛教青年同盟等）の社大黨支持の事實に具體化し、この年二・二六事件の勃發・軍部勢力の全面的進出は社大黨の線えの戰線統一機運を一そう促進し、たとえば全國農民組合内の社大黨支持機運の醸成、地方における同年五月の岡山地方無產團體協議會の下からの戰線統一の主張とそれによる社大黨支部結成、そしてスローガンとして最初の人民戰線結成の表明、その後奈良・鹿兒島・三重・長野・北海道等々のあいつづく無產團體協議會形態から社大黨支部結成えの動き——等々となつてあらわれた。ここで注意すべきはこれらの社大黨支持ないしは支部結成えの動きが社大黨の綱領・運動に贊成したからなのではなくて、反動勢力との闘爭のための必要、とくに戰線分裂による勢力の弱化を克服せんとする意欲からでたものであつたということである。

しかるにこのような地方のそして下からの運動の進展にもかかわらず、中央においては逆に勞農無產協議會が社大黨と對立する傾向をしめしはじめた。すなわち東交・全評・關東消費組合連合會を中心として組織せられた勞農無產協議會は、單なる共同闘爭組織から二・二六事件後の戒嚴令下の府議戰にそなえて政治結社えと發展し、しばらくのあいだとはいいながら政黨として社大黨に對立し、そのあいだに摩擦、對立を隨處に惹起し、かくて社大黨による戰線統一というこれまでの運動方向に逆行するような傾向をしめしたのである。このため勞農無產協議會の内部自體から參加團體の離脱をみ、その自己批判を要求せられるにいたつた。この結果方針をあらたにするため一九三六年七月一應解體が決議され、あらためて同名の勞農無產協議會が再結成された。この勞農無產協議會はみずから「反ファッショ統一戰線の推進力」たらんとし、全國の社大黨より門戸をとざされた無產團體・勤勞大衆を組織し動員すること・社大黨その他の無產團體の共同闘爭により反動勢力の强權と重壓のもとにあえぐ勤勞大衆の生活のための果敢な闘爭を展開すること・社大黨が門戸を開放すればいつにても合體解消すること——等々を宣言した。しかもこれにたいして社會帝國主義者たちはあくまでこれら左翼との提携を拒否し、勞農無產協議會もまた社大黨との對立機運をしめし、かくて勞農無產協議會の社大黨えの無條件合同提議も簡單に一蹴せられてしまつた。じつにこの當時社大黨指導部は、「わが國のファッショは合法的な上からのファッショで下からのファッショの急追なく、しかも人民戰線の戰略體系が共產黨の全面的進出方略としての妥協政策たる點と、さらに反ファッショ闘爭における人民戰線と國民戰線な

る二大陣營の結成による觀念的鬪爭がわが黨の反ファッショ鬪爭の具體的戰略と相容れず」（社大黨一九三六年全國大會宣言）、要するに「人民戰線運動はわが國社會勢力を無視せる非現實的鬪爭」（社大黨運動方針）なるゆえにこれを排擊する——というきわめて非階級的な態度を固持したのである。そのため社大黨と勞農無產協議會の間・あるいは總同盟と合法左翼諸組合とのあいだに共同鬪爭すらおこなわれえなかつたのも當然であつた。そしていまや勞農無產協議會は戰線統一を一應斷念せざるをえず、「社大黨との合同は勞農無產協議會を全國的政黨に發展せしめ、その壓力をもつて强力的に合同運動をすすめるべきである」となして日本無產黨に改組し、あらためて社大黨に對立する政黨として自己を確立し、みづから統一戰線をはるかかなたにおしやつてしまつた。かくのごとく反對勢力の重壓と大衆の廣汎な不滿と動搖の條件のもとで戰線統一が下から要望されながら、一方では社大黨指導部の社會帝國主義的性格と、他方合法左翼諸組合指導者たちの野心家的自己中心的性格とは、大衆のもつ非民主主義的性格や自主性の缺如とあいまつて日本の人民戰線運動を完全に歪曲し破綻せしめ、かえつてあらたなる組織的對立抗爭をうみだしてしまつたのである。

しかしかかる人民戰線運動の一應の破產にもかかわらず、一九三七年に入つてからの大衆の自然發生的鬪爭の激發とりわけ八幡製鐵所の賃上爭議をキッカケとする全國的なストライキの波の昂揚は、一方では東京市從業員の賃上爭議における社大黨・總同盟の態度や組合會議のメーデー自發的中止の聲明にみられる如き社會帝國主義幹部の明白な反階級的態度をのりこえ、他方では自然發生的鬪爭の激化に追隨して鬪爭の指令を發するというごとき合法左翼指導部の大衆追隨主義をもふみこえ、旺盛なる大衆の左翼化と進出ぶりを提示するに至つた。この鬪爭の波の昂揚の中からふたたび眞實の統一戰線をうみだすべき可能性があらわれきたつたかとおもわれたのであるが、危機を察知した支配階級の同年七月のあらたなる大規模な中國侵略戰爭の開始は、この大衆の鬪爭力の昂揚も戰線統一の運動をも一擧にしてたたきつぶし、一さいの人民戰線の基盤をあらいながし、ここに野蠻なる警察的軍閥的天皇制の支配がまえにもまして全勞働者運動をおおいつくすこととなつた。

IV　總　括

滿洲侵略行動の一時的な成功は景氣の回復に役だちはしたが、しかし一九三五年ごろより滿洲における軍事行動の一應の終熄と輸出貿易のゆきづまりから發したインフレ景氣の停滯は、ながい苦難の生活ののちようやく前途にあかるい希望をのぞみかけはじめた大衆をふたたび不安と動搖えみちびかざるをえなかつた。かかる大衆の動搖の上に從來の政治形態とくに既成政黨の無力と腐敗の曝露・超國家主義運動のがわよりする現存制度にたいする攻勢的批判等の事實がくわわつて、一九三六・三七兩年の總選擧における社大黨の飛躍的躍進という現象があらわれた（第三十七表）。しかも注意しなければならないのは、社大黨自體まつたく社會帝國主義者の支配下におかれ、かれらは現在の大衆の不安と動搖とが二重の帝國主義にもとづく侵略戰爭に由因することを曝露せず、かえつてこれを是認した上で大衆の動搖に便乘して革新——軍事的封建的帝國主義ないし國家資本の强化を意味する——を强調したという事實である。社大黨の外面的躍進こそは眞の革命的階級的組織勢力をうしなつた廣汎な勤勞大衆が、のこされた唯一の運動形態としてこれに希望をかけた直接の結果なのであつたが、この社大黨の指導分子はもはやかかる大衆の意欲を達成するた

表七十三　第

黨政產無と學選總

1. 1936年

	立候補者	當選者	得票數
社大	30	18	518,844
無產各派	8	6	14 ,563
合計	38	24	665,407
2. 937年			
社大	66	37	928,934
無產各派	6	1	81,367
合計	72	38	1,010,301

れたかぎり、それにたいする防衛が當然に先進諸國の反フ
とにもとづいてたさねばならなかつた。かくて人民戰線がこの國にもさけばれそれぞれの努力がなされたのである
が、しかしこの場合理論的には日本の反動勢力をヨーロッパにおけるファシズムと同視し、日本のそれが二重の帝國
主義とりわけ天皇制を基軸とする「似而非軍事的ファシズム」たることが理解されず、したがつて闘爭目標が確立さ
れず、ハたすら「反ファシズム」、「戰線統一」がお題目としてとなえられたこと、また實踐的には左翼革命勢力が地下
ふかくおいやられこれらの闘爭の核心となり推進力となることができず、したがつて戰闘的大衆をその傘下にもつと
も多くあつめた合法左翼が下からの壓力によつてこれに代位しなければならなかつたこと——これらは最初から全運
動に致命的弱點と缺陷とをあたえたのである。すなわち左翼社會民主主義者たる合法左翼の指導者たちはその日和見
的・野心家的性格にわざわいされて徹底的に大衆の共同闘爭を推進せしめることができず、いたずらに直譯的理論と
めに斷乎として反動的帝國主義支配とたたかうだけのなんらの勇
氣も信念も性格をもたなかつた。
したがつて指導者たちの野心家的な進出にもかかわらず、大衆
の不安と動揺はなんら解決をみることができず、かえつて日に日
に加重するろこつな二重の帝國主義の反動攻勢にたいして廣汎な
統一戰線の結成の必要が痛切にかんぜざるをえなかつた。しかも
この反動攻勢が世界史的なファシズムの進出とむすびついてなき
の反ファシズム闘爭の一環としてその人民戰線戰術の經驗と教訓

仰々しいかけ聲の濫發におわり、日本における統一戰線の主體たるべき社大黨——組合會議のもとの大衆を共同闘爭
にまきこむことができず、他方で又この國のあらゆる團體の非民主主義的組織・合法左翼諸組合と右翼諸組合との勢
力關係のいちじるしい差違は、この下からの大衆的要望の幹部への壓力をいちじるしくよわめざるをえなかつた。ま
た社會帝國主義者たちはこの運動を頭から否定してもその地位になんらの脅威もかんぜず、むしろ統一戰線結成こそ
は一方でその支配下のねむれる大衆の眼をさましかれらを左翼化せしめる危險と他方で官憲資本家がわのかれらにた
いする態度を硬化せしめその間の協調・取引を不可能ならしめる危險とが豫見せられたから、かれらは逆に積極的に
統一戰線および人民戰線の成立を破壞することに努力をはらつたのであつた。

このようにして一九三五——三七年の日本における人民戰線運動は、現實的にプロレタリアートの闘爭史上なんら
みるべき成果をのこさずにおわつた。ただ絶對主義天皇制の反動攻勢が思想統制・文化統制の面にもつとも強烈かつ
あらわなかたちであらわれたかぎり、それは廣汎な小ブル・インテリゲンチァにもつともはげしい不安と動揺とを與
え、この方面に種々の「人民戰線」的企圖と論議とを出現させたことは注目すべきであつた。しかし一時はジャーナ
リズムをおおわんとするかのごときこれらの動向も、それがよるべき組織的地盤と大衆的實體と政治的背景とをもた
ないかぎり所詮根なし草たるにすぎず、次章にのべるごとく支那事變の開始とともにたちまち粉碎されおしつぶされ
る運命にあつたのである。

第十一章　支那事變と勞働者運動の分解

（一九三七——三九年）

I　事變と勞働團體の變貌

すでにのべたごとく世界恐慌を契機として尖鋭化された内的危機を對外侵略戰爭によつてきりぬけ、さらに軍需インフレーションによつてその經濟機構の維持と强化をはかつた日本の支配階級は、この軌道の上に自己を維持發展せしめんがためには、たえず擴大された規模においてその對外侵略と軍需インフレーションの政策をおしすすめなければならなかつた。したがつて滿洲における軍事行動の終熄とともに必然的にその内的諸矛盾が激化しはじめるや、たちにあらたなる擴大された對外侵略戰爭えとみずからをおいやらざるをえなかつた。一九三七年七月北支における軍事行動の開始はまさにこれをものがたるのである。しかもこの危機よりのあらたなる脱出策はけつしてその内的諸矛盾を解決したものではなく、外的壓力によつてこれを一時おさえつけたものにすぎないから、何らかの契機があたえられればこれはいつでも爆發しうる狀態におかれていたわけである。

それでこれを爆發させないためには、なにより國内の危機的要素たるべきものにたいする一そうの上からの抑壓を必要とする。まえにものべたごとく日本の社會民主主義は革命的左翼にたいする對抗的役割以上の廣汎な任務や役割をもたなかつたから、革命的翼の衰退とともにその意義がしだいに消失してゆくことは必至であつた。對外侵略が擴大されるのに比例して、絶對主義の直接的支配が全面的に展開されてゆき、とくに一九三七年の中國にたいする大規模かつ本格的な侵入の開始はまさにこれを決定的に推進した。いずれにせよこのような事情は必然的に一さいの勞働者運動にたいして決定的影響をあたえずにはおかない。それは眞先にまず戰爭開始とともにはじまつた社會帝國主義者たちの特徴的な態度に集約化されてあらわれたのである。

まず社大黨は、事變開始とともにいちはやく安部委員長をして擧國一致に積極的に參加すべきことを表明せしめ、さらに公式に「支那の植民地化共産化を絶滅することによつて日滿支三國を樞軸とする極東新平和機構を建設し人類文化の發展に貢獻せんとする支那事變は、日本民族の聖戰である」（一九三七年社大黨戰時下運動方針）と、この侵略戰爭えの積極的是認と支持とを表明するにいたつた。そしてこの見地から、從來「階級的利害を强調したのはわれらの運動が階級的利害に終始するにあらずして全國民の全勤勞大衆の發展と成長とを願望し達成せしめんがための一過程方策にすぎず、われらは今こそ十數年の成果を集結して日本國民の生命性と永遠性とにたいし全責任をおうことこそ、われらに課せられた本來の使命でなければならぬ」（社大黨綱領改正理由）と、もはや表面的にもプロレタリアートの組織たる事を決定的に放棄し、「我黨は國體の本義に基き日本國民の進歩發達を圖り、もつて人類文化の向上を期する」となした。かくてこの黨は、いまや擧黨一致勤勞報國をスローガンとして、出征軍人の歡送迎・出征軍人の家族の救援・國防獻金の募集・國民精神總動員運動えの協力・さらには「アメリカ官民に事變の眞實を說くために」組合會議と共同で鈴木文治・阿部茂夫をアメリカへ派遣する等、もはやプロレタリア的性格の一片をも存せぬまでに支配階級

に同調したのである。

このことは日本勞働組合會議についても同樣であり、「われらは過去において勞働階級を共產主義の魔手より防衛するために、果敢なる鬪爭をつづけてきたが、いまやすすんであらゆる陣營をその觸手から切斷し、全大衆を勞働報公の精神の中に淨化結集すべき任務をもつ。いま國運を賭する日支事變の前途をおもうときわれらまた憂國の衷情きんじあたわざるものがある。われらの使命は勞働による報國の達成、われらの期するところは萬民共榮の擧國的體制の實現（一九三七年十月日本勞働組合會議第六回大會宣言）——と、それは聲を大にして擧國一致と勞働報公の歌をうたいだしたのである。その基軸をなす總同盟のごとき、年度大會において「われらは今次事變中の勞資紛爭をあげて平和と道義の手段に訴えて解決し、すすんで全產業にわたり同盟罷業の絶滅を期す」と、支配階級えの誠心誠意の衷情をひれきするにいたつた。

これらにたいしてなおわずかながらも階級的地盤をまもりつづけた合法左翼の動向はどうであつたか。これら諸組合もおそいかかつた激浪の力のまえには屈服せざるをえず、消極的にはその活動を停止し（日本無產黨・日本勞働組合全國評議會）、積極的には從來の態度を誤謬なりとして否定し（東交・東京市從業員組合・日本交通勞働總連盟）、あるいは「產業人としての自覺の上にたちて積極的に產業に協力し銃後における國民的義務を忠實にはたす」（日本交通勞働總連盟綱領改正理由書）ことをちかい、あるいは「健全な勞働組合主義」えの轉向を表明した。

このように事變を機とする急激な社會情勢の變化は、日本の社會帝國主義から社會民主主義にいたる一さいの運動をしてそれが從來わずかでも有していた意義と役割をほとんど完全に消失させるにいたつた。いまやこれらがその地位を維持するためには、全面的にかつあらわなかたちで絶對主義的反動勢力のまえに追隨し隷從せねばならなくなつた。しかも重要なことは、絶對主義權力の全面的發動と排外主義的超國家主義教育の强化とくに「戰爭」の國民にもたらす異常な心理的影響等が、數年來の社會帝國主義者たちによる國家の超階級性・官憲の第三者的公平の宣傳とむすびついて、ここに顯著な效果をしめしはじめたことであつた。國民はすべて「暴支膺懲の聖戰」にたいし無條件的協力をちかわせられ、さらに「時局の重大性を認識」してひたすら自肅自戒・滅私奉公の誠をつくすことをちかわせられた。要するにプロレタリアートをはじめ人民の多くは反動的日本帝國主義者の東洋奴隷化政策の完全なてさきと化せしめられたのである。

かかる勞働團體の變貌とともに、事變前夜まで急速に昂揚したプロレタリアートの鬪爭の波も突如として低下し、一九三七年上半期の爭議數千四百五十五件十八萬一千五百三十一人（內ストライキ四百八十一件十萬九千七百四十九人）であつたものが、下半期には七百七十一件三萬二千九十一人（內ストライキ百四十五件一萬三千九百八十一人）とおどろくべき急落ぶりをしめしたのである。しかもこの波の低下は、量的な減少のみならず質的變化をも意味し、たとえば要求事項においても賃銀値上のごとき積極的攻勢的なものより解雇反對・解雇者復職・退職手當支給のごとき消極的なものに一變し、その範圍も全產業的規模より一部の不急平和產業面に限定され、かかる初步的鬪爭すらも細々と殘存しうるにすぎない狀態と化した。

II　日無・全評の結社禁止

1　日無・全評の結社禁止

このようにして中日戰爭は絶對主義の强權支配を全面的に開展せしめ、支配階級と被支配階級とのあいだに介在する一さいの組織と指導を不用のものたらしめた。したがつてそれらがおそかれはやかれ排除せらるべき運命にあることは必然の論理であり、それがまずもつとも存在理由の喪失した組織から開始されることも自明であつた。一九三七年十二月十五日のいわゆる「人民戰線派檢擧事件」を機とする同月二十二日の日本無產黨・日本勞働組合全國評議會の結社禁止命令はこれをものがたる。この結社禁止の理由としては表面上「日本無產黨はまつたく勞農派の主義主張にもとづき國體變革の意を有することの確證があがり、またその中心運動目標である反ファッショ人民戰線の樹立はコミンテルンの新方針同樣まつたく共產主義革命へ大衆を動員する手段方法であることが明瞭となつた」（內務省發表）ためであると公表されたが、しかし支配階級の眞の意圖はむしろその司法省發表にあるごとく「コミンテルンの人民戰線戰術以來すべての共產主義者は極力社會民主主義團體に潛入しもしくはその運動を利用すべくつとめているので、警察の取締ないし警戒の範圍もいきおいこれら團體にまでおよぼしてゆかねばならぬ情勢となつてきたことであつて、いまや民主主義自由主義等の思想は共產主義思想發生の溫床となる危險性が多分にある」という點にあつた。換言すればいまや支配階級は、自由主義をもふくめた一さいの民主主義思想と勞働者運動と名すけられる一さいの自主的運動とを地上から一掃せんとくわだてたのであつて、この意味でまさにナチスドイツにおける社會民主黨解散に比せらるべき歷史的意義をそれはもつたということができる。

この點についてなお若干の說明をこころみてみよう。すでにのべたごとく日本の社會民主主義は資本のプロレタリアートにたいする關係においてその支柱たる役割をにないプロレタリアートを委任されたものではなく、革命的左翼にたいする對抗・阻止の關係において意義をもつたにすぎなかつた。それも資本にたいする關係においてのみでなく封建的絶對主義との關係においても客觀的な存在理由を有したのであるが、あたらしい情勢と階級間の力關係の變化の結果、一應現實的な革命勞力が消滅しかわつて絶對主義それ自體が一義的かつ全面的にたちあらわれるにいたるやいなや、いまや本質的に近代的である社會民主主義自體が絶對主義の對立物と化する危險を有することとなつた。かくてこそまえにのべたごとき右翼社會民主主義の社會帝國主義化がおこなわれたわけであるが、社會帝國主義化しえない一部の社會民主主義はいまや不要の否かえつて危險な存在と化してきたのである。それはかつては「安價な支出として培養さるべき價値をもつたとしても、いまや「不要の失費」として單に節約さるべき對象たるにとどまらず、「用ずみ」として廢棄さるべきものとなつた。軍事的封建的帝國主義は自己を維持するために資本家と勞働者という近代社會の階級對立の事實そのものを否定し、すべてを官府と人民、治者と被治者の關係におきかえねばやまなかつた。

以上が日本無產黨・日本勞働組合全國評議會の結社禁止のもつ意義であり、したがつてこれは從來の共產黨彈壓事件とは質的にまつたくことなつたものであつた。絶對主義の專制のまえには近代社會そのものの運動法則、したがつて社會民主主義自體が否定せられ、プロレタリアートの民主主義的自主性はまつたく封じさられてしまい、近代的組織的勞働者運動はこれを機として最後の一片までうばわれてしまつたのである。ひとはここにかつて左翼革命運動にたいする防塞たる役割をもつたゆえにその存在の意義をみとめられてきた社會民主主義が、その社會主義のになつた民主主義的任務を無視しうらぎつてきたむくいとして、いまや自己もろとも民主主義全體の存在をも否定されるにいたつた歷史の皮肉を、ハッキリとみることができるであろう。かくてこの後の勞働者運動はまつたくその本質的意義を

うしない、一方では一身の保身と延命のためにあらゆる媚態をつくし、あらゆるチャンスをねらつて帝國主義權力機構に自己を賣りこまんとする舊指導者の狂態ぶりと、他方では從來の勞働團體の殘存形態の經營によつて自己の地位と生活をもとめんとする一部指導者の悪あがきぶりとが、みられるにすぎなくなつたのである。

III　事變下勞働者の狀態と運動の分解

一九三七年末の「日無・全評の結社禁止」を劃期として社會民主主義の存在自體が否定され、またプロレタリアートがプロレタリアートとして獨自の階級的存在たるを主張するをゆるされざるにいたつた結果、この事件を機として社大黨は勤勞者階級の黨からあらためて「國民の黨」えと「發展」的に解消した。すなわちそれはいう。「階級運動をつうじて資本主義を改革せんとする社會運動の過去の理論を揚棄し、全體主義の理論をもつて、勤勞大衆を中心とする大衆的革新政黨をさらに國民の黨にまで發展せしめなければならない」（一九三八年社大黨全國大會一般方針）と。そしてそれのみにとどまらない。もはや人民一般にプロレタリアートが解消されてその基盤をもちえなくなつたことは、その幹部たちにとつて何らかのチャンスをとらえまたいかなる手段を弄しても、絶對主義專制權力の機構のなかに自己の地位をみいださなければならぬことを意味した。「いまこそわれらは國内におけるあらゆる對立・派閥・相剋を廢絶して眞に全國民の强力なる擧國一致を達成せねばならない。われらはこの擧國一致のために全國民の組織化を目標とする眞の大革新政黨の出現を待望し、これがため己を空うして努力せんとす」（社大黨事變一週年聲明）というとき、社大黨幹部は自分らの幸福とポストとの獲得のためにはいかなるものを利用することをもさけないという決意を表明した。一九三九年東方會との合同問題とそれの役員問題からの失敗は、かれらの思惑の不成功をものがたるものである。

かかる事實は單に社大黨にかぎられたことではない。あらゆる組合の幹部たちもまたいずれもおなじなやみになやまねばならなかつた。一例として總同盟にふれるならば、もはや勞働團體としての具體的行動を放棄したこの組合は單に絶對主義權力の下部組織として機能するのほかはなかつた。一九三八年二月十一日鳴ものいりで開催された總同盟關東同盟ならびに關係事業主主催銃後產業協力大會において會長松岡駒吉は挨拶をのべていう。「（前略）本日は勞資一堂に會するの現實にせつし私どもはいわゆる至誠天につうずるの眞理を體得しますと同時に政府當局ならびに資本家諸君の御支援と御信任にたいして私どもの責任のいよ〳〵重かつ大なることを痛感するしだいであります。（中略）いまは國民のことごとくがあたかも動員令を拜して勇躍戰線にたつていの覺悟をもつて盡忠報國の誠をいたさねばならぬ秋であるのであります。私どもの盡忠報國の誠とは產業平和を確保し銃後の生產擴充に專念しもつて戰を勝利にみちびき、わが帝國を躍進發展せしむることにあるのであります」云々と。ここにいたつてはわれわれはもはやどこに勞働者運動があるのかとうたがわざるをえないであろう。

事變の進行にともなう勞働者運動のかかる慘憺たる潰廢のもとにあつて、日本のプロレタリアートはいまや全體としていかなる狀態におかれたであろうか。その階級的組織と對抗・自主的運動と存在をすべてうばわれ否定されたプロレタリアートにたいして、いかなるほしいままの搾取の强化がなされようと、これをさまたげるものはもはやどこにも存しなかつた。事變以後實際に一人前の賃銀をうるために、かれらの多數は十四時間勞働どころかときには三十六

時間連續作業すらをよぎなくされ、その一人當り平均日給二圓四・五十錢、すなわちきの不景氣時代と何らかわらざる狀態にまで顚落した。勞働者の多くは物價騰貴にたいして徹夜殘業という肉體鎖磨的方法によつてかろうじて實收賃銀の增加をはからざるをえず、このためたとえば「一日就業十八時間三カ月連續作業」やあるいは「午前五時から午後十一時にいたるぶつとおし從業」やさらにまた「一日十九時間勞働」等の實施を廻いでる工場が續出した。かかる超長時間勞働のもとではもはや肉體的な最低限の再生產すら不可能となり、その生活條件の惡化は災害率・缺勤率・移動率・結核罹病率等の急增となつてあらわれた（第三十八表・三十九表）。

しかもかかる狀態の惡化にかかわらずプロレタリアートの一きいの自然發生的抵抗は、一方で「爭議の豫防若しくは解決に關し必要な命令をなし、爭議に關する行爲の制限若しくは禁止をなすことを得」（國家總動員法第七條）にしめされる抑壓强化の線にそつての强力な制約と、他方で戰爭開始とともに急激に擴大された軍需生產部門における熟練工・基幹工の不足とその爭奪によりよりよき條件の職場えの移動という個人的解決のみちがあたえられていたから、

第三十八表

移動率・缺勤率表

		1937	1938	1939
移動率(%)	男	3.86	6.75	6.56
	女	4.90	7.49	10.93
公傷病缺勤率(‰)	男	5.89	6.73	6.58
	女	0.76	0.98	1.98
私傷病缺勤率(‰)	男	24.89	27.94	28.98
	女	28.16	34.02	40.40
事故缺勤率(‰)	男	36.53	49.41	72.25
	女	31.66	44.12	61.64

主要六府縣240軍需工場における厚生省調査

第三十九表

結核罹病率

（罹病率中名千者險保被險保廣健）

		金工場鑛山	機械器具工場
1936	男	10.07 (100)	14.19 (100)
	女	12.36 (100)	26.72 (100)
	計	10.85 (100)	15.34 (100)
1939	男	18.35 (182)	24.20 (171)
	女	21.29 (172)	31.35 (117)
	計	19.26 (178)	24.93 (163)

（　）内は指數

一九三八年度の爭議件數は千五十件參加人員五萬五千五百六十五人（うちストライキ二百六十二件・一萬八千三百四十一人）という數字にまで一擧に低落し、參加人員においてじつに一九一七年以降の最小レコードをしめしたのである。ただこれらの爭議があらゆる抑制策を排除しておこされたということ・賃上要求という積極的內容が大なる比重をしめたこと・重要產業においてとくに多く遂行されたこと（三八年度總件數中機械器具・運輸・化學部門で四九・六%）——等々・は事變直後の前年下半期のそれとはいちじるしく態樣を異にし、勞働團體の變質がなおそのままただちに廣汎な一般大衆の抵抗の消滅を意味しないという事實をしめすものであつた。

こうした勞働者階級の意識的運動と無意識的運動との矛盾、すなわち上層の意識的組織運動がいちはやく變質し轉向したにもかかわらず下部の廣汎な自然發生的運動が繼續され殘存したという事態のくいちがいは、翌三九年にいたつて顯著に表面にあらわれた。長期戰遂行のための生產力擴充をめざす種々の勞働政策（從業者雇入制限令・賃銀臨時措置令等々）はかえつて消極的な個人的經營外的解決を困難ならしめ、プロレタリアートをして積極的に經營內的團體的解決にたちむかわしめたから、大衆の廣汎な不滿と抗爭は隨處にあらわれ、三九年度には爭議件數千百二十件・參加人員十二萬八千三百九十四人（うちストライキ三百五十八件・七萬二千八百三十五人）と著增した。ただこうした自然發生的な抗爭のたかまりも、それがもはや組織的な指導をうしなつている點で質的に以前のそれとはことなるものであつた。戰爭の擴大は多くの基幹的成年男子プロレタリアートを軍隊にうばいさり、これにかわつて生產力擴充のため百萬にあまるあらたな勞働力（おもに農村出身未經驗工と婦人・幼少年工）をこの陣營になげいれたから、これは他方で勞働團體勞農政黨の變質とあいまつて、すべての運動に强力な組織的指導を缺如せしめる最大要因とな

るにいたつた。このためこの當時組合の關與せる爭議が穩健かつ比較的短期に解決してゆくに反し、未組織大衆の自然發生的爭議が强力かつ長期にわたつてたたかわれるという珍現象さえ發生した。

このようにこの時期の勞働者の抵抗は組織力の指導性をうしなつて積極的意識的な性格をほとんどもたなかつたのであるが、しかしこれといえども長期戰準備のため生產力擴充增强を無條件的に必要としていた支配階級にとつてはなお遺憾きわまりないものであつた。より大規模な戰爭準備をすすめなければならないかれらには、單にこうした下からの運動のみでなく、缺勤率・移動率增加のごとき消極的反抗すらも、それがいやしくも生產力にマイナスの影響をおよぼすかぎり大なる脅威であり障碍であつた。それでかれらはそれに對處するため一方就業時間統制令・賃金統制令・工場事業場管理令等の法制約手段と、他方で產業報國會運動なるものを發案し實行した。そもそもこの產業報國會運動は、一九三八年はじめにうまれた協調會內「時局對策委員會」の「勞資關係調整方策」として提唱されて以後、しだいに大きくクローズ・アップされはじめたのである。

いまこれを發生史的にみれば一九三三年日本產業勞働クラブにまでさかのぼりうるのであつて、同クラブは綱領に「われらは自己の本分をつくして公正なる勞資關係を確立し、もつて產業報國の實をあげんことを期す」ことをうたつて出發し、產業報國を勞働運動の中に始めてもたらしたのである。しかし上からの運動對策として支配機構に正式にとりあげられたのは一九三七年十月愛知縣における「時局對策勞資調整策」（荒川案）を最初とする。これは「產業は國家民族發展のために存すべきことを嚴肅に認識し、かかる道義の上に立脚するときは勞資みずからこの目的のために共同參與すべき權利と義務とを有することを識るにいたるべし。產業協力勞資一體の原則はまさにかかる見地より理解せらるべく、吾人は平時の勞資一體の理想を實踐にうつしてこの方策を實行せんとす」というのであり、後にこの案は愛知縣警察部の公案となつたが、協調會案が發表されるにおよんで保留されることとなつた。かくして前記協調會案がうまれきたつたのであるが、その指導精神なるものは「產業は事業者從業員各自の職分によつてむすばれた有機的組織體であり、しかも產業究極の使命は產業の發展によつて國民の厚生をはかり、もつて皇國の興隆・人類の文化に貢獻することである。かかる使命の達成にあたつて兩者はまさに一體とならねばならぬ。すなわち事業者は經營に關する一切の責に任じて從業員の福祉をはかり、從業員は產業の發展に協力し、事業一家總親和の精神を昂揚しもつて國家奉仕のために各々の職分をまつとうしなければならぬ」というにあつた。

この運動はかくて勞資一體・事業一家・產業報國の理想をかかげて階級鬪爭の思想を排擊し、事業者は從業員にたいして子にたいする父のごとくその經濟的かつ文化的の生活の保護指導にあたるべきとなし、その組織は社長・工場長または事業主を會長とする事業主・職員・勞働者の一體組織たるべく、運動の主眼はもつぱら產業報國精神の涵養という精神的方面とともに能率增進・技術の練磨・その他待遇福利共濟等の問題にそそがれた。右の趣旨にもとずき全國の工場事業場に產業報國會を設置せんとするのである。

右のごとく產報運動なるものはその眞の意圖がどこにあるにせよ、一種の精神運動・生活刷新運動たる以外のものでなかつたから、當初のうち資本家も勞働者もほとんど積極的な態度をみせず、ただ勞働者運動のゆきづまりによつて保身と延命に汲々たる一部舊指導者たちの利用對象とされたにすぎなかつた。しかるに前記のごとく事變の進行による勞働者の狀態の全般的惡化が移動率や缺勤率の激增となつて生產能率の低下をひきおこし、他方で三九年度爭議

の著増となつて勞働者の下からの抵抗をひきおこすや、この産報運動はいまやあらたな社會的重要性をおび、あたらしい見地から再出發すべきことが要請されるにいたつたのである。

IV　總　括

中日戰爭——これは日本帝國主義の發展の必然的産物であり、これを劃期として支配機構の前面にのりだした絶對主義の軍事警察的支配のもとにあつて、プロレタリアートはその階級的存在としての意味すら否定されるにいたつた。おそるべき危機の發端にたつた絶對主義にとつては、基本的階級構成の單位としての勞資關係が無視され、むしろすべては治者と被治者の關係・「お上」と人民との關係に還元されねばならなかつた。かくて勞資二階級はいずれも「陛下の赤子」とされ、したがつてプロレタリアートの運動・勞働者運動もまつたく存在の餘地はなくなつた。一九三七年末日無・全評の結社禁止は、まさに全勞働者運動に最後の一撃をくわえたものにほかならなかつたのである。これによつて社會民主主義のいかなる形態における存在も實際上否定抹殺され、プロレタリアートの階級的獨自性もまた抹消され、それはいまや完全にはだかのまま狂暴な帝國主義的軍國主義のむちのもとにさらされるにいたつた。

かくて事變の進行とともに、プロレタリアートの强行的搾取と奴隷的酷使とをぶせぐなにものも存在せず、かれらは擧國一致と滅私奉公のスローガンのもとにあたかも牛馬のごとく工場・事業場にかりたてられねばならなかつた。しかもかかる奴隷的虐使の中から、支配階級は同時に大侵略政策の遂行・より大規模な戰爭準備のための無限の生産力の擴充・生産能率の强化をはかるを餘儀なくされた。こうした二律背反的課題の解決のためにうちだされたのが、いわゆる産報運動そのものであつた。この産報運動が最初の消極的性質のものから戰爭政策の不可分の一片としてより積極的なものへと再編成を要請されはじめた過程は、同時にその一きいの存在理由と社會的役割とを喪失せしめられた社會民主主義・社會帝國主義の舊指導分子が自己の保身と延命のために支配機構の中に何とかあらたなるポストをみいださんとして、いわば生きんがための切實な努力をあらわにしだした過程でもあつたのである。

第十二章　産業報國運動と勞働團體の解消

（一九三九——四五年）

I　長期戰と再編成

一九三一年開始された滿洲侵略戰爭がほぼ支配階級の最初に意圖したごとき成功的推移をしめしえたとすれば、一九三七年より展開された中國侵略戰爭はその主觀的期待に反し、中國民衆の英雄的抗戰によつて、當初豫想されたより以上の多大の兵力と尨大な軍需物資の消耗とを要したのみでなく、ついに豫期したごとき急速なる勝利に失敗せざるをえなかつた。侵略ぜる軍隊はわずかに中國内に點と線を獲得したにとどまり、中國の抗戰力に決定的な打擊をあたえることができず、かえつてこの戰爭の前途を底しれぬ泥沼にみちびいてしまつた。その上世界史的な全體主義諸國と民主主義諸國との對立の激化・爆發（一九三九年第二次世界大戰の勃發）は、中國侵略戰爭をもこの世界史的對立の一環にまきこみ、もはやその解決は世界史的規模においてでなければ果しえないことが決定的にあきらかとなつた。いまや日本の帝國主義者たちは好むと好まざるとにかかわらず、みずからの體制を維持するために最終的な冒險的大戰爭に突入するを餘儀なくされた。このことはただちに絶對主義權力による國内支配體制の強化と戰爭遂行のための尨大な生産力の擴大發展とを必要とせざるをえないのであつて、一九三九年前後よりやかましくさけばれだした「日本經濟の再編成」はまさに後者の要求を反映するものであつた。

しかし同時にこのあらたな情勢は、支配機構に於る二重の帝國主義の矛盾を表面化させずにはおかなかつた。すなわち眼前の中國侵略戰爭のゆきづまりとそこから不可避的にみちびかれるより大規模な冒險的大戰爭えのみちとは、二つの帝國主義とりわけブルジョアジーに危惧と不安をあたえずにはおかなかつた。總動員法第十一條の利潤制限問題をめぐる對立・齋藤隆夫の議會における反軍的演說・經濟新體制問題をめぐる財界と軍部の對立等々——これらはまさにこの間の事情をものがたるものである。しかしながらこの支配階級内の對立も、じつは軍事的封建的帝國主義の冒險主義の最極端な表明にたいする反對たるにとどまり、いわばその侵略の速度・方法および道程上の問題に關する紛爭たるにすぎず、日本帝國主義がこのみちを不可避的にたどらざるをえない以上その支配體制の内部的相剋は結局なんらかのかたちで解決され統一化されざるをえない。けだしこの紛爭は、ただちに支配機構の弱化を意味し、一方では抗戰國に有利な作用をおよぼしてみずからの戰鬪力を減殺すると同時に、他方で中日戰爭以後絶對主義權力の暴壓によつてプロレタリアートの組織的運動を一應表面から抹殺することをえたにせよ、なおかすかに存在する勞働者・農民・市民・學生のあいだのグループ的な反戰運動・また大衆の勞働狀態生活狀態の惡化による漠然たる不安の潛在等を急速に顯在化し發展させる可能性をもつていたからである。

ところで世界情勢と戰爭のあらたな段階は、まえにのべたごとく積極的に生産力の飛躍的擴充を必要とした。そしてこの點については、必然的に支配階級の從來のプロレタリアートにたいする態度の反省が不可避的となつてきた。けだし從來の支配階級の政策が主觀的觀念的には色々構想されたとしても、現實的には消極的にプロレタリアートの